



実践報告書

「教育に新聞を」実践 高等学校編

- ◇はがき新聞と学年通信でNIE—京都探究で残そう、はがき文化— (兵庫県立伊川谷高等学校)
- ◇新聞活用と総合学科の学び (兵庫県立須磨友が丘高等学校)
- ◇探究活動に向けた新聞活用 (兵庫県立有馬高等学校)
- ◇新聞を活用して社会の諸問題について考える (兵庫県立西宮高等学校)
- ◇NIE×SDG s ×総合的な探究の時間 (兵庫県立三木北高等学校)
- ◇探 Cue 時代を読み解く先に～学びが紡ぐキャリアと地域～ (兵庫県立神戸甲北高等学校)
- ◇思考力・考え方の選択肢を増やすためのNIE 実践 (兵庫県立網干高等学校)
- ◇授業と実生活をつなぐNIE (兵庫県立山崎高等学校)
- ◇地域デザイン類型とNIE 活動の取り組み (兵庫県立播磨南高等学校)
- ◇生徒の世界を広げるためのNIE (兵庫県立洲本高等学校)
- ◇定時制高校でのNIE 活動 (兵庫県立湊川高等学校)

「教育に新聞を」実践 中学校・高等学校編

- ◇ NIE 活動を通じた社会的事象への多角的考察と探究的学習の推進 (甲南高等学校・中学校)

「教育に新聞を」実践 特別支援学校編

- ◇新聞を通して 見る 聞く 知る 伝える力を
身に付け社会とつながる (兵庫県立のじぎく 特別支援学校)

はじめに

兵庫県N I E 推進協議会
会長 竹内 弘明

2024（令和6）年度の実践報告書をお届けいたします。

各実践校の皆様方にはお忙しい中、1年間の取り組み、そして貴重なご実践をまとめていただき、誠にありがとうございました。この実践報告書は24年度の実践校の貴重な実践の記録です。どうぞ今後の取り組みの参考にしていただければと思います。

今年はいよいよ兵庫県でNIE 全国大会が開催されます。

「時代を読み解き、いのちを守るNIE」をスローガンに神戸に多くの方が集います。子どもたちがこれからの先行き不透明な時代をたくましく生き抜く力、その力を育むために新聞ができることは何かを考えます。24年度の活動はこの全国大会を見据えたものも多く、実践指定校で行った新聞記者の出前授業も過去最多になっており、機運の高まりを感じます。

事務局は日々忙殺されながらも鋭意全国大会の準備を進めています。事務局の皆さまには心より感謝申し上げます。併せまして、全国大会に向けては、皆様にもご協力、ご支援をお願いすることとなりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、24年度はメディアの在り方が問われた1年でもありました。

ニューメディアといわれる SNS（交流サイト）は誰もが簡単に素早く、無料で情報を入力できるのですが、報道倫理はなく、情報の信頼性や自分が見たい情報しか見えなくなるフィルターバブルといった課題が顕在化しました。

一方、新聞は最も古いメディアです。さまざまなメディアの登場とともに確かに新聞の購読者は減ってきてはいますが、なくなることはないと思っています。

最も新しいメディアである SNS とは対局にあります。新聞は実直にニュースを報じます。有料ですし、情報が届くのは遅いかもかもしれませんが、正しく公正な情報です。報道倫理に基づき、ファクトチェックをし、さらにニュースとしての価値判断をした上で記事になっています。そしてアナログの新聞は記事が手元に残ります。残るがゆえにいい加減な記事は書けませんし、ミスも許されません。文章を推敲（すいこう）し、何人もの目を経て世に出ます。情報の質が違うのです。

ネットの時代だからこそネットやメディアのリテラシーが求められます。フェイクニュースを判断する批判的思考力も必要です。

新聞を広げるといろいろな記事が目飛び込んできます。新聞を読むことでさまざまな情報に触れ、物事を正しく理解し、正しく判断する力も身につきます。そんな新聞の意義や良さを改めて再認識し、子どもたちに新聞を読んで考えることをしてほしいと思います。

そして、正しいメディアリテラシーを身につけてほしいと思います。

NIE がこれまでコツコツと取り組んできたことが、SNS に振り回されることのないよう、こうした課題にしっかりと向き合っていきたいと考えています。

最後になりましたが、改めて、平素からNIE 活動に取り組んでくださっています各学校、報道各社、各教育委員会の皆様方に心から感謝を申し上げますとともに、今後とも引き続きご尽力賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

<目 次>

巻頭言 「はじめに」	兵庫県 NIE 推進協議会会長 竹内 弘明…………… 1
2024 年度兵庫県 NIE 実践指定校	…………… 4
【小学校】	
社会的事象に対する見方・考え方を広め、 主体的に考え判断する力と伝える力の育成をはかる	神戸市立白川小学校…………… 6
新聞を活用した授業実践～新聞が子供たちの学びを深める～	神戸市立鶴甲小学校……………10
「書く力」をつけ「発信力」につなげる	姫路市立網干西小学校……………14
新聞からはじまる主体的な学び	甲南小学校……………18
情報を活用し、自分の考えをつくる	養父市立宿南小学校……………22
【小・中学校】	
情報活用能力の育成 ～NIE タイムの取組～	姫路市立豊富小中学校……………27
小中一貫校として取り組む 地域を発信する NIE 教育	南あわじ市立沼島小中学校……………31
【小・中・高等学校】	
中学 3 年生と小学 6 年生が伝え合う原爆と平和	愛徳学園小・中・高等学校……………36
【中学校】	
「情報社会」を有利に生き抜く力を養う	神戸市立高倉中学校……………41
NIE ノートを通して、主権者としてのまちづくり	西宮市立浜脇中学校……………45
見つける、調べる、新聞形式にまとめて発表する	神戸大学附属中等教育学校……………49
新聞記事から生活につながる学びを	姫路市立あかつき中学校……………53
【中・高等学校】	
NIE 活動を通した社会的事象への多角的考察と探究的学習の推進	甲南高等学校・中学校……………58

【高等学校】

はがき新聞と学年通信で NIE—京都探究で残そう、はがき文化—	兵庫県立伊川谷高等学校……………63
新聞活用と総合学科の学び	兵庫県立須磨友が丘高等学校……………67
探究活動に向けた新聞活用	兵庫県立有馬高等学校……………71
新聞を活用して社会の諸問題について考える	兵庫県立西宮高等学校……………75
NIE×SDGs×総合的な探究の時間	兵庫県立三木北高等学校……………79
探 Cue 時代を読み解く先に～学びが紡ぐキャリアと地域～	兵庫県立神戸甲北高等学校……………83
思考力・考え方の選択肢を増やすための NIE 実践	兵庫県立網干高等学校……………87
授業と実生活をつなぐ NIE	兵庫県立山崎高等学校……………91
地域デザイン類型と NIE 活動の取り組み	兵庫県立播磨南高等学校……………95
生徒の世界を広げるための NIE	兵庫県立洲本高等学校……………99
定時制高校での NIE 活動	兵庫県立湊川高等学校 ……103

【特別支援学校】

新聞を通して 見る 聞く 知る 伝える力を 身に付け社会とつながる	兵庫県立のじぎく特別支援学校 ……108
--------------------------------------	----------------------

【兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校】

新聞活用を通じた自己決定力の向上	明石市立高丘中学校 ……113
継続的に取り組む NIE 学習	姫路市立飾磨中部中学校 ……117
「神高探究Ⅰ」における新聞の活用	兵庫県立神戸高等学校 ……121

【2024 年度兵庫県N I E 実践指定校】

通常枠 25 校（2025 年 NIE 全国大会神戸大会に向けて 5 校増

◆は継続校 ◇は新規校）兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校 3 校

〈通常枠〉小学校 5 校

- ◆神戸市立白川小学校
- ◆神戸市立鶴甲小学校
- ◆姫路市立網干西小学校
- ◇甲南小学校
- ◇養父市立宿南小学校

神戸市須磨区白川台
神戸市灘区鶴甲
姫路市網干区浜田
神戸市東灘区住吉本町
養父市八鹿町宿南

〈通常枠〉小・中学校 2 校

- ◆姫路市立豊富小中学校
- ◇南あわじ市立沼島小中学校

姫路市豊富町御蔭
南あわじ市沼島

〈通常枠〉小・中・高等学校 1 校

- ◇愛徳学園小・中・高等学校

神戸市垂水区歌敷山

〈通常枠〉中学校 4 校

- ◆神戸市立高倉中学校
- ◆西宮市立浜脇中学校
- ◇神戸大学附属中等教育学校
- ◇姫路市立あかつき中学校

神戸市須磨区高倉台
西宮市宮前
神戸市東灘区住吉山手
姫路市市之郷町

〈通常枠〉中学校・高等学校 1 校

- ◆甲南高等学校・中学校

芦屋市山手町

〈通常枠〉高等学校 11 校

- ◆兵庫県立伊川谷高等学校
- ◆兵庫県立須磨友が丘高等学校
- ◆兵庫県立有馬高等学校
- ◆兵庫県立西宮高等学校
- ◆兵庫県立三木北高等学校
- ◇兵庫県立神戸甲北高等学校
- ◇兵庫県立網干高等学校
- ◇兵庫県立山崎高等学校
- ◇兵庫県立播磨南高等学校
- ◇兵庫県立洲本高等学校
- ◇兵庫県立湊川高等学校

神戸市西区伊川谷町長坂
神戸市須磨区友が丘
三田市天神
西宮市上甲東園
三木市志染町青山
神戸市北区大脇台
姫路市網干区新在家
宍粟市山崎町加生
加古郡播磨町古宮
洲本市上物部
神戸市長田区寺池町

〈通常枠〉特別支援学校 1 校

- ◆兵庫県立のじぎく特別支援学校

神戸市西区北山台

兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校 3 校

明石市立高丘中学校
姫路市立飾磨中部中学校
兵庫県立神戸高等学校

明石市大久保町高丘
姫路市飾磨区細江
神戸市灘区城の下通

【 小 学 校 】

社会的事象に対する見方・考え方を広め、 主体的に考え判断する力と伝える力の育成をはかる

神戸市立白川小学校 校長 長崎 康子
教諭 廣里 英幹

1 はじめに

本校は明治6年に白川村で創立し、その後ニュータウン建設に伴い校舎が移設され、2023年度には創立150周年を迎えた歴史ある学校である。校区内には、ニュータウンの街並みと豊かな自然の両面がある。地域の方は、本校の教育を支えようという熱い思いがあり協力的である。

本年度は、16クラス、全校生376名、各学年ほぼ2クラスであり、子供たちは幼小より互いのことを知っている。言葉を十分に交さなくても分かってくれるだろうという安心感があるためか、表現力が十分とは言えず、トラブルになることも多い。また、多様な考え方に触れる機会も少ない。

子供たちに、相手に分かるように言葉で伝える力や、多面的な見方・考え方、将来たくましく生きていく力を育てたいということが教師の願いである。

そこで、指定校3年目は、「新聞を通して社会的事象に対する見方・考え方を広め、主体的に考え判断する力の育成をはかること」、また「自己決定力の育成」を研究テーマにしている校内研修とも関連させ、「自分で考え判断したことを、適切な文章構成と表現力で伝えること」をめざし取り組むこととした。

2 実践内容

(1) 新聞を手にとって

① 新聞に親しむ

神戸新聞社から寄贈していただいた新聞閲覧台を教室前の廊下に置き、いつでも新聞を手にとれるようにした。休み時間などに興味のある記事を読む子供が徐々に増えていった。

低・中学年においては、コウノトリ、宇宙、オ

リンピック・パラリンピック、SDGsなど教科学習に関する記事や子供たちの関心のある記事などを教室に常掲するようにした。

新聞を眺めながら友達と会話する様子も見られ、新聞を読むことへの関心は高まったと感じる。



② 新聞を比べる

5年生は、国語科と社会科の学習の中で、同じ日の4社の新聞の1面を比較した。新聞によってトップ記事が違う。見出しも違う。トップ記事が占める割合も違う。何日間か比較することで、各社それぞれに記事の取り上げ方に違いがあり、意図をもって掲載していることに気付いた。

そこから「実際に記者のお話を聞いてみたい」「どんな意図をもって記事を書いているのか知りたい」という思いがふくらんだ。そこで次に述べる「記者派遣」の学習につないでいくこととした。

(2) 記者派遣事業 ～ニュースって楽しい！～

神戸新聞社 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーに来ていただき、5年生を対象とした学習を行った。「新聞記者ってどんな仕事？」をテーマに仕事内容についてお話を聞いた。新聞記者は、取材して見聞きしたこと正確に市民に伝える非常に重要な役割を担っていること、大変な

ことも多いがやりがいのある楽しい仕事だということを子供たちは学んだ。

また、よい記事の書き方を教えていただいた。「5W1H を押さえる。キーワードを逃さない」。これは、普段の学習や生活の中でも活かせることである。「相手のリズムに合わせて相づちをうったり共感したりし、聞き上手になること」という聞き方のアドバイスや「素朴な質問を具体的に聞く」「段取りを決めすぎない」などうまく話を聞き出すためのアドバイスもいただいた。



次に、実際に三好さんが担任の先生にインタビューし、次々に話を引き出す様子を見学した。カメラマン体験もさせていただき、「下から見上げるように撮るとよい表情が写せる、手を使っているとところを撮ると写真に動きが入りいきいきした写真になる」と教えていただいた。

休憩時間中に三好さんがこのインタビューを記事にまとめられるという早業に子供たちは驚いていた。写真も入り、まさに新聞記事の出来上がりである。早速、自分たちも記事作りに取り組んだ。まず、インタビューをし合った。



アドバイスをいただいたことを参考にしながら、自分が面白いと思うことを掘り下げて聞き出

していた。そして記事にまとめていった。本物の記者の方に添削していただけたのも貴重な体験であった。最後に、実際に作った記事を見合いながら振り返りをした。「友達の意外なところを知れて面白かった。」「聞くのは楽しいが、それを短い言葉で分かりやすくまとめるのは難しい。」という感想が出た。

新聞記者の方の苦労とプロの仕事のすばらしさを体感できた学習であった。

(3) 新聞を作ってみよう

4年生児童は、国語「新聞を作ろう」の学習のなかで、班ごとに模造紙1枚の壁新聞を作成することとなった。この学習は、学校司書が中心となって進めた。

まず、たくさんの子供向け新聞を並べた。できるだけ写真が多く掲載されているものを選ぶようにした。児童が新聞を読む時間をしばらく取ったうえで、関心のある新聞記事を選ばせ手に取らせた。



次に、班ごとに持ち寄った記事を並べ、どのような1枚に仕上げていくかコンセプトを話し合い、新聞のタイトルを考えた。そして、記事を切り抜き、模造紙上に並べて割付を考えた。構成が決まったら、見出しを付けたり、補足説明を入れたり、色を付けたりと工夫して書き加え、壁新聞を仕上げていった。

「大見出し」「小見出し」をどのような言葉にするか、班で随分話し合っていた。インパクトのある短い言葉を考えることは簡単なことではない。考える際には、実際の新聞を大いに参考にすることとなった。最後に、班ごとに出来上がった壁新聞を見せながら工夫したところを発表し、それぞ

れの新聞のよさを共有した。

出来上がった壁新聞を見合うことでどのような新聞が見やすいか改めて気付くことができた。それと同時に、実際の新聞は、大事な記事を大きくしたり、読みやすく割付をしたりと工夫されて作られていることにも気付くことができた。自分たちで新聞作りをしたからこそ、実際の新聞の作成における工夫を実感することができた。

（４）防災学習

神戸新聞社のご協力のもと、５年生は、約１年間かけて総合的な学習において防災について学んできた。主な取組は以下の通りである。

① 写真パネルを見て

まず、神戸新聞社所蔵の阪神・淡路大震災の写真パネルを目にした。甚大な被害があったことが伝わってくる。近いうちに大きな地震が起こる可能性が高い。「自分たちに何ができるのだろうか」と子供たちは考え始めた。写真パネルが１年間の防災学習の取り組みのきっかけとなった。

パネルは全校生が見学した。１年生にとっては初めて見る写真が多く、担任が「このときはね…」と自分の体験も交えながら１枚１枚説明した。子供たちは多くのことを感じ取りながら黙って写真に見入っていた。

② 遺族の方のお話を聞いて

神戸新聞社 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーのご紹介により、阪神・淡路大震災で家族を亡くされた方のお話を聞く機会をもった。

震災当時のお話は身につまされるものがあった。講師の方がなぜ「語り部」をしているのかを語ってくださった。「震災体験を決して風化させてはいけない、人とのつながりを大切に、希望をもって生きていってほしい」というメッセージを、子供たちは真剣に受け止めていた。

「辛いお話を私たちにしてくださったことに感謝します」「家族がいることを今まで当たり前だと思っていたけれど、もっともっと大切にしたいと思いました」と涙ながらに感想を述べている子もいた。



学習後に書いた子供たちの感想文には、「今後いつどこで災害が起こるか分からない。自分にできることは備えること」「阪神・淡路大震災の被害について知らない人に伝えたい」など書かれ、「命の大切さ」を感じ取ることができた貴重な学習となった。

③ 震災ダイアリーを活用して

阪神・淡路大震災が起こった１月１７日以降の日々を撮影した写真を毎日掲載する神戸新聞の企画「震災ダイアリー」の記事を切り抜き、本にしていく作業を５年生が行ってきた。

「震災ダイアリー」は１冊だけなので、記事をスキャナで取り込み、子供たちが自分のパソコンで自由に閲覧できるようにした。子供たちは、記事に目を通し、３０年前がどんな状態だったのか、それが何日目になるとどのように復興していったのかを想像しながら読んでいた。



時折、帰りの会で一つの記事を取り上げ、話し合いの時間を設けている。運動場で卒業式を行ったという記事に子供たちは「大変な状況の中でも何とかして卒業式をしたいと願っていたのだな」と、とても驚いていた。「神戸新聞が震災を記録

し続けているから昔の様子が分かる。街やくらしを復興させた人たちってすごいと思う」という感想も出された。30 年前に関心をもつことや防災を日々意識することの重要性を感じた。

④ 地域の防災について調べる

さまざまな話を聞いたうえで、最終的に子供たちは自分たちのくらしに目を向けていった。自分たちの地域は、災害に対してどのような備えをしているのかフィールドワークを行い、地域の防災設備を調べた。その際、地域の消防団の方のお話を聞くこともでき、身近なところで地域のくらしを守ろうとして日々努力されている方の存在に気付くことができた。



3 成果と課題

新聞がいつでも手に取れる環境にすることで、児童が自然に新聞を目にする機会が増えた。読めない漢字があったとしても、写真を見たり見出しを読んだりすることで記事の内容はおおまかに分かる。日頃から新聞を目にすることで新聞を読むことに抵抗感がなくなったことは大きな成果である。

記者派遣の学習では、取材とは相手との対話の中から驚きや面白さを聞き出していく活動、つまり主体的に自ら追い求めていく活動であり、それが非常に意義のあることであることを学んだ。自分たちも自ら学び取る学習を進めていきたいという意欲につながった。

また、記事を切り抜いて壁新聞を作成する学習では、コンセプトや見出し、割付について班で話し合う場面がたくさんあり、何とか自分の考えを発信しようとする姿が見られた。研究で目指す「自分で考え判断したことを適切な文章構成と

表現力で伝える力の育成」においては、まだまだ課題はあるものの、活動を通して少し前進できたと感じている。

大きな成果は、震災から 30 年の節目となる今年度、NIE や神戸新聞社のご協力のもと、約 1 年間かけてじっくりと防災学習に取り組むことができたことである。貴重な出会いがたくさんあり、知らなかった事実がたくさん気付くことができた。阪神・淡路大震災の話だけでなく、その後も日本の各地で起こっている自然災害について触れていただいたことで、子供たちは「自分ごと」として災害をとらえることができた。

1 年間の防災学習のまとめとして、「私の提案」を保護者や地域の方に聞いていただく時間をもった。『避難所はこちら』という看板を目立つところに設置しては「公園に屋根付きの避難所をつくっては」など、学んできたことをもとに、大切な命を守るためにできることを自分なりに考えた。「自己決定」し堂々と発言する姿に成長を感じる。また、この学習を通して知らなかった「社会」に目を開くことができたとも感じた。研究テーマ「新聞を通して社会的事象に対する見方・考え方を広め、主体的に考え判断できる力の育成をはかる」に一步近づけたように思う。

教科学習の中で新聞を活用する可能性はいくらでも広がる。子供たちに社会に目を開かせることを目指すためにも、まずは教師が社会に目を開きたくさんのことを感じ取り、それを子供たちにどう出会わせるか今後も創意工夫していきたい。



新聞を活用した授業実践

～新聞が子供たちの学びを深める～

神戸市立鶴甲小学校 校長 酒井 秀幸
教諭 藤岡 敦洋

1 はじめに

本校は、NIE 実践指定校として新聞を活用した研究を始めて、2年目を迎える。神戸市灘区、六甲山の麓のニュータウンとして開発された場所に、全学年各2学級、360人あまりの児童が学ぶ小学校である。保護者はとても協力的で、地域の安全指導や学校行事にも協力的かつ受容的である。一方で、共働き家庭が多く、子供たちは学童コーナーや児童館、放課後の運動場といった場所で過ごすため、ゆっくりと新聞を広げたり記事を読み比べたりする経験が少ない。

そこで今年度、本校では5年生を中心に新聞に親しみ、新聞を身近な情報源として日々の学習と結び付けた取組を進めた。

2 実践の内容

今年度は神戸新聞社から学校図書館に新聞閲覧台を寄贈していただき、本校で購読している小学生新聞を置いて、子供たちの目に触れやすく、新聞を開きやすい環境を整えた。その結果、休み時間や図書の時間に新聞を開く児童の姿が見られ、世の中の動きや出来事に触れる機会が増えてきている。そんな中、特に重点的に取り組んだ活動を紹介する。

① NIE コーナーの設置

子供たちが気軽に新聞に触れられるように、廊下に6紙の新聞を置いてNIE コーナーをつくった。その結果、子供たちは気になった新聞記事を気軽に手に取り、読む姿が見ら

れるようになった。また、小学生新聞も置いているため、一般紙との記事の書きぶりや写真内容を比べる姿が見られた。また、担任がニュースをピックアップしたものを廊下に掲示し、新聞になかなか親しみを持ちにくい子供への配慮を行った。その結果、子供たちは気になるニュースを見つけやすくなり、より時事に関心を高めることができた。



② 新聞を使ったスピーチ（朝の会）

朝の会で、新聞記事を使ったスピーチの時間を設けた。日番の子供は、事前に新聞記事から気になるものを探しておき、自分なりの解釈や感想を所定の用紙に書き、スピーチの準備を行う。そして、朝の会で子供たちからの質問に答えるという活動である。



初めは伝えるだけで終わっていた児童も、繰り返していくことで、記事に関する感想の量が増え、伝えたいことも明瞭になっていった。また、質問する側も、質問の質や記事内容をより深める質問が出せるようになり、継続して取り組んできたことが力に代わっていく様子が実感できた。



子供たちが発表で使用した用紙は、廊下に重ね貼りをしていたためいき、いつでも振り返りができるようにするとともに、子供たち自身が達成感を味わうことができたと感じている。



③ じぶん学習

毎週末に一度、じぶん学習という宿題を行っている。自分の興味がある内容を調べ、専用ノートにまとめるという課題である。5年生では今年度、新聞から興味のある記事を見つけて、それについてさまざまな方法で調べ

る学習に取り組んだ。自宅で新聞を購読していない家庭もあるため、教師側が先述のピックアップニュースだけでなく、teams に児童の興味がありそうな記事をアップし、じぶん学習につなげるような支援もおこなった。



テーマを見つけることに悩む子供にとって、こうした支援は意欲的にじぶん学習に取り組むきっかけとなったように感じる。さらに、「もっと調べたい！」「興味がわいてきた！」という子供は、休みの日に、実際に記事になった場所に行き、本物に触れたり、体験したりする機会につながっていった。

④ 国語「新聞を読もう」

「文章に説得力をもたせるには」NIE コーナーの設置によって、新聞に対する関心は確実に高まってきた。そこで、授業の中でもNIEの具現化を図る学びを模索した。国語「新聞を読もう」の学習では、実際の新聞記事を使って、新聞の読み方を学んだ。見出しやリード文、紙面構成などを知り、より新聞への理解を深め、興味関心が湧いてくるようにした。また同じ内容の記事でも、全国紙と地方紙とで表現の仕方に違いがあることに気付いたり、読み手を意識した表現内容の違いについても確認したりすることができた。そして「地方紙だと、その地にゆかりのある人物の記事が細かく掲載されている」「具体的に取

り上げたい出来事が記事になっている」などの意見が出てきた。このようにして、6紙のさまざまな新聞社の特徴や工夫を子供ながらに確認し、もっと調べてみようという意欲付けに繋げることができた。

また、国語「文章に説得力を持たせるには」では、コラムの記事を使い、その記事に対し自分が「賛成」か「反対」かを決め、理由を考えるという活動を行った。さらに、この活動の終わりには「初め（序論）」「中（本論）」「終わり（結論）」の構成（総括型）を考えて文章を書く練習を行った。その結果、文章を書く際、自分の意見だけでなく、根拠もしっかり組み込んだ活動に繋げることができた。



記事の内容としては、子供たちの興味・関心を引きやすくするために、新聞の投書欄で、同世代の文章を使用することもあった。また、小学生新聞の記事を使って、身近な問題を分かりやすく書かれた記事を読むことで、表現することが苦手な子供も、自分の考えが出せるように配慮した。さらに、SNSの使用制限に関する記事を準備するなど、児童にとって比較的身近な内容を取り上げることで、日頃はあまり目を向けることのなかった問題に向き合ういい機会となった。



また、友達の意見を聞いたり作品を見合ったりすることで、自分の考えに自信がもてたり、自分と違う考えや視点に興味がもてたりできるようになった。

⑤ 社会「記者派遣事業」

12月上旬に、記者派遣事業を行った。この事業は、社会「情報社会に生きるわたしたち」の授業進度に合わせて行ったものであるが、実際に第一線で仕事をしている産経新聞神戸総局の安田麻姫記者に来校していただき、新聞記事を作るまでの工程を実際に使うカメラ等の七つ道具を見せながら説明していただいた。



新聞の記事にこれまでたくさん触れてきた児童にとって、実際に記事を作っている記者と交流できる機会はとても貴重な体験となった。また、記事ができあがるまでの工程を知ることによって「こんな大変な思いをして作ってくれていたのか」「情熱をもって仕事に取り組んでいてカッコいい」など、読み手とは

違った視点で話を聞くことができた有意義な時間であった。



また、話を聞いて疑問に思ったことはメモしておき、その後の質問コーナーで聞くことができたのも貴重な時間となった。

3 成果と課題

成果 1つ目の成果として、情報収集能力の向上が挙げられる。新聞を6紙置き、いつでも閲覧できるようにしたことで、児童たちは自由に新聞から情報を得ることができた。また、異なる新聞社の報道を比較することで、バイアスや報道の違いを理解する力が養われたと感じる。

2つ目は批判的思考の育成である。新聞の記事を読んで、賛成か反対かを書き、その理由を考える活動を通して、子供たちは自分の意見を形成し、論理的に説明する力を身につけた。さらに、賛成・反対の理由を考えることで、深く考える習慣がついた。

3つ目はコミュニケーション能力の向上である。朝の会のスピーチで新聞の内容を聞いてもらうことで、子供たちは自分の考えを他者に伝えようとする力を向上させた。スピーチを通して、プレゼンテーションスキルや自信を持って話す力も育まれた。

課題 1つ目は、時間確保の難しさが挙げられる。新聞を読む時間やスピーチの準備時間を確保するのが難しいと感じた。また、他の授

業との時間数のバランスを取るのも今後の課題である。

2つ目は、子供たちの興味・関心のばらつきに教師がどう対処するかである。すべての児童が新聞に興味を持っていたわけではなく、関心の差は否めない。また、スポーツや地域行事といった特定のテーマに偏りがちで、国内外の出来事や政治の動きのような幅広いトピックを取り上げる機会が少なかった。今は、SNS 等で簡単に興味のある情報を手に入れることができる時代である。そんな中で新聞記事から自分の興味のあることにフォーカスすることの難しさを実感した。

3つ目は個々の子供の理解度の差をどうやって埋めるのかである。新聞記事の内容が難しく、子供の中には内容理解に困難をきたしていた場面が見られたため、サポートが必要な子供への対応が課題であると感じた。

4 おわりに

1年間の活動を終えた今、新聞を取り入れた学習は、情報収集能力や批判的思考、コミュニケーション能力の向上に大いに役立ったと感じている。しかし、時間管理といった教師側の課題や、興味・関心のばらつき、理解度の差といった子供たち側の課題も浮き彫りとなった。これらの課題にどのように向き合い、今後どのようにNIE活動を推進していけばいいのかをしっかりと教師間で話し合い、授業の中で新聞の活用方法や記事内容をよりわかりやすくするための手立て、児童の興味を引き出す方法を考えていくことが重要だと感じた。今後、教科や学年の幅を広げ、できる活動の一つずつ増やしていけるように努めていければと思う。

「書く力」をつけ「発信力」につなげる

姫路市立網干西小学校

校長

岡崎 由佳

教諭

北上 順公

1 はじめに

本校は2023年度よりNIE実践指定校として活動を開始し、今年度2年目を迎えた。23年度は新聞に触れ、新聞の良さを知ることから始めた。各学年の成長段階に合わせて新聞に親しみ、楽しんで読むことができる環境づくりや、新聞社のワークシートなどを使って「書く力」の育成に取り組んだ、今年度は、23年度の取り組みを発展させ、さらなる「書く力」をつけ、相手に自分の考えを伝えるための「発信力」の育成に挑戦した。

近隣の兵庫県立網干高等学校において、NIE実践指定校として佐々木浩二教諭（日本新聞協会 NIE アドバイザー）が防災ツーリズムを進めていることを知った。高校生の力を借りて、本校5年生の「総合的な学習の時間」における防災学習と連携して合同で公開授業にて発信の機会を得た。これは児童にとっても教師にとっても大きな学びとなった。

2 実践の内容

新聞づくり

各学年において、教科だけでなく行事・生活・総合的な学習の時間で学んだことをまとめたり、伝えたりするために新聞づくりを行った。

新聞閲覧台

今年度、神戸新聞社から木の香りのする新聞閲覧台を寄贈していただいた。図書室前に設置し、子ども新聞を毎日配置し、児童が自由に読めるようにしている。神戸新聞社より取材を受け、新聞にも掲載していただいた。新聞に取り上げていただいたおかげで、良い宣伝にもなり、新聞を読みに来る児童が増えた。



2025年1月5日
神戸新聞

2年生

（国語）新聞で同じ部分をもつ漢字を探そう
漢字の成り立ちを覚えるために、難しい新聞から見つけ出すことによって達成感があり、クイズ感覚で楽しく取り組めた。



開と関、会と合 見つけました



教科書で確認する児童も



学級のみんで見つけた漢字を出し合い確認した。



3年生

（総合）「はまっこ自然探検隊」新聞づくり
（社会）「わたしたちの暮らしとまちで働く人々」新聞づくり

校外学習や事前・事後学習で調べたことや分かったことなどを班で話し合いながら新聞にまとめることができた。新聞の書き方をし

っかり学習できたわけではなかったが、レイアウトや見出しの効果を感じられた様子であった。



スーパーマーケットで働く人々について制作した新聞

特別支援学級

(国語) 新聞で漢字探し

2・3年は子ども新聞から、6年は新聞から同じへんのある漢字をさがす。

(図工) 新聞を使って工作

新聞を使って、祭り屋台や屋台のかざりを作った。

4年生

(総合) 林間学校や校外学習の振り返りを個人新聞で作成したりグループで壁新聞を作成したりした。

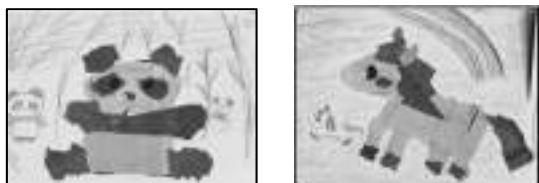
活動のようす

レイアウトや見出しを考えて工夫して取り組んだ。

(図工) ちぎり絵制作において、新聞をちぎって張り付けた

活動のようす

新聞の文字や写真を組み合わせてさまざまな模様を作り楽しんでいた。



新聞の色加減がとても良い感じにちぎり絵として仕上がった

5年生

(朝学習) 新聞4コマ総選挙

新聞各紙の4コマ漫画を読み比べ、どの漫画が気に入ったかを選挙して決めた。

興味を持って新聞に触れる機会を作ることができた。

(1) 出前授業①「新聞づくり」

①日時 2024年5月30日(木)

②場所 各教室

③講師 神戸新聞社 NIE・NIB 推進部

三好正文シニアアドバイザー

④内容 「新聞づくりのコツ」

自然学校の思い出を新聞にするために新聞づくりのコツについて指導していただいた。

⑤授業の様子



楽しかった体験の「5W1H」を振り返り、レイアウトや見出しの付け方などを学んだ。

⑥児童感想

○ぼくは、この45分でいろいろなことを学びました。例えば5W1Hや逆三角形、アタマ・カタ・ヘソなどです。これまで苦手だった新聞が急に書きたくなってきました。

(2) 出前授業②「大阪ガス出前授業」

①日時 2024年10月11日(金)

②場所 家庭科室

③講師 大阪ガス出前授業講師

④内容 被災した時の防災食・防災グッズづくり

防災食・・・みそ玉、おにぎり

防災スリッパ・・・新聞

⑤授業の様子



みそ玉で作る即席みそ汁





新聞を使って防災スリッパを作っている様子

(3) 公開授業

①日時 2025 年 2 月 12 日（水） 5 校時

②場所 網干西小学校体育館

③参加者 網干西小 5 学年児童 57 人

網干高校生 16 人

指導者 網干西小教諭 北上順公

小谷由紀

網干高校教諭 佐々木浩二

④ねらい

同じ地域で過ごす小学生と高校生が、防災について自分たちで調べたことを伝え合う活動を通して、地域の防災力を高める必要性に気づき、地域の「共助」に関して自分にできることを具体的に考える。

小学生…総合的な学習の時間、社会科

高校生…総合的な探究学の時間、地理総合、
地理探究

⑤授業の様子

網干高校の 2 年生 16 人と連携する授業を県下各地から 29 名の教員や NIE 関係者が参観に来られた。雨の中自転車で西小に来た網干高生とランチルームで昼食を一緒に食べ、授業までの時間にカードゲームなどをして交流した。お互い随分打ち解け、体育館での合同授業では、緊張が少しほぐれて落ち着いて活動することができた。

授業のテーマは「私たちの防災」。もし自然災害が起きた時、網干地区の人たちみんなが助かるにはどうすればよいだろう、自分たちができることを高校生と共に考えた。まずは、小学生から、自分たちで調べたことを壁新聞でまとめ、8 つの班で発表をした。それぞれのブースで趣向を凝らして発表した。津波の高さがわかるよう、体育館の 2 階の手すりから長いメジャーで表現したり、ニュース速報の

ようにアナウンサーが出てきたりと小学 5 年生ならではの工夫をした。高校生の発表では、前のスクリーンにスライドを映し出し、探求の授業で調べたことを小学生にわかるように工夫してまとめてあった。網干地区の防災についてクイズを入れながらの発表はとても勉強になった。高校生からの気づきで、防災の自助・共助・公助のうち「共助」が 2 つの発表には足りていないことが提案され、班ごとに「共助」について協働で話し合い、最後に班で出た意見を交流した。共助の取組として、日頃からの地域との結びつきが大切で、近所づきあい、祭りや行事に参加することが大切であること、優しい気持ちで助け合いの心を持ち続けることを誓い合った。今日学んだ若者たちならきっと共助の心を忘れず、災害に立ち向かってくれるであろう。



公開授業で発表する児童と高校生たち 未来の防災の担い手です

⑥児童感想

○これまで準備してきた壁新聞で、私たちの発表を多くの方々に分かりやすく説明したり、「防災」についてより知ってもらえたりしたことが一番うれしかったです。そして、今まで関わりのなかった網干高校の皆さんともこの授業を通して関りを持てたことで話し合いのテーマ「網干の『共助』についてわたしたちにできることはどんなことだろう」にもつながって、災害が起こった時などに共に助け合える関係にもなっていけばと思います。高校生

の皆さんの発表の中でも南海トラフ巨大地震の話がでてきたことがやっぱり近年起きると言われているので、網干でも防災意識を高めていかないといけないなと思いました。また、このような行事を網干でやってほしいです。

○あまり緊張せずに予定通りに進んでいったので今まで2学期から壁新聞をつくって、練習したものを網干高校生やたくさんの先生、地域の人に見てもらえてよかったし、高校生の発表の中にあった畳で川を氾濫させないようにしていることやポンプ場があることなどを知れたりしたのでよかったなと思いました。



児童が制作した壁新聞

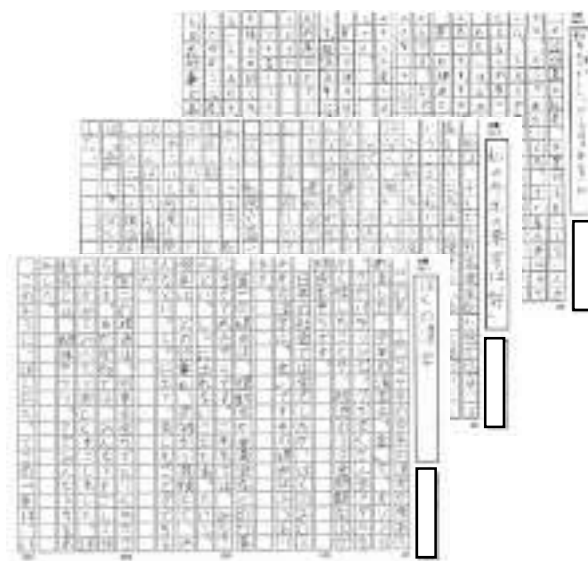


2月12日網干地区防災会議までの総合の授業の流れ

(4) 新聞の投書

新聞を読んで意見を持ち、討論する。自分の意見が固まれば新聞に投稿する。

○児童投稿文



6年生

(総合) 広げよう 日本の歴史と文化

インターネットや修学旅行で学んだことをもとに、個人新聞を作成した。

意欲的に取り組んだ。

(国語) 漢字の形と音・意味

新聞の文字から同じ部首やへんを持つ漢字を探す。

得点化することで、ゲーム感覚で楽しく取り組んだ。

(当番活動) 震災ダイアリー記録

神戸新聞「震災ダイアリー」記事を毎日、日番が切り取り、神戸新聞社からいただいたダイアリーに貼っていった。2025年1月17日に完成後、図書室で展示している。全校児童にとっても、このダイアリーを通して30年前の出来事(復興の歩み)を知る手立てとなっている。

3 おわりに

今年度は5年生の取組が中心となった。公開授業で発信した壁新聞による発表は5年生にとって大きな自信につながった。NIE推進と共に、「自分の意見を持つ、書く、発信する」この一連の授業実践を今後も全学年で続けていきたい。

新聞からはじまる主体的な学び

甲南小学校・幼稚園 学園長兼校長

祢津 芳信

講師(学校図書館)

田代 弘子

教諭

浅川 功治

1 はじめに

甲南小学校・幼稚園は1911(明治44)年に平生鈇三郎によって創設された共学校である。

「健全な常識を持った、世界に通用する紳士・淑女たれ」を建学の精神とし、徳・体・知のバランスのとれた人間教育を行っている。

子どもたちのめざす姿として、「思いやりのある子」「あきらめない子」「考える子」を掲げ、日々の教育活動に取り組んでいる。

研究テーマとして、「個別最適な学び・協働的な学び」を掲げ、子どもたちが主体的に自ら学べる環境作りを進めている。また、教員全員が、研究授業を行い、振り返りを通じて議論を重ね、学習環境の充実を図っている。その一環として、NIE(教育に新聞を)の取り組みを位置づけ、実践を行った。

2 実践の内容

本校では、過去の実践報告集を参考にし、まずはとにかく、実践できることを試してみようと、NIE 校内研修部会のメンバー全員が1年を通して公開授業を行った。

まず取り組んだのは1年生～3年生での、「読売新聞ワークシート」だ。このワークシートはレベルに応じた興味深く旬な記事と設問によって構成されている。最後に設問があるため、児童の真剣に読もうとする姿が見られ、話し合いへと発展することも多くあった。

このような継続した取り組みもあるが、以下、各学年および専科の中から主な活動を取り上げて紹介する。

低学年 新聞を読んでみよう

(1) 国語 かたかなを見つけよう

新聞から、日常生活で使われているカタカナの言葉を抜き出し、カタカナの入った言葉に興味を持たせる活動を行った。

この活動では、記事の内容について話す姿も見られ、他のペアに配付された記事も読みたいという声も聞くことができた。カタカナ言葉を探す副次的効果として記事の内容についても興味を持つことができたという成果があった。

(2) 特別活動 「新聞記事を読んで」

新聞記事を5つ読み、解説を聞いた後、自分の気に入った記事を選んだ。その記事からキーワードを3つ選んで、感想を書いた。

初めてニュースをまとめる活動であったため、キーワードを探すことはできても、思ったことを書くことは難しいと予想されたが、児童は苦勞しながらも自分の意見をまとめていた。

発表の際には他の記事にも興味を持ち、どうすれば解決できるのか考えている姿が見られた。



【中学年】 記者連携でプロの視点を学ぼう

（１）総合的な学習の時間「校外学習新聞から兵庫県新聞へ」

校外学習前に、神戸新聞社 NIE・NIB 推進部 シニアアドバイザーの三好正文氏に新聞の構成や取材の仕方などを教えていただいた。

地図やしおりを前もって読んでおく事の大切さを学んだ。新聞作りは、現地に足を運ぶ前から始まっていることを知る機会を得た。

校外学習後には新聞の作成技術に触れ、何気なく見ていた新聞にたくさんの工夫があることに気付いた。学んだことを活かして新聞を作り、シンブリオバトル形式で発表をした。

さらに、発展学習として兵庫県の調べ学習を行い、チームで新聞作りを行った。



（２）総合的な学習の時間 「震災学習」（記者連携）

まわしよみ新聞で新聞に親しんでいた４年生は、震災後 30 年ということで、震災・防災について学習した。先生たちにインタビューして当時の学校の様子をまとめ、学校で安全な場所を調べて確認した。

その際、震災当時に宿直勤務をされていた三好正文氏のお話を伺う機会を得た。また、神戸新聞社淡路総局津名支局の中村有沙氏にありふれた地域の繋がりが命を救うことを教えていただき「そんな住民の人達の行動は町の誇りだね」と話す児童も見られた。

三好氏のお話の中で、震災で救われた命が避難生活の過酷さによって、奪われてしまう震災関連死に、児童は心を痛めていた。

実際に、震災の避難所となった体育館にダ

ンボールハウスを作り、プライバシーを守り少しでも暖かく過ごせる工夫を考えていた。

「自分の命も他人の命も守れる存在でありたい」と、考える児童が増えたように思う。

【高学年】 大人の新聞に挑戦！

（１）国語 「新聞名探偵 KONAN」

神戸新聞社のご協力により、クラスごとに異なる日付の新聞を用意した。それを見て関心のある記事の感想をまとめた。そして、別のクラスの児童の感想から、どの記事についての感想であるかを探すという取り組みであった。ゲーム性もあり、楽しんで取り組んでいた。

児童は、同じ記事でも違う感想を持つことに気付いた。また、同じキーワードでいくつも記事がある場合、詳細に読むことで特定される過程を楽しんでいた。

（２）総合的な学習の時間「地方紙で特色ある記事を読もう」

横浜の新聞博物館から送られた、地方紙をもとに地域の特産や交通、産業、トピックスなどをまとめて、プレゼンテーションを作成し、発表をした。聞き手に分かりやすいように、イラストや字の量、大きさに気を付け工夫を凝らした。地域ならではの難しい読み方はタブレットなどを使って調べた。まとめとして、各班やクラスで発表し、感想を述べ合った。

児童達は、その地方ならではの記事に触れ普段は知らない話題に触れることができた。

さらに疑問を持ちながら読み深められるようクリティカルシンキングを養いたい。



専科 さまざまな新聞の使い方への挑戦

(1) 英語 5年 「英字新聞から国名を探そう！」

初めて英字新聞に触れる児童がほとんどだったが、楽しみながら活動に取り組むことができた。タブレットで国名を調べたり、翻訳アプリで読み比べたりしながら、工夫して新聞を読もうとする姿勢が見られた。国と〇〇人の違いを判断するのは5年生には難しく、国名以外をリストアップする様子も多くあったが、国・〇〇人では言い方が違うのだと学ぶことができた。活動についての感想では、「初めて知った国があった」「英語の言い方を学べた」「アメリカが多く見つかったのは大きい国だからそれだけニュースも多いのでは」、など世界を知るきっかけになったのではないかなと思う。



(2) 図工 2年 「新聞紙から広がる世界」

新聞記事の写真から気に入った部分や心にとまった部分を切り抜き、画用紙にはる。そこからイメージを広げて思い付いたことを工夫して絵に表すというものだ。「記事の中から探す」という活動が新聞と親しむ活動になっていたように感じた。写真から興味を持ってその記事を読む児童も少なかった。



新聞に親しむ活動を楽しみながら、新聞を通じて自分の感性を表現した。

(3) 体育 3年 「マイペース」でいこう！

年明けに行われた箱根駅伝の話題は、旬な話題であり、また新聞記事には各区間の距離やタイムが細かく記載されているため、それらの情報から持久走における児童のペースに着目して話を進めることができた。

駅伝という言葉を知っている児童は全体の3分の1もいなかったのも、まず駅伝という文化を知ることができたと思う。20kmを約1時間など、記事の文章では実感できない様子であったが、20kmを運動場140周分、ペースをみんなの全力より速い、と伝えると驚いた様子であった。

記事にある情報を教員が具体的に伝えることで、より記事の内容に興味を惹かれると感じた。

(4) 家庭 5年 「写真から伝わってくるもの ～関西独自の祭り えべっさん～」

教師自身が実際に撮った写真を使って、児童が記事を書き、その写真が何を伝えたいのかを明確にしていっていった。また専門のカメラマンが撮って新聞に掲載された写真を見比べながら、その写真を見てどのような印象を受けるのか、自分が書いたものとどのようなところが違うのかを考えた。

(5) 読書 4年 「ニュース番組を作ろう」

この実践では、新聞の文字情報を話し言葉に変換させた。新聞を読む活動では、児童が読み飛ばしたり、わかったつもりになったりしていても把握しにくく、理解度をはかることが困難である。そこで、5W1Hに注目して要約することで大切な部分を確実に把握できる道筋をつけた。また、友達に伝えなくてはならないため、正確に情報を理解し発信しようという動機になる。最後に自分の意見を述べることによって、ニュースを自分事としてとらえる機会になった。

幼小交流 小学生から園児へのアプローチ

本校には、同じ敷地内に幼稚園があり、各学年が毎年交流プログラムを行っている。そのチャンスを捉え、園児にも新聞の魅力を伝えようと取り組んだ。

3年生の児童は、1学期から新聞に親しんできた。そんな児童たちが幼稚園児に新聞の魅力を伝えるために、夏のオリンピックから着想を得た「シンプリンピック」のプログラムを作成した。練習時間も短い中、児童のやりたい思いを尊重し、希望した役割でメンバーを構成した。新聞を駆使して、聖火、ポンポン、玉入れ、新聞リレーを行った。

最後には防災を意識した新聞スリッパを作成し、「新聞があれば、何でも作れるんだね」と、話していた。

5年生でも新聞紙の柔らかさや破りやすさを活かして、幼稚園児が投げやすい「玉」を作る活動を行った。素材としての新聞を生かす活動が、園児にも浸透したと思われる。

そこで、さらに次のステップとして、3年生が3歳児には、新聞ヨーヨー釣り。5歳児には記事釣りをを行った。記事釣りは、園児が興味を持ってくれそうな記事をカードにして置き、園児が釣った記事を小学生が説明し、スクラップしてあげるというものだ。幼稚園教諭によると、この後、園舎に置いてある工作用の新聞を読もうとする姿や、それを3年生が作成したスクラップの冊子に加える姿も見られたとのこと。園児にとって、新聞が工作に使うものから読んで楽しいものと認識が変化する瞬間となった。

6年生も卒業前に、ニュース記事をカルタにして園児と楽しむ取り組みも行った。このことは、ニュースを短い言葉で表現することで、より深く読もうとする姿が見られた。

さらに、入れ替わりで入学するさくら組（5歳児）に向けて「小学校の魅力」「新聞記事の中から伝えたいこと」などをはがき新聞にまとめてプレゼントした。

このように新聞を通じた幼小連携をさらに

進めていきたい。



3 おわりに

1年間、NIE 校内研修部会で話し合いながら各教員が NIE の実践を行っていった。それぞれ、過去の実践事例を参考にして行っていたが、過去の実践を真似するだけではなく、新聞を効果的に使い子どもたちの力を伸ばそうとする教員の創意工夫が見られた。

1年間の実践を終えて、実践を類型化し、次年度以降の実践につなげていくこととした。

まず、幼稚園から小学校低学年にかけては、「新聞の素材に親しむ」学習を行う。新聞という素材を使ってもものづくりをしたり、スポーツをしたりして、素材としての新聞に興味を持たせる。

同時に、「新聞の内容に親しむ」学習を行う。最初は教員の解説が多くなるが、記事の内容から、子どもたちが感想を交流する。高学年になるにつれて意見交換したり、さらに広げて調べ学習をしたりと記事の内容から学びを広げ、深めていく。そうして、時事問題への関心も高めていきたい。

高学年では、新聞を比較したり、新聞報道とテレビの報道などを比較したりすることを通して、メディアリテラシーやクリティカルシンキングを養っていきたい。

そして、中学校・高等学校・大学・生涯学習へとつなげ、生きる力を育てていきたいと考えている。

情報を活用し、自分の考えをつくる ～自分らしく、豊かに生きるために～

養父市立宿南小学校 校長 中村 雅志
教諭 菅原 幹生

1 はじめに

本校は、養父市北部に位置する、全校児童 27 人の小規模校である。地域の先人である江戸時代の儒学者「池田草庵」先生の教えをもとに、家庭・地域とのつながりを大切にしながら学校教育を推進している。

2024 年度、八鹿高校事件からちょうど 50 年を経て、同和問題について、また差別解消のために学校教育においてどのように子どもたちに伝え、どのような力を身につけさせるべきかという研修を行った。50 年前に比べ、さまざまな格差がかなり改善されていることは間違いないが、ネット上の差別事象の増加を見る限り、それを看過し放置すると差別が収束することは困難であると考えられる。

「義務教育課程において、科学的根拠のないこと（迷信や噂等）によってさまざまな不合理が生じることに気づき、これらに惑わされず正しく判断し行動する態度を養うこと」は、差別解消のために必要であることを全職員で共通理解した。このような力や態度を養うには、教育活動全体を通してはもちろん、NIE の実践を通じて培うことができると考える。

NIE の活動を通して、立場によって考えが異なることを認めた上で、何が事実か、何が真実か、何が本質かを見極める力や人や物事に関心をもつ感じる力（豊かな心）、何を調べ、どのように伝えればよいかといった技能を育成していく中で子どもが自分の言葉で自分の考えをつくり、もてることをめざしたい。取り組みの内容については、学年の実態に応じて工夫していくようにした。

2 実践の概要

（1）新聞閲覧コーナーの設置

配達された新聞を全校生が読めるように、こども新聞を含む一般紙を 1～4 年生のスペース（2 階）、5・6 年生のスペース（3 階）に置いた。

（2）各学年の取組

① 1・2 年生

○図工 新聞を切ったり、ローラーで自由に色づけをしたりして好きな世界を作った。「ぺったんコロコロ」「いろいろなかたちのかみに～あまったかみのかたちから～」

○1 年生 国語「カタカナをみつけよう」新聞記事の中からカタカナをみつけた。



新聞記事の文字の大きさや、目次等、新聞のつくりについて知り、記事の中からカタカナを探した。見つけた文字で文作りをした。

○2年生 新聞の読み聞かせ

新聞に掲載されている物語「おはなしの森（2004年1月1連載スタート）」や、「かなしきデブねこちゃん（2022年4月連載スタート）」の読み聞かせを行った。2年生という発達段階を考えると、読み聞かせから取り組むことで新聞に対するハードルを下げるのが目的である。両話とも5分程度で読めるので、学習における新聞導入には大変有効であると考えた。登場するキャラクターも秀逸で児童も興味関心をもっている。



②3・4年生

○環境体験学習「里山体験」の新聞作り

毎年3・4年生は、総合的な学習の時間に地域の里山に出かけ、季節ごとに様々な自然体験（山の散策・ネイチャーゲーム・木の間伐・野外炊飯等）を行っている。活動の後に、その日の学びや思い出を新聞形式でまとめていった。

新聞の内容は、体験の中で一番楽しかったこと、難しかったけど頑張ったこと、

また写真や漫画コーナーなど、それぞれが工夫しながら自由に決めていった。



（新聞を読み合う子ども達）

完成後には、全員の新聞をみんなで読み合う時間を設け、友達のよい所を見つけて評価し合った。友達にプラスのコメントをもらった子どもたちはとても満足し、次の新聞作りへの意欲につなげることができた。

○社会「自然災害から人々を守る活動」

※伊佐小学校とのオンライン授業

近年、世界で起こっている自然災害（台風・地震・津波・集中豪雨・ハリケーン等）について、ネットニュースを中心に調べ、1枚のスライドにまとめてオンラインで近隣の小学校の児童に発信した。自分で調べることで、災害による被害の大きさや恐ろしさを改めて感じ、防災・減災への意識を高めることができた。

③5・6年生

○新聞づくりアプリ「ことまど」を使って新聞の作成

5年生は自然学校、6年生は修学旅行の思い出を新聞づくりアプリ「ことまど」を使って作成した。アプリを使っただけの新聞作りは初めてだが、タイピング技能も高く、打つことに関してはそれほど困っている様子ではなかった。しかし、印象に残った出来事を要約し、感動を表現することは難しかったようである。また、いくつかのテンプレートの中から新聞の記事数や字数から型を選ぶのだが、字数制限のある中で、書くことには苦労したようである。どちらかと言えば、書くことがなくて字数が余ってしまう方で困っていた。そこで「何を書き、どのように書けばいいのか。」という課題を持つことができた。

○新聞記者派遣事業

2024年10月16日（水）

神戸新聞社教育 ICT 部ことまど普及委員会事務局の武藤邦生氏とオンラインにて5、

6年生の新聞を一人一人講評していただき、新聞作りにおけるアドバイスをいただいた。

児童は、この日に向けて一生懸命に記事を書いてきたので、新聞のプロの方に評価していただくことを楽しみにしていた。一生懸命書いた分、児童は自分の記事をよく理解しており、武藤さんの的確なアドバイスが心に響いたようで、事後の新聞の校正にも熱心に取り組むことができた。また、児童は次回の新聞づくりではアドバイスをもとに読み手が読みたいと思うような新聞づくりをしたいと意欲的であった。



武藤さんからいただいたアドバイス

- ・5W1Hの順で記事を書くとうわかりやすい。
- ・見出しは、問いの形ではなく、記事の答えになるようにする。
- ・記事は、逆三角形のイメージで大事なことから書いていく。
- ・目安として10行ごとに段落分けをする。
- ・写真はトリミングをして大きく貼る。1枚の写真は、100行の文に相当する。
- ・文末の表現が「〇〇だったそうです。」ではなく、実際に見たり聞いたりしたことは、「〇〇です。」と言いつりの形の方が説得力が増す。
- ・「すごい」という便利な言葉を使わず、より具体的な言葉で感想を書く。NGワードを決めて使わないようにする。
- ・事実の間違いに、気をつけて記事を書く。書いたら見直しをする。
- ・読点の多用にならないよう、書き終わったら一度声に出して読んでみる。

児童の感想

新聞作りのアドバイスを武藤さんから聞きました。新聞は少しでも長さなど事実を間違えると分からなくなるので、記事を書き終わったらきちんと見直しをしたいです。よく読点「、」を打つことがあるのでアドバイスで言われた通り書き終わったら一度自分が声に出して読んでみて変だなと思ったら「、」を消して読みやすくしていきたいです。見出しは、「平和の願い」などにしたら「平和の願いとは？」と問いになってしまうので、「平和を守るのは僕たち」などにして平和を守るのは僕たちですと答えになるように見出しを書くということを教えてもらいました。武藤さんの話を聞いて次の新聞作りに活かしていきたいです。

6年 「八鹿浅黄新聞」

○6月から児童らで育ててきた在来種の大豆「八鹿浅黄」について、八鹿浅黄の復興や養父市の移住者支援をされている一般社団法人「田舎暮らし倶楽部」代表西垣憲志さんからお話を伺い、インタビューしたことを「ことまど」を使って新聞にまとめた。西垣さんにNIEを推進していることを伝えると、過去10年間の新聞の切り抜きをいただいた。おかげで、八鹿浅黄のことや養父市の良さや課題を見つめることができた。それらを新聞づくりのアドバイスをもとに、丁寧に構成し、協力して記事にまとめた。本年度「ことまど新聞コンクール」で、小学生の部金賞を獲得することができた。



○5年 「八鹿豚新聞」

養父市の特産品となっている「おだぎきさん家の八鹿豚」について、生産者の島垣縁さんから話を伺った。養豚場を続けることを決めた理由や「八鹿豚」としてブランド化するための努力や育て方など、八鹿豚のほぼすべてを教えていただいた。一度話を聞いただけではまとめきれず、何度も質問のやり取りをし、新聞の作成を進めた。児童は「実際に話を聞かせてもらって、特に印象的だったのはカタシマのケーキクラムを食べさせていることだった。」という感想を持った。

④朝のスピーチ・自主学习での活用

1年生から児童は、朝のスピーチで新聞記事を活用している。新聞から関心を持った記事を選び、その内容について概要を説明し感想を伝える。聞いている児童は、気になったことをメモし、発表の後に質問をしたり感想を伝えたりする。このやりとりの積み重ねにより、毎日のニュースにあまり関心を持たなかった児童が、社会の様子に少しずつ関心を示すようになった。

さらに興味を持った児童は、自主学习として自分で選んだ記事について感想を書いたり、もう少し詳しく調べて見聞を広げたりしている。



3 成果と課題

NIEの推進にあたり、児童の新聞への関心度には個人差があるため、どの子にとっても無

理のないように実践していくことを心がけた。

まず過去の各学年ごとの「NIE教育推進計画表」を参考にし、様々な教科や活動を通して、新聞に「ふれる」ことを大切にした。そして、児童の実態に合わせて、徐々に新聞を「見る・読む」、文章から「感じる」、感じたことを「伝え合う」力の育成をめざしていくようにした。

その結果、どの子も新聞に慣れ親しみ、社会の動きや情勢に目を向けるようになった。また、「新聞記者派遣事業」では、新聞についての基礎的な知識を身に付け、新聞作りを通して自分たちの住む地域の特産について学ぶことができた。

新聞記事を通じて、人とのつながりを感じ、子どもたちの見聞を広げ、伝え合う楽しさを味わうことができた一年であった。

今後は、今年度の取り組みを土台に、まず「NIE教育推進計画表」を見直し、より具体的な取組をイメージした計画表にしていく予定である。そして、NIE教育を校内研修の一つとして推進し、新聞から学び、新聞を通して自分の思いを表現し、進んで対話していく子どもの育成をめざしたいと考えている。授業でも、各新聞社のワークシートを積極的に活用しながら読解力を伸ばし、学習したことについて、構成をよく考え表現を工夫しながら新聞にまとめるなど、さらにねらいを絞った取り組みを進めていきたい。

NIEの実践が、子どもたちにとって「新しいことを知る」、また「いろいろな人や場所とつながる」良い機会になり、「伝え合う」発信の場として意欲的に取り組めるものとなるよう、さらに研修を積み上げていきたい。

【 小・中学校 】

情報活用能力の育成

～ NIE タイムの取組～



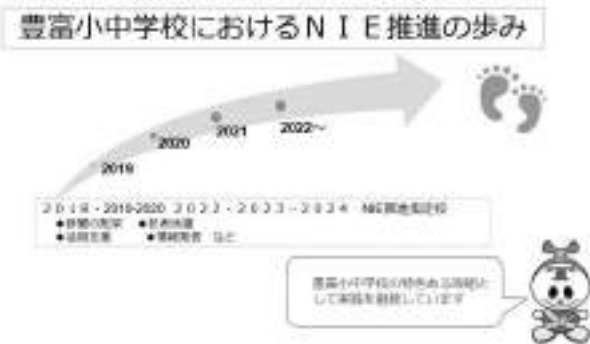
姫路市立豊富小中学校

校長 畑本 秀樹

教諭 川村 かおり

教諭 古寺 和子

1 はじめに



本校は、2020 年度に施設一体型の義務教育学校として開校した。2018 年度（開校以前）より NIE 推進校として実践を重ねてきたが、「なんでもとにかくやってみよう！」の精神で、教員が「いいな、楽しいな」と思えることをどんどん試すことで、『新聞が当たり前にある風景』を創ってきた。25 年度、NIE 全国大会に参加させてもらうことになり、もう一歩進みたいという思いから、全校で取り組めることとして「NIE タイム」を設けることにした。今回はこれを中心に報告させていただく。

2 実践の概要

○「NIE タイム」はじめました

前期課程（小学校）は毎週金曜日の朝学習の時間を、後期課程（中学校）は1ヶ月のうちの1週間の朝学習を「NIE タイム（NIE 週間）」として位置づけ1年間取り組んだ。

まず、次のような目安を出して提案した。

	内容
低学年	○習ったひらがなやカタカナと同じ文字を新聞からみつける
	○ゆるきゃらなどの単語を示し、その文字を1面からさがして完成させる
	○おもしろい写真、好きな写真をみつけて切り取る。⇒紹介し合う

中学年	○動物などの写真から吹き出しの中にセリフを入れる
	○教師が新聞記事を紹介する
	○おもしろい記事、好きな記事を紹介し合う
	○記事を選んで切り取り（紙・デジタル共）スクラップしていく
	○選んだ記事の感想を書く
	○新聞から季節を感じる写真や記事をさがす
	○新聞記事の写真から詩や俳句を作る
	○4コマ漫画にタイトルをつける
高学年・後期課程	○見出しを隠しておき、内容から見出しを考える
	○グループで「○○」に関する記事が1つの新聞にいくつ載っているか数える
	○テーマを決めて、各自が記事を選んで伝え合う
	○友だちの選んだ記事に感想を書く
	○新聞社等のワークシートを活用し、内容を読み取る
	○コラムの書き写し
	○投書に対する意見文を書く（賛成 or 反対）
	○読者欄への投稿
	○記事の要約

【実際に取組んだ年間の主な内容】

低学年	文字探し 小学生新聞を読む 新聞紙で遊ぶ（工作）
中学年	デジタル小学生新聞を読む お気に入りの記事を選び、感想を書く・紹介し合う 天声こども語の音読

高学年	ことまど新聞づくり 天声こども語の視写 まわし読み新聞 やさしい日本語新聞づくり
後期課程	気になる記事の紹介 新聞コラージュ 記事読解、作文 ことまど新聞づくり

○ことまど新聞

作成した新聞をパソコンの画面上で見せ合ったり、紙に印刷したものを廊下に掲示し、クラス内はもちろん、例えば6年生が7年生の新聞を見に行き参考にする機会も設けた。



○朝日小学生新聞デジタル for School

お気に入りの記事をデジタル新聞から貼り付け、友だちからコメントをもらう活動は、子どもたちにとってお気に入りの活動となった。

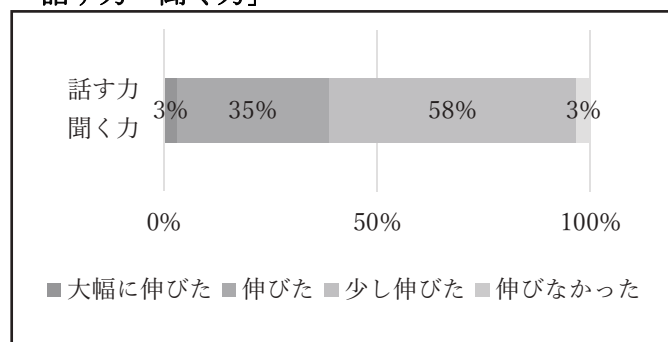


○アンケート結果より

継続的に1年間取り組むことにより、児童

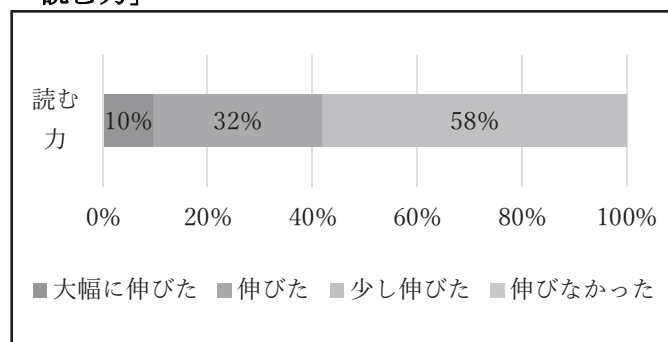
生徒にどのような変化が見られたか、教員へのアンケート結果から振り返る。

「話す力・聞く力」



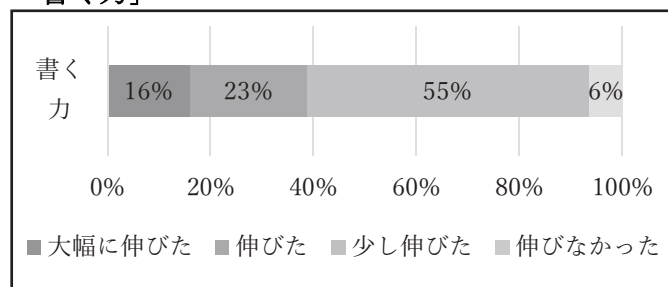
- ・ニュースに対してのアンテナが高くなった。
- ・自分の意見を伝える際にも、簡潔に述べるできるようになってきている。しかし、まだ大きな成長が見られないのが現状。

「読む力」



- ・初見の文章への抵抗感が減ったように感じる。
- ・新聞の記述の仕方に慣れたことで、文章の構成への理解が深まり、読み取る力が付いたと考えられる。

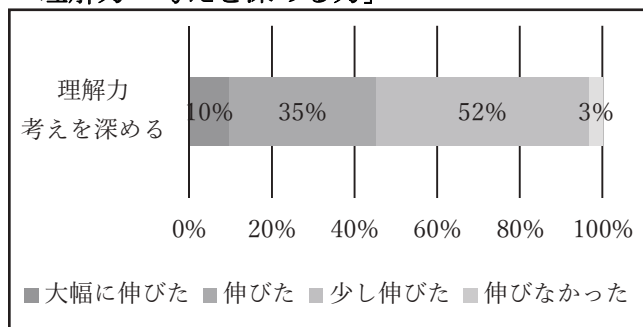
「書く力」



- ・個人差はあるが、自分の考えを書ける児童が増えてきた。
- ・振り返りや課題に対する自分の考えを書く

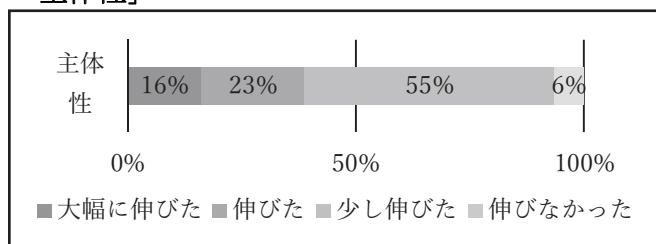
時の文字数が大幅に増え、中身もしっかり書けるようになった。

「理解力・考えを深める力」



- ・友だちが選んだ記事にコメントすることで、普段読まないジャンルの記事も目にして知識が広がったように思う。
- ・授業の際に自分たちが調べて分かったことをまとめるだけだったのが、さらに疑問を児童たちで出すようになってきており、自分たちで考えを深めようとする活動が多くなってきた。

「主体性」



- ・今日はNIE ある？と楽しみにしていた。
- ・生徒が休み時間に新聞を読む姿が増えた。
- ・楽しそうに新聞を広げて、学習した漢字を見つけようとしている。

「その他の資質能力」

- ・物事に対して集中力や着眼力がついたように感じる。
- ・模擬選挙の取組で選挙への意識が高まり、選挙権を持ったら投票に行く必要性を実感していた。

「保護者からの反応・評価」

- ・新聞によって子どもの世界が広がっていると喜んでいて。
- ・長期休みなどに課題を出した際は、家族で一つの記事を読み、コミュニケーションに役立っていると聞いた。
- ・ことまど新聞は懇談の際によく見ておられ

る。(教室前廊下に掲示)

○新聞委員会による取組

(前期)

都道府県記事あつめ



紙はもちろん、デジタル新聞から選んだ記事を Google スライドで作成した。



各都道府県をクリックすると下のような記事にとぶ仕組み。



写真インスタ風





○その他の取組

4年生&8年生

Google Meet を利用し高知県高石小学校とオンライン交流を行った。社会科と総合的な学習のまとめとしてお互いの地域についての発表を行い、その後、お互いの発表をはがき新聞にまとめ、交換しあった。



6年生&9年生

9年生が後期課程に進む6年生に向けて、学校生活等の紹介をする交流を行った。その際、お礼の手紙をはがき新聞にして9年生に渡した。



6年生

①人権ルームに震災コーナーを設置。



②震災ダイアリー



【児童の感想】

- ・震災を経験していなくても、震災ダイアリーを見ると現地では大変だとわかり、忘れてはいけないと思った。
- ・被災者の人たちみんながパニックになっているのにお互いに励まし合って今の神戸をつくっていったのに感動した。
- ・阪神・淡路大震災があったことをいろいろな人に知らせて、少しでも知ってもらいたい。そしてもし南海トラフ巨大地震が起こっても、避難できるようにしたい。

③メディアリテラシー学習

総合的な学習の時間にメディアリテラシーの取組をはじめて3年目となるが、例年の学習に加えて、今回は外部からアートディレクターの方をお招きし、講話とワークショップを行った。情報を発信する側の視点でメディアリテラシーを育むことができた。

3 今後の課題と展望

全校でNIEタイムの取り組みを行ったことで、一定の効果は見られたが、まだ1年目なので、継続することが大切である。児童生徒にもどんな力がついたかを問うなどさらに検証していきたい。また、今年度は新聞を通して、異学年の交流や、他地域との交流を図ることができた。児童・生徒からの感想でも「楽しかった」と高評価であった。今後も義務教育学校の特色を生かして、さらに前期と後期での交流や、前期から後期へ引き継ぐ取組等、可能性を広げていきたい。

小中一貫校として取り組む 地域を発信するNIE教育

南あわじ市立沼島中学校	校長	佐野 美穂
	教諭	森 彩夏
南あわじ市立沼島小学校	校長	近藤 友二
	主幹教諭	木田 秀子

1 はじめに

本校は淡路島から海上4km離れた離島「沼島」にあり、県下最南端に位置する小中一貫教育校である。沼島は「古事記」「日本書紀」などに登場する「おのころ島」の最有力候補地だとされている。1億年前の地殻変動による地球のしわ「鞘状褶曲（さやじょうしゅうきよく）」を有し、多くの伝説とともに古くから引き継がれてきた文化や祭りが、今なお息づいている。また、ハモやアジ、タイなど、豊かな海の恵みでも知られている。

沼島小・中学校では、ふるさと教育の発信を軸に、小中一貫校の特性を活かした取組を推進してきた。新聞記事を使った授業や活動を通して読解力や表現力を高めることをねらいとし、スピーチの実践、新聞を手に取りやすい環境づくりに取り組んだ。また、総合的な学習の時間を中心とした「沼島を知る」学習により、沼島独自の伝統文化や古代から育まれた豊かな自然に対する知見を深め、沼島を愛し大切にしようとするふるさと意識の醸成につながった。さらに、沼島についての学びを発信することで、より多くの人に沼島の良さを知ってもらおうと新聞作成に取り組んだ。

2 組織づくり

小・中学校が連携して合同組織を立ち上げ、研究を推進してきた。

○研究推進・資料作成部

〈NIE担当、研修担当〉

- ・研究の概要の作成と推進
- ・発表資料の作成

○授業実践部

〈特活、担任、社会・国語・理科・総合担当等〉

- ・総合的な学習での取組

地域学習・沼島を知る活動など

- ・朝の会、終学活での新聞を取り入れたスピーチ

○環境整備部

〈学校図書館司書、図書担当、養護教諭、栄養教諭、事務担当 等〉

- ・小中合同図書室の整備
- ・新聞を手に取りやすい、調べ学習しやすい環境づくり

3 取組実践

I 新聞記事を使ったスピーチ実践

小学校は「こども新聞」から、中学生は「こども新聞」または新聞から記事を選び、小学生は朝の会で、中学生は終学活でスピーチに取り組んだ。興味関心のある記事を選ぶ、5W+1Hを明らかにする、など普段のスピーチにNIEの視点を加えて取組を継続した。

【取組例】

- ① 国語授業時に新聞の読み方とスピーチの仕方を指導
- ② 記事を探して写真を撮り、指定の用紙に貼る〈NIEワークシートを活用〉
- ③ 5W1Hを抜き出す
- ④ この記事を選んだ理由や意見をメモ程度にまとめる
- ⑤ ホワイトボードに映し出す
- ⑥ スピーチ



新聞を読み記事を選ぶ



島から登校している。その実態を受け、総合的な時間の学習で「沼島を知る活動」に取り組んでいる。1年生は沼島八幡宮宮司や神宮寺住職の講話を聞くなど歴史を学ぶ「沼島の歴史を知る活動」、2年生は地域の方を講師として漁業体験から学ぶ「沼島の自然を知る活動」、3年生は沼島音頭の歌詞を味わいながら歌い、踊る体験を通して学ぶ「沼島の伝統芸能を継承する活動」である。活動のまとめとして「沼島新聞」を学年ごとに作成した。

小学校での実践

地域学習・「沼島を知る活動」などを通して、地域のことを調べ、発表する活動に取り組んでいる。今年度は、沼島が「国生みの島」であることを中心に据え、国生み神話、漁業、祭りなどの伝統、小中遠足等を題材に、調べたことを「ぬしま小」新聞、「沼島発見！」新聞、「150年記念」新聞にまとめた。新聞作りに先立って、小学校中学校ともに、神戸新聞NIE・NIB推進部の三好正文シニアアドバイザーに出前授業をしていただいた。



Ⅱ 総合的な学習の時間での取組

中学校での実践

中学校生徒は20名。沼島に在住している生徒は3名（移住者1名を含む）で、17名は市の小規模特認校制度を利用し、毎日船で淡路

授業後の児童・生徒の感想



小学校
低学年の感想

小学校中学年の感想

5W1Hが大事だということがすごくわかりました。ふだん読んでいる新聞にいろんな人が関わっていることがわかりました。「トップ」「かた」「へそ」「アタマ」などそれを次に意識して読んでみたり作ったりします。お話を聞けて新聞の書き方やコツを知ることができて良かったです。これからも新聞を書くことがあるので、5W1Hを意識して書きます。

小学校高学年・中学生の感想

今日はありがとうございました。今日の授業では新聞記事での大切にしていることや書き方、インタビューでのコツなど新聞のことでたくさんのことを学びました。三好さんのお話を聞いてもっと新聞のことを知りたいし、新聞を読んでみたいと思いました。今日学んだことや分かった事などこれから色々な時に使って活かしていきたいです。

「沼島を知る活動」の様子



『沼島を知る活動』
沼島クルーズ



『沼島を知る活動』
地層見学〈灘地区〉

平バエ見学〈沼島〉



魚さばき体験・船釣り体験

Ⅲ 小中合同図書室の整備

小中一貫校の良さを活かし、小学生・中学生が一緒に本に親しめる環境づくりに取り組んだ。小学校2階の教室前オープンスペースに書架を並べ、職員作業で本を配架した。中学校の教室とは渡り廊下でつながっており、小中学生は普段から行き来している。新聞を手に取りやすい、調べ学習をしやすい環境を整備した。



小中合同図書室整備の様子

IV 新聞づくり

ぬしま小新聞

沼島さんげんに出発







沼島発見！新聞

沼島発見！新聞







沼島新聞

沼島新聞





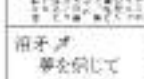


沼島新聞

沼島新聞







沼島新聞

沼島新聞







沼島新聞

沼島新聞







沼島新聞

沼島新聞







沼島新聞

沼島新聞







V 今後の活動

児童・生徒が作成した沼島新聞の発信に取り組む。新聞を瓦版にして、沼島総合センターや郵便局、沼島と灘の汽船場に置き、地元の方や観光客に読んでいただいたり、こどもあんしんネットで配信したりするなど、より多くの方に沼島の良さを伝えることを目指した活動を進めていく。

【 小・中・高等学校 】

中学3年生と小学6年生が伝え合う原爆と平和

愛徳学園中・高等学校

校長 松浦 直樹

教諭 米田 俊彦

廣畑 彰久

愛徳学園小学校

校長 眞浦 由美子

教諭 彦野 周子

柳生 里子

1 はじめに

本学園の設立母体は、スペインのビックという都市にある「愛徳カルメル修道会」である。

同会は1826年に聖ホアキナ・デ・ベドゥルナによって創立された。同会より6人の修道女が来日して、若い人々のキリスト教教育のために1954年、愛徳学園を設立した。以降、神戸市垂水区でカトリック女子教育を行い、2024年には創立70周年を迎えた。

「愛徳坂」と呼ばれる坂の上に校舎が建っている。小・中・高は同じ敷地内にあり、各教室からは瀬戸内海と明石海峡大橋が見渡せ、自然の雄大さを感じることができる。



ホアキナが残した、「To do por amor nada por fuerza」（力ではなくすべてを愛によって）という言葉にならって教育活動を行ってきた。ウクライナとロシアやイスラエルとパレスチナなど世界各地で武力による衝突が激しさを増す中、この言葉の重みを問い直す1年となった。

2 実践の内容

（1）ねらい

戦後80年を迎えようとする今、戦争体験を持つ方が少なくなる中、戦争を体験していない世代が新聞を含めたさまざまな機会を通じて学び、それをさらに次の世代にどう伝えていくかをテーマに取り組んだ。児童・生徒は戦争を体験していないが、それを学んで、知ったことを新聞にする。新聞には読み手がいるため、読み手に伝わるように書き方を工夫しなければならない。その過程で、生徒・児童はさらに理解を深めることができる。その点からも、新聞を用いる意義は大きいと考えている。

本校の中学3年生は修学旅行で広島を訪れ、平和学習を行う。その事前学習や現地で学んだことをもとに新聞を作成し、自分たちの次の世代である小学6年生に伝えていく学習活動を行った。この取り組みは、3年前の2021年に本学園の中学校・高等学校がNIE実践指定校だった際にも行っている。その際に中学生から平和について伝えられた当時の小学6年生が、今回の伝え手となる中学3年生である。

（2）小学6年生の取り組み

小学5年生の3学期に、NIEの記者派遣事業で記者の方から話を聞き、新聞の役割や記者の方がどのようなことを大切にして仕事をしているかなどを学んだ。その時の学びを活かして、今年度のNIEでは色々な人から話を聞いて自分の考えを深めたり、学んだことに関して事実と感想をしっかりと分けてまとめたり

することを大切に活動してきた。1年を通して平和について考えを深めて、平和で民主的な社会の担い手としての能動的な資質を育みたい。

○1学期

社会科の授業で日本国憲法について学んだ。三原則の一つ「平和主義」の学習では、自分の身近な人々から「平和を築くために」というテーマで話を聞いて自分の考えを深めた。「平和」という言葉が含む意味の大きさから一人ひとりが思い描く「平和な社会」が同じではないということも重要な学びとなった。

「平和を築くために」児童のまとめより

私は母にインタビューをしました。母の考えは過去の悲惨な出来事を忘れずに、色々な人と話合っ
て、協力し合うということでした。私は今回の授業を通して平和を築くための話を聞くまでは募金などの支援方法しか思いつきませんでしたが、色々な先生方のお話を聞いて、自己主張ばかりするのではなく、考えを尊重し、認め合うことが出来る未来を作ることが大事だと考えをより深めることが出来ました。私は平和を築くために過去の出来事を風化させずに、未来に発信するために自分も他の人も勉強して、悲惨な争いを二度と起こさないようにしたいです。

私は様々な人や先生の平和とはなにかという意見を聞き、最初の自分の意見『自他共に尊重する』と重なっているところが多いと感じました。結局どんな解決策にも相手を思いやるということが必ず必要だというのが今回のインタビューを通して私が感じたことです。自分も相手も何かをする前にはきちんと自分の意見とは多少違っても『これは一般的にみて良いこと、ダメなこと』といった善悪を判断できる人間になったらいいのになと思います。でも、それをやりすぎても逆に自分の個性を見失って逆効果にもなるかもしれないと思ってしまいます。非常に難しい問題です。ただ、私自身の意見としては必要最低限の常識は守り、人を傷つけること以外の良い影響をもたらす自分の発想や意見を主張していけば良いと思います。

○2学期

8月6日・7日の中国新聞朝刊を授業の中で各自読んだ。児童は新聞記事の内容の多くが原爆投下や平和に関することだということ

に気付いた。その中から印象深かった記事の文や写真を紹介し合った。

ある児童は、「ヒロシマ」を題材に映画を作成しているキャノン・ハーシーさんの言葉が印象深かったと紹介した。

【中国新聞】

私が1番心に残っているところは、「中国新聞(8月7日)」の2面目の(キャノン・ハーシーさん)の「この人」と言う文章の3段目の

「社会に変化をもたらし、よりよくする責任がある」と

「いずれ来る被爆者なき時代に、娘に『これを伝えていけ』と言える作品を作りたい」
のところです。

なぜなら、今起っている戦争や、紛争で亡くなったり、被害に遭われた方が沢山いるなか、それらが無くなって平和な世の中(世界)になって欲しいことが伝わってきて、これは私たちに残された使命などに思えたからです。

他にも平和祈念式典の中で自分たちと同じ小学6年生の二人が発表した「平和への誓い」が全文掲載された記事に目をとめる児童も多かった。(QRコードは広島市教育委員会のホームページ「平和への誓い」のページ)



(3) 中学3年生の取り組み

○2学期

中学3年生は、修学旅行の事前学習として平和学習に取り組んでいる。

事前学習は教科を横断して実施し、社会の授業で原爆投下までの経緯を振り返ったり、英語の授業で佐々木禎子さんに関する記事を英文で読んだりするなど、さまざまな角度から学習を進めている。

事前学習では、毎年被爆体験を持つ方から話をうかがっており、今年度は生後8カ月のときに広島で被爆された近藤紘子さんを



お招きした。生徒は広島でその瞬間を生きた方から、ご自身の体験と平和に対する祈りを直接お聞きするという、貴重な経験ができた。

修学旅行は10月に行われ（24年度は16日～19日）、広島、萩・津和野方面をめぐる。広島では、平和記念資料館を見学し、班ごとに平和記念公園内の碑巡りを行った。このとき、班ごとにピースボランティアの方から、詳しい解説をお聞きした。原爆が炸裂したその場に立ち、遺された展示物を見て、詳しいお話を聞くことで、生徒たちは真剣に平和と向き合う時間を過ごした。

修学旅行後、この後の新聞作成のため、新聞記者の方を招いて、新聞の作り方やレイアウトについての講座を行った。

○3学期

中学3年生は、4つのグループに分かれて小学6年生に伝えるための新聞づくりに取り組んだ。



新聞づくりにおいては、「戦争を経験していない世代が、次の世代に戦争を伝えていくにはどうすればよいのか」という課題意識を生徒と共有した上で、

- ① 一番心を動かされたもの・こと
- ② その経緯や背景について
- ③ 自分たちが受け取った思いや感想
- ④ 小学生に伝えたいこと

という、4点について記事をまとめ、新聞を作成した。作成には ICT 機器とテキストを共同編集できるアプリケーション（ロイロノート・スクール）を利用した。

新聞を作成する過程に当たっては、班ごとに内容を検討して記事を書き、生徒はそれぞれの書いた内容が理解できるかどうかをお互いに確認して、編集の過程を体験した。さらに、読み手である小学6年生を想定して、読み手の理解が深まるよう、さらに内容や表現を工夫した。

（4）連携授業

○3学期

小学6年生は4つのグループに分かれて中学3年生と交流を行った。グループ活動は次のように行った。



- ① 中学3年生が自分の班の新聞を小学6年生に配布する
- ② 小学6年生が新聞に目を通す
- ③ 中学3年生が内容を解説する
- ④ 小学6年生が感想・質問を伝え、中学3年生が応答する

以上を1つのまとまりとして行い、それが終了すると、中学3年生はその場に残り、小学6

年生は別の中学3年生が待つグループに移動し、同様の活動を行った。

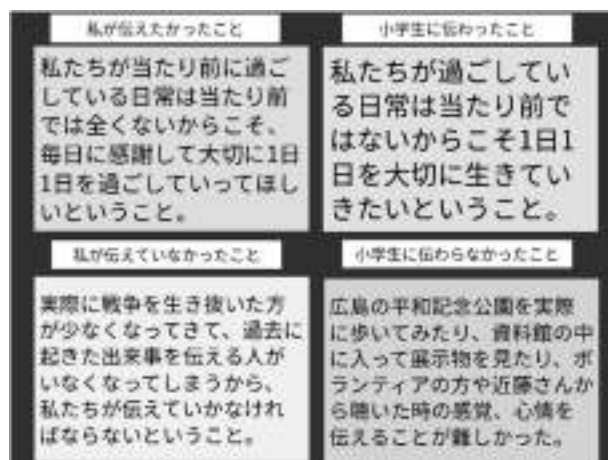
グループ活動が終わると、連携授業のまとめとして、中学3年生・小学6年生それぞれが授業の感想を付箋に書き、模造紙に貼り付けたものを交換した。

後日、小学6年生は各自が感じた「中学3年生が伝えたかったこと」を出し合って共有し、「平和をつなぐために私たちに出来ること」というテーマで考えを深めた。その内容を、皆から出たこととして小学6年生も新聞にまとめた。



中学3年生は、新聞を作って終わりではなく、自分たちが書いた新聞で、何が相手に伝わっていたのか、何が伝わらなかったのかを確かめるために、この小学6年生の「平和をつなぐために私たちに出来ること」についての新聞を読んで、次の4点について自分たちの考えをまとめた。

- ① 自分たちが伝えたかったこと
- ② 小学生に伝わったこと
- ③ 小学生に伝えていなかったこと
- ④ 小学生に伝わらなかったこと



3 おわりに

インターネットを利用すれば、膨大な情報にアクセスでき、教室や自分の部屋から出なくてもさまざまなことを知ることができる。しかし、今回の実践を通して、子どもたちは現場を訪れることや人との対話を通して考えを深めることの大切さを学び取ったのではないだろうか。昨今、新聞などマスメディアの存在意義が問われているが、ネット上の情報をかきあつめるだけでなく、現場を訪れたり、当事者から話を聞いたりする報道に携わる人がいるからこそ、私たちは少数者の声を聞き、より広い視点から情報を得られていることも知ってもらいたい。

今回の取り組みでは、平和をテーマとして取り上げた。児童・生徒の一人ひとりが戦争について深く理解し、丁寧に伝えていくことが、生きた歴史を伝え、またそれが平和を紡いでいくことになるのだと今回の実践を通して感じた。

【 中 学 校 】

「情報社会」を有利に生き抜く力を養う

神戸市立高倉中学校

校長 久保 隆則

教諭 矢延 和樹

1 はじめに

本校は全 13 学級、生徒数 400 名ほどの中規模校である。本校は校舎から海や山を見ることができる、「神戸らしい」自然豊かな環境に恵まれている。

校区内には住宅街が点在し、教育機関も周辺に位置するなど、ひたむきに学習に取り組むには、適した場所でもある。

学習に対して前向きに取り組む生徒が多く、生徒アンケートでは、23 年度と同様に 9 割以上の生徒が「授業を大切にしている」と答え、7 割以上の生徒が「家庭学習に取り組んでいる」と答えた。

しかし、学習への意欲が高く、語彙や解法などの知識が日に日に増える反面、自らの意見を持つことや、それを発表する力には変化が見られなかった。進路決定についても、「将来の自分」を想像した選択よりも、「周囲の人物の影響」を受けて選択をした生徒の方が目立つ状況である。

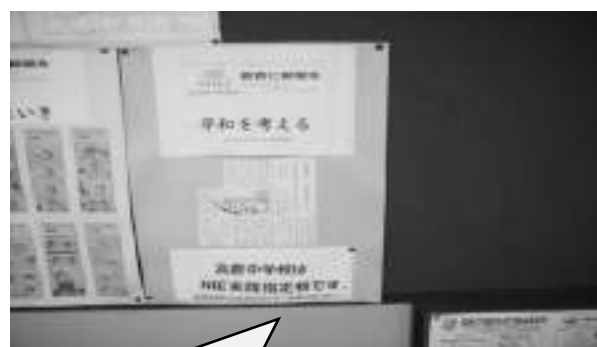
そこで、本事業を通して、積極的に情報の収集や取捨選択をする習慣を身に付かせることで、自分の考えや意見を持ち、そこから「自分がどのように生きていくか」について考えさせたいという思いから、「情報社会を有利に生き抜く力を養う」をテーマとして掲げることとした。

2 実践内容

(1) 新聞に親しむ

新聞については例年通り、学校図書館に配置を行った。上級生でも、そのことを知らない生徒もいたため、年度当初に各クラスへの周知を行った。また、興味関心の高い記事を切り

出して、職員室前の廊下に掲示した。



3 年生の修学旅行に関連した記事を掲示。

1 面記事も、生徒の「興味関心」が高い日のものを選んでみる。



学校司書のおすすめも掲示



(2) 1年生の取り組み 社会科

「新聞記事を通して、時事問題について
興味・関心を持つ」

中学生にとって、一番のターニングポイントは3年時における進路選択である。そこで、「なりたい自分」を基に選択するためには、様々な情報や考え方に触れることが必要不可欠である。そこで、社会科の授業にて学校図書館と連携し、新聞を読む時間を設けることにした。

新聞に触れたことが無い生徒も各クラスの1/3を占めるほどであったため、読み方すらごちない始まりであったが、次第に慣れた手つきで読み進めていく姿が見受けられた。また、生徒の感想から「新聞に触れることが一切無かったので、とても楽しかった」や「普段はネット・テレビで情報を得ていたので、新聞から得るのは新鮮だった」と前向きな言葉が見受けられた。

複数回新聞を読んだ後、一番気になる記事を決め、プリントに要約したものを記入した。それを、小グループで回し読みすることで、情報の共有を行った。また、読み手はノートに感想や意見を記入することで、様々な考えに触れる機会も設けることができた。その後、グループ代表を選出し、全体への発表を行った。

同じグループ仲間のプリントから新たな情報を得たときの目や、自らのプリントが返却された際に食い入るように意見を見る目は輝いており、新しい学びができた喜びを感じ取ることができた。今回の取り組みを通じて、「新聞は写真や図の使い方が良く、内容がとても分かりやすく感じた」と新聞に好印象を抱く生徒がいた。また、「新たな情報や意見を得たことで、より一層世の中への興味が湧いてきた。」と書いた生徒もいた。新聞を読むことが、自分自身の考えを広げることに大切であることを実感できたようであった。

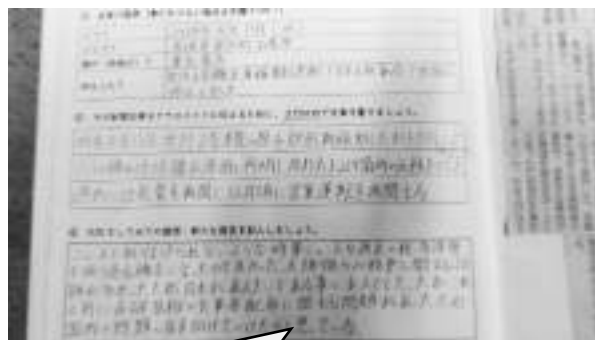


新聞は日付順に箱に入れて管理。

新聞の読み方も慣れてきました。



一番気になる記事を要約しています。



先を見通す力もつけることができました。

(3) 2年生の取り組み① 国語科

「メディアを比べよう

～情報社会を生きる～」

2年生は、1年生の頃に社会科の授業にて、新聞を用いた活動を行った。そこでは、社会科と関連する新聞記事に関して情報収集を行い、自らの意見を持ったり、社会科の知識を深めたりすることができた。

それ以降、社会科の授業の中で、時事問題を踏まえた意見を発表する生徒が出てきた反面、偏りのある意見を持つ生徒も見られるようになった。そこで、国語科と学校図書館が連携して、新聞・ネットニュースなどから得られる情報の比較を行うことにした。

はじめ、1人1部無作為で新聞紙を配付し、その中から興味のある記事を1つ選ばせた。この段階で、集中した雰囲気は漂っており、新聞を読む手つきも慣れたものであった。その後、記事の内容をまとめ、感想を記入させたのだが、これまでの活動の影響か、他の内容とも関連させた充実したものであった。

次に、記事の内容と同じネットニュースを検索させ、先ほど同様にまとめと感想の記入を行った。2つの情報が出そろったら、その2つを比較し、どのような違いがあるのかをまとめさせた。また、どちらの内容の方が、適切と感じたか聞いてみることにした。生徒の多くが新聞の方が適切と考え、その中には「ネットニュースが全てだと思っていたが、新聞はより詳細に書かれていることが分かった」と記入した生徒もいた。

最後にこの活動の感想を書かせたのだが、「新聞と比較してネットニュースは、時間に迫られている人向けだと思った」・「ネットニュースは既に情報を取捨選択したようなもののように感じた」など新たな気づきを得た生徒もいた。

自らの決断に、影響を与える媒体は何なのか理解して生徒たちは教室へと戻っていった。

慣れた手つきで新聞を読んでいます。



記事が決まったら、切り取ります。



スラスラと自分の感想を書いています。



ネットニュースも社によって、多種多様です。



(4) 2年生の取り組み②

トライやる・ウィーク～事前・事後の講話～

2年生は、トライやるウィークに向けての講話を2回受講した(1回目は事前、2回目は事後)。本校は、トライやるウィークでの取り組みをパワーポイントにまとめ、発表をすることを計画していたため、1回目はどのような視点でトライやるウィークに臨むべきかを教えて頂いた。記者の実践を聞けるということもあり、生徒は真剣な面持ちで耳を傾けていた。特に、事業所への「敬意」を忘れないことが最重要だと聞いたときに、多くの生徒がメモを取っていたのが印象的だった。生徒の感想を見ると、「事業所の、におい・音を感じることが大切というのは自分の発想に無かったのでタメになった」と感銘を受けていた。

2回目の講話は、トライやるウィーク後すぐに行った。はじめに、小グループに分かれて、体験したことを1分間で発表しあったのだが、前回の講話を踏まえて、「におい・音」に関して話している生徒がいた。また、記者の方より「一番印象に残ったことを中心に据えよう」とアドバイスがあったことから、全体の場で代表として話をした生徒の多くが、「生きた言葉」として伝えることができていた。

その後、パワーポイント制作を行った。ここでは、「働いたときに感じる気持ちはどんなものだろう？」というテーマで進めていったのだが、それに対する各自の答えが重なるものは少なかった。それは、NIEの講話によって、生徒が主体的にトライやるウィークに取り組めたからではと感じさせられたのであった。



3 取り組みを通して

今回、2学年で行ったNIEの取り組みを通じて感じたことは、「継続は力なり」ということだ。2年生は昨年度の取組の成果を、今年度の至る場面で感じる事ができた。1年生についても同様に、NIE前後で生徒の発言内容に変容が見られたのは言うまでもない。このように、生きるうえで重要な「考える力」を培ううえで、新聞の重要性を再認識できた。新聞紙を購読しない家庭が増えた昨今、膨大な情報を簡潔に整理した新聞に触れるきっかけを我々が作ることで、生徒はまた一つ成長したと確信している。

NIEノートを通して、主権者としてのまちづくり ～住み続けられるまちづくりを目指して 企業と地域との連携～

西宮市立浜脇中学校

校長 佐々木 理

教諭 野上 耕佑 西村 哲

佐藤 敦 渋谷 仁崇

1 実践の概要と内容

2024 年度も 23 年度より継続し、本校の教育課程・学校教育目標である「NIE 活動」の活性化に取り組んだ。社会とつながる個と集団の育成に向け、NIE の定着を図りたい。生徒たちに現代的な課題に向き合うスキルと態度をはぐくんでもらい、地域や社会とつながる数多くの機会を提供したい。主体的な学びを通して、社会全体を多面的・多角的に考察し、他者と対話する中で、SDGs の「住み続けられるまちづくりを」地域のテーマとして、主権者教育にもつげたい。そんな思いをこめた。

2 「NIE ノート」

芥川賞作家小川洋子先生来校

全校生徒 800 名が「NIE ノート（記事スクラップ）」を作成している。授業の最初に、各班の代表が書画カメラを活用して発表をする。お互いに内容のメモをとったり、意見を交流したりすることで「対話的な」学習にも結びつけている。

【芥川賞作家小川洋子先生／ひょうご NIE 通信】



社会の動きなど、興味関心をさらに高め、世界に目を向け、社会的な思考力を持って自分の意見やアイデアを発揮できる人になってほしい。
○評価について

定期テストに時事問題として出題。新聞をとっていない人は、テレビのニュースを見たり、インターネットなどプリントアウトしたりするのも可能。

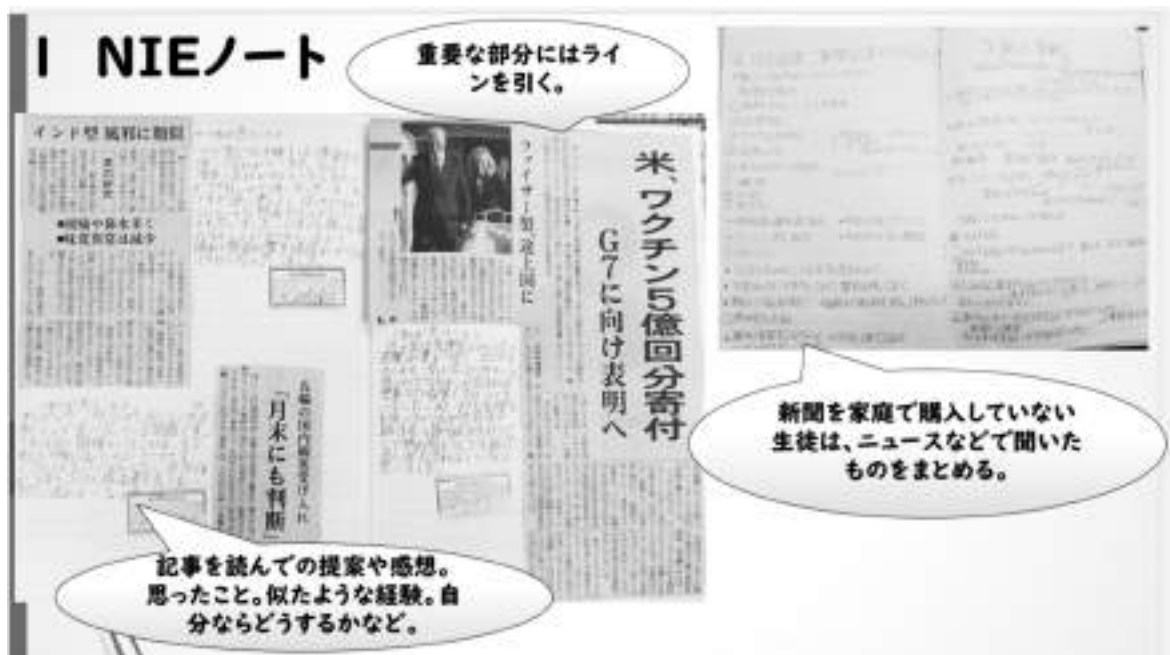


○「NIE 発表について」

●『思考力・表現力・資料の活用力を伸ばす』

●『主体的に学びに向かう姿勢を育む』

- ・正しい日本語を読む力
- ・見出しの付け方を学ぶ
- ・記事の内容を理解（記事の起承転結）する
- ・自分の感想を表現する力
- ・発表を聞き、要点を絞りメモを取る。
- ・記事への興味・関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ



★全校生を通じて、自然災害や SNS 関連、SDG s、国際情勢の記事が多い。「自分たちの日常の当たり前が、そうではない国や地域がある。自然災害への備えや、防災への意識を高めたい」

- ・ 1 年生 スポーツ、自然災害、政治、五輪
- ・ 2 年生 万博、SDG s、震災関連、地域関連
- ・ 3 年生 環境、政治、経済、社会生活など

大阪万博 EXP02025 と連携の未来社会や、SDG s 関連が多い。「石破首相やトランプ大統領になり、世界全体の流れがどうなるのか。平和や、社会問題に対してどのような対策をこれからもとっていくのか、消費者や国民目線で考えてほしい」と発表。

- ・ 特別支援学級「五輪」や「環境」「スポーツ」など、自分の興味のあるものを中心に調べている。

〔書画カメラを活用し、教室での発表〕



★『大学・企業の支援を学校につなぐ NIE 活動』

◇日本国際博覧会協会 リサーチミーティング

兵庫県 NIE 推進協議会と連携して「大学・SDG s 企業の協力と支援を学校につなぐ NIE 活動」研究会も発足。NIE と国連の持続可能な開発目標 (SDG s) を関連づけた取り組みを続けている。日本万国博覧会協会主催の「ジュニア EXPO プログラム」に毎年、全校生で参加している。2024 年度は、DNF (大日本印刷株式会社)、野村ホールディングス株式会社、NTT アーバンソリューションズ株式会社、株式会社 LIXIL、過去には大日本印刷株式会社、鹿島建設、ニッスイ、大阪ガス、阪急阪神 HD、大日本印刷、三菱自動車など著名な企業による SDG s 講座を通じ、各企業の取り組みを学んだり、企業と生徒の双方向でディスカッションしたりしている。



◇企業との連携

SDG s と EXPO を絡めた学習では、校外学習として、2025 年大阪・関西万博に主体的な学びの中で参加しようという思いで続けている。おおさか ATC グリーンエコプラザでの SDG s 学習や、日本万国博覧会協会による EXPO2025 の学習、エイジレスセンターでの福祉教育などを関連づけ、楽しみながら学んでいる。



〔日本博覧会協会による万博 EXPO 講座〕

岡山県真庭市との SDG s 連携学習では、2025 年に修学旅行で、真庭市を実際に訪れ、地域全体で「木材」をキーワードに、まちづくりをしているまちから、未来づくりを学ぶ。



〔真庭市との SDG s 連携学習〕

◇アイデアミーティング（主権者教育）

「アイデアミーティング」。SDG s 11 番目の目標「住み続けられるまちづくり」をテーマに、生徒各自が、新聞記事から題材を見つけ、その記事内容に関連づけ、自分たちの住んでいるまちの発展や課題解決に向けて、アイデアを練ってプレゼンテーションしている。

◇西宮市立中央図書館との連携

アイデアミーティングの作品が、春季休業中に、西宮市立中央図書館で展示されました。地域の方々にも、アイデアに対するコメントをいただき、生徒たちと交流しました。



記事ヒント、まちづくり考える 浜脇中 神戸大会で発表

「住み続けられるまちづくり」のテーマで、2 年生が新聞記事をヒントにアイデアを出し合う西宮市立浜脇中学校の学年発表会では、各クラスからの代表計 14 人が登壇した。「住み続けられる」は国連の持続可能な開発目標(SDGs)の一つ。「NIE ノート」を発展させた取り組みで、全員がまちづくりのプランを考えた。

授業の冒頭、代表の生徒が「よいまちづくりを主体的に考えていきたい」と宣言。発表では、中学生らしいアイデアが次々と飛び出した。

「現状はできないけれど、雷のエネルギーを蓄えたり利用したりすれば、電力不足を改善できるのでは」「使用済みのペットボトルで手すりを作り、横断歩道に付ける」「ルクセンブルクでは、公共交通機関の運賃が無料化された。西宮市でできれば便利で環境にもやさしい」

〔ひょうごNIE通信〕

◇主権者教育「衆議院模擬選挙」

10月に投開票された衆院選に合わせ、3年生が兵庫7区（西宮市南部、芦屋市）の模擬投票を行った。生徒たちは1票の重みを実感した。

「生徒たちは自分の1票をどこに投じるのか真剣に考え、実際の結果と比較して考察することもできた。今後につなげ、選挙で自分の意思を反映してほしい」（野上耕佑）。



〔感想を述べ合う生徒ら〕

◇河北新報社の震災伝承新聞

同世代が作った震災伝承新聞を用いて、「思いをわがまちにつなぐ」をテーマに行った。「まず自分がすべきことは、『わかろうとすること』だと強く思った」や「後世に伝えることが大事」、同世代が向き合う姿に感銘を受け、阪神・淡路大震災を経験した地域として“自分ごと”として考えていかなければならないと感じていた。

『伝承新聞』で防災を考える 東日本大震災を被災地の中学生
「教訓を自分事に」2025/2/28 05:30（神戸新聞NEXT）より



宮城県の中学生
「震災伝承新聞」を
浜脇中学校の生
＝西宮市宮前町
東日本大震災
教訓を伝え地域

〔神戸新聞・河北新報／掲載〕

◇震災体験記者講演会

神戸新聞NIE・NIB推進部 三好正文シニアアドバイザー、産経新聞大阪本社 岸本佳子編集長

阪神・淡路大震災の当時の取材の様子などの講演会を実施。「命をつないでいく」



◇国際・地域交流事業交流事業

〔香川県まんのう町議会議員NIE視察来校〕

議員さん5名と
行政職員4名が、
NIEの取り組み
を視察に来られました。議員の代表



者からは、「何より今日の授業での、生徒の表情と活動の様子が、この取り組みの素晴らしさを物語っている」との言葉をいただきました。

〔中国英禾（えいか）双語（そうご）学校〕

〔台湾桃園市立福豊国民中学校〕

日本の新聞記事を使って交流。翻訳機能を使って意見交換して、「推し記事」を発表。



3 成果と今後の課題

NIEを通じて社会問題への関心や理解を深め、多様な学びを深化させている。毎週の「朝NIE」や、新聞閲覧台設置などさらに発展している。地域、幼小との連携をいっそう強めたい。

生徒たちが多面的・多角的に地域課題や社会課題の解決策を考え、可能性を見だし、主体的にまちづくりに参画していくようNIE活動を継続していきたい。さまざまな社会問題に対し“自分ごと”として捉える活動を継続したい。

見つける、調べる、新聞形式にまとめて発表する

神戸大学附属中等教育学校 校長 齋木 俊城
教諭 金田 理子

1 はじめに

本校は、神戸市東灘区の酒蔵で有名な【福寿】の生産地の山麓の自然豊かな場所にある。中高一貫校だが、ごく一部の生徒は幼稚園から小学校、中学校・・・と共に学校生活をおくってきた生徒もいる。

2024 年度より NIE 実践校として取り組みをはじめたが、本校独自の KP (KobeProject 学習) では、自分でテーマを見つけ、調べて、まとめて発表するという学習に取り組んでいるため、総合的な学習や探究学習については、学校全体でも、生徒たちも個人的には慣れていると思われる。しかし、新聞形式にしてまとめるということにはあまり慣れていないので、今回は、主担当の金田の担当する教科や KP の取り組みを行った。

2 実践内容

(1) KP での取り組み

①神戸新聞 NIE・NIB 推進部三好正文シニアアドバイザーより講演

～インタビューのしかた、記事の書き方(要約のしかた)、見出しの付け方、記事と写真や資料などのレイアウトのしかたについて～

本校 2 年生 (中学 2 年生) 119 名を 10 講座 (学年所属の職員 5 名と研究部 5 名の計 10 名) を 10 名の職員が担当し、生徒一人一人が自分の興味関心を持ったテーマに沿って、問題や課題を見つけ、調べる、まとめる、発表するという学習を行った。その際、1 年生まではパワーポイントシートにまとめる、または、A4 サイズ 1 枚にまとめるというものであり、あまり形式や内容にこだわったものではなかった。

生徒が自分の思い思いの形でまとめられていたので、うまく自分の調べたことなどをまとめられた生徒もいれば、そうでない生徒もいた。したがって、せっかく丁寧に調べたことも、ただ文章を書くだけで、生徒の思いやアピールしたいことなどがわかりづらかった。しかし、新聞形式でまとめることで、「何を中心に調べたのか」「どんなことに重点をおいて発表したいのか」を意識してまとめることができるようになった。発表すること、他者に伝えたいことを伝えられることに重きをおいて調べたり、まとめたりすることができるようになった。

さらに、記事のまとめ方 (5W1H を考えながら要点を決められた字数にまとめる、見出しをつける、写真等のレイアウトのしかた、インタビューのしかた等) についてご指導いただいた。



各自の研究テーマにそって、生徒に質疑応答をしながら、記事のまとめ方や要点の書き方を練習した。

また、次の写真では、全体に向けてインタビューのしかたなどを学んだ。



②広島テレビ 衣笠アナウンサーより講演
～話し方、原稿（記事に書かれた文章）を
うまく相手に伝えるには～



さらに、発表することを意識した新聞づくりをめざしていることもあり、本校卒業生の現役アナウンサーから、発表をするための発声や原稿を他者に伝えるために必要な事などをご指導いただいた。

アナウンサーが研修で使用する資料を参考に発声練習や記事の読み方を練習し、指導をしていた。

お腹から声を出すこと、口をしっかりと開けて言葉を発すること、姿勢をよくすることや話すスピードなどについても指導を受けた。

（２）教科での取り組み

以下の新聞は、家庭科の授業の中で、持続可能な食生活をおくるために必要なこと、自分ができることについて、まとめたものである。

まず、通常の家庭科の授業の中で、これまでの自分たちの食生活について学んだことをもとに、これからも持続可能な食生活を送るために必要なことや問題点を見つけ、その問題点を解決するために必要なこと、自分たちができることを調べさせた。自分が実践可能な事、また、家族や自分の住む地域を巻き込んで

実践できるのではないか、と思われることをまとめさせた。まとめる時の注意点として、公的な機関が提供している資料をもとに、現状を説明し、自分が考えた（または、公的機関が考えたアイデアをもとに、自分が実践できそうな）アイデアや工夫点をまとめることができた。記事を書くのに、インタビューがなかなかできない学習のために、しっかり調べ学習を行い、使用する資料も吟味するように指導した。この講習を受けた後、年度末のまとめとして、食生活の問題点を見つける、調べる、まとめる、発表する学習を行った。



家庭科新聞

地方で行われている取り組み

てまえどり

てまえどりは、地域の食文化を継承し、食育を推進するための取り組みです。地域の食文化を継承し、食育を推進するための取り組みです。

てまえどりは、地域の食文化を継承し、食育を推進するための取り組みです。地域の食文化を継承し、食育を推進するための取り組みです。

てまえどりは、地域の食文化を継承し、食育を推進するための取り組みです。地域の食文化を継承し、食育を推進するための取り組みです。

30・10運動

30・10運動とは、30分間の運動と10分間の食育を推進するための取り組みです。30分間の運動と10分間の食育を推進するための取り組みです。

30・10運動とは、30分間の運動と10分間の食育を推進するための取り組みです。30分間の運動と10分間の食育を推進するための取り組みです。

30・10運動とは、30分間の運動と10分間の食育を推進するための取り組みです。30分間の運動と10分間の食育を推進するための取り組みです。

政府が行っている取り組み

政府は、食育を推進するための取り組みを行っています。食育を推進するための取り組みを行っています。

政府は、食育を推進するための取り組みを行っています。食育を推進するための取り組みを行っています。

政府は、食育を推進するための取り組みを行っています。食育を推進するための取り組みを行っています。

食品ロスへの取り組み

日本での面白い取り組み

Pickup 食べられるセメント

食べられるセメントは、食品ロスを削減するための取り組みです。食べられるセメントは、食品ロスを削減するための取り組みです。

食べられるセメントは、食品ロスを削減するための取り組みです。食べられるセメントは、食品ロスを削減するための取り組みです。

食べられるセメントは、食品ロスを削減するための取り組みです。食べられるセメントは、食品ロスを削減するための取り組みです。

海外での面白い取り組み

セルフサービス冷蔵庫

セルフサービス冷蔵庫は、食品ロスを削減するための取り組みです。セルフサービス冷蔵庫は、食品ロスを削減するための取り組みです。

セルフサービス冷蔵庫は、食品ロスを削減するための取り組みです。セルフサービス冷蔵庫は、食品ロスを削減するための取り組みです。

セルフサービス冷蔵庫は、食品ロスを削減するための取り組みです。セルフサービス冷蔵庫は、食品ロスを削減するための取り組みです。

まとめ

食品ロスの削減は、食育と密接に関連しています。食品ロスの削減は、食育と密接に関連しています。

食品ロスの削減は、食育と密接に関連しています。食品ロスの削減は、食育と密接に関連しています。

食品ロスの削減は、食育と密接に関連しています。食品ロスの削減は、食育と密接に関連しています。

食糧依存問題新聞

大量生産・消費からの脱却に向けて

大量生産・消費からの脱却に向けて、食糧依存問題を解決するための取り組みを行っています。大量生産・消費からの脱却に向けて、食糧依存問題を解決するための取り組みを行っています。

大量生産・消費からの脱却に向けて、食糧依存問題を解決するための取り組みを行っています。大量生産・消費からの脱却に向けて、食糧依存問題を解決するための取り組みを行っています。

大量生産・消費からの脱却に向けて、食糧依存問題を解決するための取り組みを行っています。大量生産・消費からの脱却に向けて、食糧依存問題を解決するための取り組みを行っています。

食糧依存問題の現状

食糧依存問題は、世界中で深刻な問題となっています。食糧依存問題は、世界中で深刻な問題となっています。

食糧依存問題は、世界中で深刻な問題となっています。食糧依存問題は、世界中で深刻な問題となっています。

食糧依存問題は、世界中で深刻な問題となっています。食糧依存問題は、世界中で深刻な問題となっています。

家庭科新聞

クイズ：消費者と食品ロス対策の距離を縮めよう！

クイズ：消費者と食品ロス対策の距離を縮めよう！クイズ：消費者と食品ロス対策の距離を縮めよう！

クイズ：消費者と食品ロス対策の距離を縮めよう！クイズ：消費者と食品ロス対策の距離を縮めよう！

クイズ：消費者と食品ロス対策の距離を縮めよう！クイズ：消費者と食品ロス対策の距離を縮めよう！

生産中に出る食品ロスは？企業の取り組み

生産中に出る食品ロスは、企業の取り組みによって削減されています。生産中に出る食品ロスは、企業の取り組みによって削減されています。

生産中に出る食品ロスは、企業の取り組みによって削減されています。生産中に出る食品ロスは、企業の取り組みによって削減されています。

生産中に出る食品ロスは、企業の取り組みによって削減されています。生産中に出る食品ロスは、企業の取り組みによって削減されています。

新聞記事から生活につながる学びを

姫路市立あかつき中学校 校長 山下 雅道
教諭 伊達 実

1 はじめに

本校は、2023 年 4 月に開校した播磨地域初の夜間中学校である。夜間中学校は、さまざまな理由で中学校での学びを十分にできなかった生徒が通う学校である。16 歳から 92 歳までの幅広い年齢や 5 か国に至るルーツがあり、言語や文化の異なる多様な生徒が在籍している。それぞれ背景が異なり、年齢・国籍等により、生活経験や学習歴も一人一人異なることから、その実態に合わせた様々な工夫をこらしている。限られた授業時数による学習内容の精選から、授業内容の自主的な編成を行う本校の利点を生かした取り組みを行い、「生活につながる学び」を日々実践している。新聞記事から得る情報は生活につながるそのものであり、学習内容として好機を逃さずに取り上げることで、生徒の学習意欲をより高めることができる。

また、身近な地域の問題を学校において生徒同士で共有することから、生徒自身の経験や知識を交流することにつながり、学習を深めることができる。



2 これまでの NIE の取り組み

A)新聞コーナーの設置

1 階廊下に新聞コーナーを開設し、生徒が自由に新聞を手にとって読むことができる。教室への持込みも可としている。購読した新聞は、読売・日本経済・産経・神戸・朝日小学生・毎日小学生・JAPAN NEWS である。

B)全教科で、新聞利活用学習の実施

各教科の実践を NIE 実践報告の様式でまとめてデータで保存していく。ワークシートやプレゼンテーション資料も合わせて保存する。※「3. 実践の内容」を参照。

C)『あかつき新聞』発行

生徒からの情報提供や学校生活の様子などを材料として、新聞記事を作成する。当初は教員で作成するが、生徒の自主的な記事提供も呼び掛けていき、生徒の主体的な活動へとつなげていく。生徒の自己表現のよい機会とし、自尊感情や自己有用感を高める活動としていきたい。

D)記者派遣事業の実施

9 月 30 日 2・3 時間目に神戸新聞記者による講演「新聞ができるまで」の授業を行った。

- ①見出しやタイトルを考えよう(記者の持込みの新聞を活用)
- ②文章の書き方＝「わかりやすい」「伝わる」をテーマに夏休みの作文を事例にして解説
- ③2 学期の目標について作文を書こう

3 実践の内容

A) 社会

○单元名：近代国家の歩みと国際社会

○テーマ：新紙幣について



○大まかな学習活動：新聞記事の内容に関する質問に答え、新紙幣に採用された人物について知る。

(第一次)【新紙幣の肖像に採用された人物について知る】

- ・神戸新聞(7月3日朝刊)1面を読み、各紙幣の人物が残した功績の質疑応答をする。

(第二次)【新紙幣に採用された新たな技術について知る】

- ・神戸新聞(7月3日朝刊)2面を読み、新紙幣に使用されている技術の名前を答える。

(第三次)【紙幣の肖像になったことがない人物を知る】

- ・10名の偉人から、今まで紙幣に採用されたことがない人物を答える。有名な政治家、時の政府を支えた人物、文学・医学で功績を残した人物が採用される傾向にあるというポイントを伝えた。



○留意点：漢字の難読さを考慮し、教師が範読する。自分が大事だと思う個所に線を引かせる。

○生徒の反応：紙幣という日常的に目にするものが題材ということで、興味・関心が高かった。また、3Dホログラムの技術の高さに驚いていた。

○実践の成果と課題：記事を理解しようと何度も読み返し、粘り強く課題に取り組む姿勢が身に付いた。しかし、漢字の理解度の違いで、内容理解に差が出てしまった。

B) 理科

○单元名：天気

○テーマ：昨日の雹はどうして降ったのか？



○大まかな学習活動：神戸新聞の記事を見て昨日の雹がどのような原理(発生の仕方)であるか探究する。

(第一次)【神戸新聞NEXTの記事を見て、昨日の雹の影響を知る。】

- ・被害の状況、範囲やどんな大きさのものが降ったか等について考え、雹が降った事を認識させる。気象庁のHPを調べ、昨日の大気の情報を探る。上空はどのような状態であったか、予報はどのようなになっていたか、雷が発生していたか、寒気が流れ込み、大気が不安定だったか等を確認しながら指導する。

(第二次)【寒気が流れ込むとどうなるか。】

- ・寒気が暖気に流れ込む様子を見せ、寒冷前線と温暖前線の仕組みを理解させる。

(第三次)【寒冷前線が天気に関わっていることを知る。】

- ・積乱雲の様子も踏まえ、雹は雷を伴うものが多いことがわかる。天気予報等に関心を持ち、防災につなげる。

○留意点：実際の被害もあるので、防災に向けての話題であることなどを配慮した。

○生徒の反応：けがをした生徒はいなかったが、帰宅に時間がかかったことや自宅の車が傷ついた事象があった。天気は日常生活に結びついているが天気予報の確認程度なので、本授業は興味深く学べた。

○実践の成果と課題：昨日の事象という記憶に新しい自然現象を取り上げたので、興味深く学習できた。天気図の見方まで進めなかったが、1時間では無理であった。

C) 国語

○単元名：はがき新聞を作ろう

○テーマ：新聞に触れて・感じて・考えよう

○大まかな学習活動：新聞記事から季節ごとに俳句を作り、身近な新聞記事に見出しをつける。自分の身の回りの出来事に興味や関心をもって新聞に触れるきっかけとする。そして実際にはがき新聞を作ることで、読みやすく書くための手順を知り、自分の思いを綴った記事づくりへと発展させる。



(第一次)【俳句は、季語や十七音からなる短い詩であることを知る。】

- ・季節ごとに食べ物・植物・行事などからどんな季語があるか考える。それを元に新聞から春・夏・秋・冬を感じる記事を見つけ、記事から感じる音やにおい、味、手ざわり、話している言葉を想像し、俳句作りに生かす。作った俳句を発表し、良いところを見つけ合う。

○留意点：新聞に触れることも少なくなってきたため、自分で実際に新聞を捲って季節に合った新聞記事を探す。その際、写真を頼りに探したり、見出しから見つけたりして新聞に触れる。

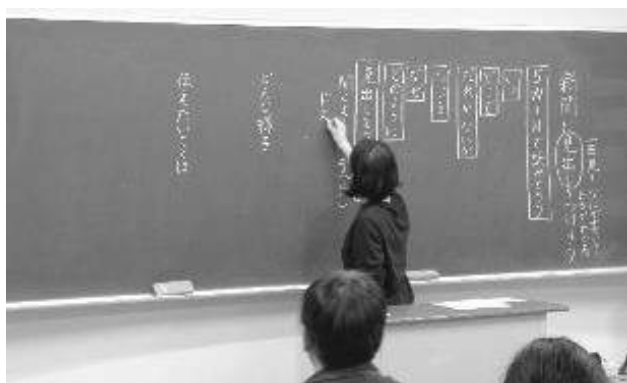
○生徒の反応：自分が手にした新聞からその季節ならではのものを熱心に探す様子が見られた。初めて新聞を手にする生徒もおり、興味をもって活動できた。

○実践の成果と課題：写真や見出しの言葉を使って俳句を作ることができたが、記事の内容まで読み進めて俳句を作る生徒は少なく、写真や見出し以外の補足を個別にする必要があった。



(第二次)【新聞に見出しをつけよう】

・NIE出前授業で新聞の読み方や文章の書き方、見出しをつける授業を受け、5W1Hに沿って記事が書かれていることを学んだ。身近な秋の風物詩「姫路・灘のけんか祭り」の記事を取り上げ、新聞内容を5W1Hで読みとる。短く、簡単な言葉で書くことを意識して見出しを作り、それぞれ発表し合う。



○留意点：身近な記事を用いることで、新聞の内容から5W1Hを見つけやすい。また「灘のけんか祭り」を知らない生徒がいたため、後日、祭の動画の視聴を行った。

○生徒の反応：よく知っている生徒にとっては、記事の内容が入りやすく、記事の内容や写真から知っていることを交流する場面も見られた。

○実際の成果と課題：新聞の内容を5W1Hにして読み取る活動は、記事の中からワークシートの空欄に合う言葉を見つけ、埋めることができた。しかし、どんな記事の内容だったか理解するまでにはかなりの個人差が見られた。もう一度ワークシートにまとめた内容を説明する時間が必要だった。見出しは、短い言葉で書くことを意識して、記事やワークシートから言葉を選び作ることができた。発表し合うことで、同じ記事でもキーワードとした言葉が違うため、生徒それぞれの思いの詰まった色々な見出しができ、よい交流となった。

(第三次)【はがきサイズの新聞を書こう。】

4 生徒の変容

新聞コーナーや授業での新聞利活用学習により、これまでよりも大幅に新聞に触れる機会が増えた生徒がほとんどである。その中で、新聞の特徴である一覧性や新聞に表された多彩な言葉に気づくことができた。また、日頃触れることのない話題や社会の出来事に触れるなど、社会課題への出会いから、社会に目を向けようとする積極的な姿勢も見られるようになってきている。

5 成果と課題

実践の内容C)国語の(第二次)新聞に見出しをつけよう「姫路・灘のけんか祭り」の記事の授業では、80代の生徒から、祭りについての詳しい情報を追加で説明する場面があったり、祭りを知らない外国籍の生徒の質問があったりして、それぞれの生徒の興味・関心を広げて、生徒同士の交流を通して学習を深めることができた。実践の内容A)新紙幣については3Dホログラムの技術、B)電については大気との関係など、身近な出来事から新たな視点の獲得をすすめる学習ができた。今後は、生活につながる身近な題材の特徴や自分との関わりを見つけ、主体的・自律的に考えて自らの意見を発信していく「意見形成力」の育成を目指していきたい。そのために、新聞記事から現状を理解して、自分たちが行うべきことを考え、生活につながる身近な題材についての多面的・多角的な視点を持ち、社会課題を自分事として捉えることを目指していきたい。また、生徒同士の対話を取り入れた授業をすすめ、多様な考えを生かして豊かな学びへとつなげていきたい。



【 高等学校・中学校 】

NIE 活動を通した社会的事象への 多角的考察と探究的学習の推進

甲南高等学校・中学校 校長 山内 守明
教諭 足立 恵英

1 はじめに

甲南高等学校・中学校は1919年に平生鈇三郎によって創立された阪神間の私立男子校である。「世界に通用する紳士」の育成を教育目標とし、徳・体・知のバランスのとれた「個性尊重」を基本とする教育を実践している。

甲南大学への内部進学を前提としたアドバンストコース（2024年度中1よりメインストリームコース）と他大学進学を見据えたフロントランナーコースを設置しており、前者には、国際的な視野と素養をもつ人物の育成に重点を置くグローバルスタディープログラムも展開されている。また、キャリア教育を始め、探究的な学習により、多角的視点から物事を見つめ考える力の育成のための取り組みもおこなっており、2023年度に引き続きNIE活動への取り組みもその実践の1つに位置付けている。2024年度に関しては、前年度のものを継続的に深化させるものや特徴ある新たな取り組みもおこなった。

える形で掲示することによって、生徒は、一面に掲載されている重要トピックスが自然に目に入り、時事問題への意識を高めることにもつながったと思われる。



また各社の1面記事の違いも容易に確認でき、その違いに自然に意識が向くようになったのではないかと考えられる。



2 新聞配置

「図書館内に新聞閲覧コーナー設置」

図書館では新聞の収納に関して新聞社毎に引き出し型のトレイに入れて、直近1ヶ月分を閲覧できるようにしていたが、NIEによる新聞提供期間には、平置き型の閲覧台を利用し、天井からの吊り下げ看板に新聞社名を記載した上で、その下に当日の新聞をそれぞれ平置きする形で配置した。

これまでとは違い、新聞の1面が容易に見

3 実践内容

① 平和学習（中3）

「新聞活用による人権学習」

中学3年生では「平和学習」を学年教育目標の中心とし、修学旅行において、長崎での原爆学習や鹿児島県の知覧での特攻隊の学習等を通じて平和について考える機会を意識的に確保している。

今年度の中3は、生徒が平和に関するテー

マを自由に選択し、新聞記事の要約を行い、肯定と否定の両面の立場や意見を認識したうえで、私見を述べることに取り組んだ。

テーマの選択に関しては、原爆関連が 42.2%と最も多く、国際関係 28.9%、国内政策 7.5%、差別 5.8%、となった。9 月末の文化祭で、参考とした新聞記事と授業担当者からの講評と共に中 3 全生徒が展示をおこなった。



② 新聞トーク（高 3・中学全学年）

「高校生が中学生に話す新聞の効用と活用」

【実践概要】

昨年度に引き続き、新聞の活用機会をさらに広げ、「中高 6 年一貫教育」の下で、「教育活動における生徒間の縦のつながり」を醸成する側面も踏まえて「新聞の効用と活用方法」を伝えることを目的として高校 3 年生から中学生に向けて、直接 ZOOM で話してもらうという「新聞トーク」の実践を継続した。高 3 生には上述の目的を伝え、自由にトークの内容を構築してもらった。

形態としては、「朝の読書」(10 分間)の時間を利用して、高 3 生が、新聞の効用について中学全に向けて ZOOM で直接話しをするというものである。

2024 年度は 1 学期に 5 人の高 3 生によるトークを実施し、2 学期にそれを深化させる目的でその内の 1 人による 2 回目のトークもおこなった。

特に 2 回目のトークにおいては、その生徒の 1 回目のトークを踏まえて、そこで説明した内容を実際の紙面を用いて確認、深化させることを目的にトーク内容の構成を指示した。

大学受験等の影響で、既に進学先大学が決定している高 3 生 1 名が、11 月に中 1 と中 2 に各 1 回ずつトークを実施した。

11 月のトークに関しては、中 1 において日本経済新聞の「高校生向け特別版」を全員に配布することができたので、その紙面を用いてのトークを実施した。中 2 に関しては、当該高 3 生が 1 学期におこなったトークの内容を更に深化させるものとして実施した。



【トークの概要】

高 3 生のトークの概要は以下である。

- ・ 今日、情報の収集はインターネットが主流であるが、そこでは偏った情報に触れる機会が増えてしまうことも多い。新聞は中立的な立場で書かれており、情報の信頼性が高い。(Y)
- ・ 新聞は多角的な視点を得られるだけではなく、正しい日本語で書かれており、新聞を通じて書く力も鍛えることができ、それらは大学受験にも大いに役立つ。
- ・ 自分は新聞を書き写すことで正しい日本語を書く能力のトレーニングもしているので、是非、皆さんも実践してほしい。(Y)
- ・ 新聞には、いくつかの分類があり、全国紙、産業経済新聞、スポーツ紙等がありそれぞれに特徴がある。(H)
- ・ それぞれの新聞(新聞社)には成り立ちや歴史があり、それに目を向けてみるのも面白い。(H)
- ・ 新聞には「社説」があり、記者個人ではなくその新聞社全体の立場、意見を表している。(Kd)

- ・「社説」を読むことで、新聞社の考えを知ることができ、同時に自分の意見を構築することやそれを深めることもできる。また、その問題の背景や解決策についての理解を深めることもできる。(Kd)
- ・「社説」を読み比べ、違った意見を聞くことで、新しい視点が見えてくることにもなる。(Kd)
- ・新聞には政府や政治家を監視する機能もある。(Kd)
- ・新聞記者は現地で取材し「生の情報」を得ており、新聞がなくなると生の情報が激減し、不確かな情報で溢れかえってしまう。事実、アメリカではそのようなことが起こったことがある。(Kn)
- ・新聞には社会の悪事を暴くという役割もあり、新聞を読むことが汚職事件などを抑制することにもなる。(Kn)
- ・ネットでは、自分の興味のある記事を「クリック」をすることによって読み進めるが、それでは自分の興味のない記事を把握できなくなり、情報の偏りの第一歩となる。(Kn)
- ・新聞は全分野のキーポイントが網羅されており、自分の興味の有無に関わらず情報に接することができる。(Kn)
- ・新聞だからといって気を張って読む必要はなく、肩の力を抜いて、始めはタイトルだけや一面だけといったように自分のペースで新聞をよむ習慣を付けることがよい。(Kn)
- ・「地方紙」は地域ならではのことを取り上げる事も多く、イベント参加や地域の企業の商品利用を促すことなど、地域住民の興味関心を引くことで地域の活性化につながっている。(Y)
- ・新聞は、その事案の取材を通じて、後の世に伝え残したいことも記載している。読み手もその観点を意識して、新聞を活用してほしい。(Y)



【新聞トーク事後アンケート】

事後の受講生へのアンケートでは、「新聞トークの内容は、わかりやすかったですか？」との問いに「わかりやすかった」との回答が 83.4%、「これから新聞を読んだり活用したりしてみようと思いましたか？」との問いには「そう思う」との回答が 74.7% となり、新聞を読むことへの興味、関心の醸成につながったことが窺える。

③ 「グローバル考現学」(高3)

本校では高3アドバンストコースの選択科目の1つとしてグローバルな視点から現代社会の問題点について、生徒達が自ら問いを立て実践的な探究を深める「グローバル考現学」を開講している。

阪神・淡路大震災 30 年、戦後 80 年を踏まえて、新聞作成アプリ「ことまど」を利用し、新聞記事を作成することを必須として、以下の取り組みをおこなった。

【広島研修】

被爆地広島市に足を運んで、被爆者の方や、広島平和記念資料館の館長、職員、新聞社の現役記者、被爆体験伝承者など多くの方々からお話を伺った。ホテルのラウンジや取材の合間の喫茶店など、教室の机上ではない場所で記事を作成し、「動きながら学びを深める」経験につながった。

被爆者の切明千枝子さん(95 歳)から証言を伺った際、生徒たちは限られた時間内に、予定していた質問など全ての話を引き出しきれなかった。しかし、その経験から取材の難しさと

準備の重要性を改めて実感することができた。

また、別の被爆者の方は、体調不良で取材が叶わず。被爆者の高齢化が進んでいる現状だということを体感的に学ぶことができた。

その方については、年末に日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）がノーベル平和賞を受賞した際、日本被団協の代表的な立場から会見で話され、生徒たちが報道を通して国際的な視点から原爆を捉える機会にもなった。

【神戸市長田区での取材】

2学期からは、阪神・淡路大震災について過去の新聞記事や動画から、震災の被害やその後の街づくりについてリサーチを進め、「ことまど」で記事にまとめて、授業で発表した。

震災で地域の8割が焼失したという神戸市長田区御蔵地区のまちづくり支援団体「まち・コミュニケーション」でお話を伺った。震災時、経営する会社の社屋を火事で失いながらも、その後、地域の復興に携わった田中保三さんのお話を聴いたり、実際に地区を歩き、慰霊モニュメントや黒く焦げた電柱、炎に包まれたクスノキなどを前に説明を受けたりした。生徒たちは事前に長田区の被災状況や同団体に関する情報収集も行っていたことから、その日のうちに現場で学んだことを記事にすることができた。

この新聞記事は「ことまど新聞コンクール」高校生の部で金賞に選ばれた。また、広島で取材した新聞記事は同高校生の部で特別賞に選ばれた。

【ライター（書き手）として考える】

1年間を通して生徒たちは、「授業を受ける」立場から離れ、「自ら記事を書いて発信する」立場に立ち、原爆と震災について学びを深めた。過去記事からの情報収集に加えて、読売新聞の一面コラム「編集手帳」を書き写して音読するなど、文章を書くために必要とされる基礎的なトレーニングも積んだ。

多角的な視点から物事を考える習慣がついたことも収穫である。原爆投下について学ぶ際、日本からの視点だけではなく、原爆投下

を指示した米トルーマン元大統領の孫の男性が、大人になって初めて広島・長崎の惨状を知り、葛藤し、そこから被爆者と関係を築き、米国で被爆体験の継承に取り組む記事について語り合った。被爆国でありながら、2021年に発効した「核兵器禁止条約」に日本が参加していない現状など、世の中には「善悪」や「白黒」だけで語れない物事があることも理解できた。

答えのない課題について考え、当事者に問い、自らの文章で表現しようとする取り組みは、生徒たちの成長を促す機会となることを、この授業を通して、教員側も改めて理解できた。



4 成果と今後の課題

NIE 実践校として昨年に引き続き2年目の活動であった。2024年度は新たな取り組みも実践することができたが、いずれもより生徒達が実践的に挑戦する取り組みを目指した。また、昨年度の実践を踏まえ、それを深化させることができた内容もあったと感じている。

一方では、NIE活動がどうしても一部の教科、教員の活動にとどまるものとなっている。新聞をとる家庭が激減する中で、新聞の効用を伝える「新聞トーク」の実践は事後の生徒アンケートでも新聞への関心が高まったとの結果となっているが、それをどのように今後の新聞活用につなげていくか、現状に即して継続的に検討しなければならないと感じている。

【 高 等 学 校 】

はがき新聞と学年通信で NIE

ー京都探究で残そう、はがき文化ー

兵庫県立伊川谷高等学校 校長 小川 卓也
主幹教諭 福田 浩三

1 実践の背景・目的

国際理解教育・ICT教育・人権学習教育・食育・安全教育・新聞教育など、教育内容の多様化に伴い、教育現場で必要とされる〇〇教育は増加の一途である。教育現場においてこれら増え続ける〇〇教育を学習内容の質を確保しつつ、生徒への定着を図るために継続して実施するため、本校48回生では週刊「学年通信」（筆者がNIE実践の一つとしてB4両面にて毎週作成する一般紙に模した学年通信を示す）に多様な連載コラムや特集記事を執筆掲載し、生徒が読むことで学びに繋げている。

また、GIGAスクール構想により急速に進んだ教育のデジタル化やSNSの急速な発展の中、はがきを書いて実際に投函するといった旧来の文化は今後、教育の過程において体験により守られる重要な要素になると考えた。

そこで今回、本校2年生が実施する京都遠足を題材に、高校生に「はがきを書いて投函する」経験を持たせると同時に、事前学習および事後の振り返りにおける「はがき新聞」の活用、「学年通信」における特集記事の掲載により、研修先である京都への興味・関心・探究心を深めると共に自己表現力を高める試みを行った。

2 実践の内容

(1) 「はがき新聞」を用いた下調べ

3月上旬に学年集会にて生徒に遠足の行き先（京都市東山区）を発表し、「はがき新聞」による調べ学習課題を提示した。この際、「はがき新

聞」専用用紙（薄青の罫線が描かれているもの）ではなく、通常はがき（日本郵便の「手紙の書き方体験授業」にて教材提供されたもの）を用い、学校の担任宛に3月19日必着で投函するよう指示した。この実践の目的は、

- ・「はがき新聞」を活用することで、校外学習を単なる級友との親睦を深めるに留めず、研修先への興味・関心・探究心を深める。
- ・「はがき新聞」という限られた紙面にて読み手に内容を伝えるための表現を考える。
- ・はがきの投函経験が少ない生徒にはがきの投函経験を持たせる。
- ・はがきの宛名面の書き方における指導の要点を教師が把握する。

である。また、「はがき新聞」を作成するにあたって、以下の点に関して注意を促した。

- ・調べる内容は京都に関することであれば可。
- ・Webで調べた内容をそのまま写さない。
- ・出展や参考文献を明記する。

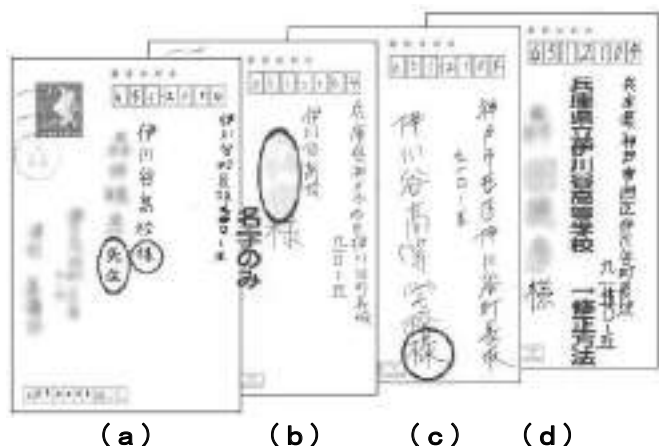
実際に生徒が作成した「はがき新聞」を資料1に示す。



資料1 生徒の事前学習「はがき新聞」

指定した期日に間に合わせるため、速達を選択した生徒もいた。生徒が近年の郵便配達状況を理解したうえで、必着の意味を考えるよい機会になったと筆者は考える。また、届いたはがきの宛名面を確認することで、

- a. 「様」と「先生」を併記
 - b. 担任の名前を調べずに名字のみ記載
 - c. 高等学校の後に「様」を付ける
 - d. 住所の修正を二重線で行う
 - e. 差出人が住所のみで名前が書かれていない
 - f. はがきの表と裏を上下逆に使用している
- など、宛名面の書き方を中心とした「指導を要する要点」を把握することができた。これら表書きの例を資料2に示す。



資料2 指導を要する表書きの例

届いた「はがき新聞」は、観光・建物・食べ物・歴史・いろいろ、の5種に分別し、4月に学年の廊下へ一斉に掲示した。生徒はこれらの作品を互いに確認することで、京都についての知識を深めると同時に、「はがき新聞」へのまとめ方について考えた。生徒が作品を確認し合う様子を写真1に示す。



写真1 作品を確認し合う様子

(2)「学年通信」の活用

生徒の京都に対する興味関心を高める目的で、

京都遠足実施前に発行する「学年通信」にて3号に渡り特集記事を掲載した。記事の内容は、

- ・教員の京都遠足下見の様子
- ・京都の抱える課題（オーバーツーリズム問題・財政難に人口減少）
- ・京の町の見どころ
- ・生徒の京都調べ「はがき新聞」課題の掲載

である。生徒には、実際に京都遠足が実施される際に、これらの内容について確認を行うことも課題の一つとして加えた。「学年通信」に掲載した特集記事の例を資料3に示す。



(a)

(b)

資料3 「学年通信」の特集記事

(3) 京都遠足の実施

京都遠足を2024年4月26日に実施した。その目的は、

- ・集団の一員としての自覚を高め、規律ある行動をとれるようにする。
- ・班ごとに主体的・計画的に行動しながら、お互いの親睦を深める。
- ・古都京都の歴史や文化にふれ、それらを学び豊かな心を育む。

であり、京都市東山区の円山公園へ現地集合、班別に近郊散策、集合場所にて現地解散の形式で実施した。また活動中に、「はがき新聞」を用いた下調べの内容の確認や考察を可能な範囲で

行うよう、事前に指示した。

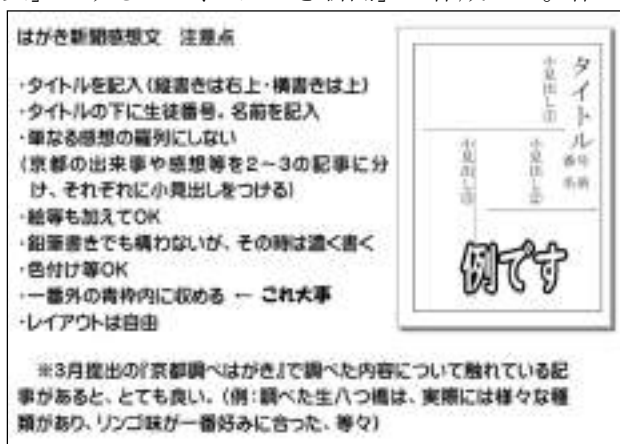
京都遠足の活動の様子は「学年通信」にて2号に渡り特集記事を掲載することで、学年全体で共有した。特集記事の例を資料4に示す。



資料4 特集記事の例（上部の黒枠部分）

（3）京都遠足感想「はがき新聞」の作成

京都遠足終了後、その感想を単なる文章に留めるのではなく、「相手意識を持った読まれる感想文」とするため、「はがき新聞」で作成した。作



資料5 「はがき新聞」感想の注意点

成時、生徒に配布した注意点をまとめた用紙を資料5に示す。また、生徒の作品を資料6に示す。



資料6 京都遠足感想「はがき新聞」

また、生徒の作品は互いに確認しあい次の作品制作時の参考とできるよう、クラス毎にまとめて教室前の廊下に掲示した。その様子を写真2に示す。さらに、クラス毎に代表作品を1つ筆者が選び、「学年通信」にて紹介した。



写真2 「はがき新聞」の掲示

3 結果・考察

本実践を行った学年は、入学時から繰り返し「はがき新聞」の作成を行っているため、見出しの付け方や図・イラストの入れ方など、生徒の表現力が高まっている。しかし、京都調べ学習においては情報の出所や引用先を明らかにしていない作品も多くあり、これらを明記に対する指導の必要性を感じた。

また、下調べをまとめた「はがき新聞」を担当充てに投函するように指示をしたが、大半の生徒が学校住所の次に学校名を記載せず担任名を書いていた。さらに、

- ・敬称を付けていない
- ・誤った敬称（〇〇先生様、伊川谷高校様など）
- ・はがきの表裏で上下が逆
- ・必着日までに届かない

など、はがきを出す習慣のない生徒への指導の要点（敬称の付け方、必着の意味など）が明らかとなった。これら以前は生活の中で得られた知識についても、学習の機会を持つ必要があると考える。

「はがき新聞」による生徒感想を読む限りでは、生徒各々が京都遠足を楽しんでいたことが分かる。

「はがき新聞」の作成と「学年通信」の活用により、生徒は遠足当日だけでなく、その前後においても京都について多面的に考える事ができた。継続した「はがき新聞」の作成により、その作品から生徒の「書くことによる表現力の向上」を見て取れた。

4 おわりに

本稿で紹介した、「はがき新聞」と「学年通信」を活用したNIE実践は、小学校や中学校においても実践可能な内容として筆者が企画・実践したものである。「はがき新聞」は、はがきサイズということで、その作成は30分程度で完了するため、様々な科目の授業においても容易に取り入れることが可能である。また、「文章を書く」「要点を見出しとしてまとめる」などは、早期に訓練するほど生徒の能力向上に繋がりやすいと考えるため、実践を終えて筆者が感じたことは、「本実践は児童生徒の年齢が低いうちに実践するほど、より効果が得られるのではないか」ということである。学年通信や学級通信は小学校や中学校でより頻繁に活用されている現状から、学校行事や「はがき新聞」とリンクさせて事前・事後学習として活用しやすいと考える。

本校はNIE実践指定校として3年間活動を行い、NIE実践も非常に充実したものとなった。本実践は、2024年夏に実施された「第29回NIE全国大会京都大会」でのポスターセッション発表を

踏まえ、京都遠足を題材に行った。その他に本校では、以前より継続実践している2つのテーマとして、

- ・〇〇教育を包括した学年通信の提案と実践および効果の検証—生徒・保護者に読まれる校内発行通信作りを通した新聞文化の継承—（2024年11月に日本NIE学会第21回大阪大会にて自由研究発表）
- ・「はがき新聞」を活用した多文化共生へのアプローチ—「やさしい日本語」による新聞記事の書き換えを通して—（2023年12月に日本NIE学会第20回福岡大会にて自由研究発表）

がある。前者は筆者がNIEの観点を、「教育に新聞を活用する」ではなく「教育に活用する新聞を作る」と捉えたもので、生徒・保護者に読まれる学年通信を作成し、その中に国際理解教育・ICT教育・人権学習教育・食育・安全教育・新聞教育など多数の〇〇教育に関する記事を逐次掲載することで、「学年通信を読むことによる学び」に繋げている。

また後者は本校で4年間継続実施しており、2024年8月には筆者が世話人に加わり、「新聞をつかった『やさしい日本語』研究会」を設立した。その内容は、

- ・「やさしい日本語」に関する学習会の実施
- ・新聞記事の書き換え講座の公開
- ・新聞をつかった「やさしい日本語」活用法の開発

であり、教育関係者や新聞関係者とともに2ヶ月に1度の頻度でオンライン学習会を実施している。関西において近年複数の夜間中学校が新たに開校するなど、異なる価値観をもった多様な生徒が集う学びの場が増えつつあるため、本研究会では今後、このような学びの場において異なる校種を交えて実践および効果検証を行う予定である。

なお、前述の2つは2025年夏に実施される「第30回NIE全国大会神戸大会」にて発表予定である。

新聞活用と総合学科の学び

兵庫県立須磨友が丘高等学校 校長 大久保 隆
教諭 岩本 和也

1 はじめに

本校は全日制総合学科の高校であり、18 クラス、約 720 名の生徒が学んでいる。本校では、自己や社会を理解し、自分の生き方や社会への関わり方について考えていくことを目的に、1 年次全員が「産業社会と人間」を履修する。また、2 年次から始まる「課題研究」では、自らの関心に基づきテーマを決め、自分が立てた問いを検証していく探究学習を行っている。これらの学習の中では、新聞記事等を用いながら社会の情勢を知る活動も行っている。また、自己教育力を養い、生徒の想像性や表現力を豊かにすることを目的に、朝の読書（以下、朝読）の時間を設けている。このような取り組みを通して、時代を越えて変わらぬ真理を探究し続け、心豊かに生き抜くことのできる人材育成を目指している。

2 教育活動における NIE の位置づけ

2024 年度は NIE 実践指定校の 3 年目である。一昨年度より朝読の時間を利用して新聞記事を読む学習活動を行い、23 年度は 1・2 年次生を対象に実施した。ふり返りアンケートからは、生徒の新聞に対する苦手意識がやや改善されたことが明らかになった。また、本校と同様に NIE 実践指定校である、近隣の神戸市立横尾小学校と「防災」をテーマにした小高連携授業を行い、大変有意義な実践となった。これら 23 年度の実践の成果と課題を踏まえて実践を行った。

本校 1 年次を対象とした事前アンケートで

は、新聞を取っている家庭は 30% (23 年 49%) で、日ごろ情報を入手する手段としては、インターネット 81% (23 年 85%)、テレビ 62% (23 年 71%)、新聞 10% (23 年 5%) という結果だった。23 年と比較して新聞を取っている家庭は少なく、新聞を取っているかどうか分からないという生徒もいた。生徒にとって新聞はなじみがなく、日常生活の中でほとんど触れることがないことが明らかになった。

3 実践の内容

(1) 朝読における新聞学習

ア 概要

- ・朝読の時間帯に、1 年次と 2 年次で週 1 回新聞を読む時間をつくる。
- ・複数の記事から興味のあるものを選び、気になる箇所等に線を引き、記事の内容について考えたこと等を記録する。

イ ねらい

- ・新聞記事を通して社会を知り、視野を広げるとともにアイデア創出のタネを集める。
- ・新聞記事を選び、読んだ内容から心に引っかかった部分をストックしていくことで、自分の傾向や関心の方向性を知る。

ウ 実施方法

a 準備

- ・教師があらかじめ新聞記事を選ぶ。毎回 2 パターンを用意する。
- ・選んだ記事はテキストカードに貼り付けた形でロイロノートの資料箱に準備する。

b 朝読の時間

- ・生徒はロイロノートを開き、資料箱から記事を選ぶ。選んだ新聞記事を読む。
- ・重要だと思った箇所、個人的に気になった箇所、疑問に思った箇所などに線を引く。
- ・記事の下のスペースにコメントを残す。



図1 朝読NIEワークシートの例

(2) いっしょに読もう！新聞コンクール

1年次の夏季休業中の課題として、生徒が興味を持った新聞記事を選んで切り抜き、記事を選んだ理由と記事に関する自分の感想や意見をまとめた。また、家族や友だち、クラスメートなどに自分が選んだ記事を読んでもらい、その人の意見を聞いたり話し合ったりした内容を踏まえて、最後に自分の意見・感想・提案・提言を行った。

生徒が自分で新聞を選ぶことで、生徒自身の関心事から社会課題への「気づき」を促し、家族や友だちとの対話を通して多様なものの見方や考え方を知る機会になった。

(3) 兵庫県NIE推進協議会主催「記者派遣事業」

12月13日(金)、1年次「産業社会と人間」の時間に、神戸新聞社よりNIE・NIB推進部の三好正文シニアアドバイザーと中島摩子報道

部記者を講師としてお招きし「阪神・淡路大震災 震災前夜からの記憶」と題した講演会を行った。25年は震災から30年の節目の年になる。生徒たちは震災を経験していないが、今自分が住んでいる神戸が当時どのような被害にあったのか、さらに昨今のSNS等の普及による情報の受け取り方など、この先起こるかもしれない自然災害に対し自身がどう行動するべきなのか、心構えを持つことができた。

〈生徒感想〉

- ・スマホやSNS、各種メディアが普及している今、災害が起きても家族に連絡がしやすい反面、デマやフェイクニュースが発生するリスクもある。普段なら事実かどうか見極められても、非日常で正常な判断ができるとは限らない。人の不安な気持ちを利用する人もいるという事を知っているだけでもフェイクニュースに振り回されなくなるといった。
- ・新聞など、震災を直接体験した方々がそのままの状態に残すものは、後の世代に「語り継ぐ」時にすごく重要になるといった。また、被災地をつなぐきっかけにもなり、支援の広がりにもつながるといった。
- ・犠牲者の生きた証を残し、それを語り継ぐことや、災害への対策や意識につなげることがより大切だと思った。地方新聞ならではの地域の人々との関わりがあり、それが災害時により重要なものになるとわかった。



写真1 講演会の様子

(4) 神戸市立横尾小学校との小高連携授業

ア 概要

- a 日時：2025 年 2 月 5 日（水）
- b 場所：神戸市立横尾小学校 普通教室
- c 対象：小学 6 年生 2 クラス（50 名）
- d 内容：阪神・淡路大震災と能登半島地震
が起きた当時の新聞記事を用いて、
「防災ジュニアリーダー」を中心
とした高校生が防災授業を行う。

イ ねらい

地元神戸で発生した阪神・淡路大震災と、2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震に関して、それぞれの地震に際し、特に避難所について報道された記事から「避難所で困っていること」を読み取り、そこから見える共通点や、どのような支援が必要かを話し合い、さらには「自分たちがどのような備えをしておくべきか」を考えることをねらいとした。

また、小学生のグループに高校生がファシリテーター役として入ることで、相互に意見交流を行い、互いに学びを深められるように授業計画を立てた。

ウ 授業展開

- ①防災ジュニアリーダーとしての活動報告
（石川訪問を経て）
- ②グループ活動（新聞記事を用いて）
 - ・「兵庫県南部地震 支援の輪励みに助け合う被災者」（神戸新聞 1995 年 1 月 22 日）
 - ・「能登半島地震 避難 3 万人 足りぬ備蓄」（神戸新聞 2024 年 1 月 7 日）
- ③グループを指名し、全体の前で発表（話し合った内容を共有する）
- ④振り返り、まとめ

エ 小学生から出た意見（一部）

- ・防災バッグの中身を確認する。
- ・避難経路を調べる。

- ・地震が起きたときに逃げる所を決める。
- ・ハザードマップで危険な場所を確認する。
- ・地震が起きたときにどこで集まるのかを家族で相談しておく。



写真2 グループ活動の様子

オ 高校生の振り返り

- a 授業を振り返って、うまくできたことや、嬉しかったことは何ですか？
 - ・小学生が問いにつまんでいる時、助言やアドバイスをして手助けできたのでよかったです。
 - ・小学生たちの想いや、感じたことを知ることができたのがうれしかったです。
 - ・小学生が意欲的に取り組み、意見をたくさん出してくれて嬉しかった。小学生同士で話し合うことで、新しい意見を考えられていて良かった。
- b 授業を振り返って、思うようにできなかったことや、次に生かしたいことは何ですか？
 - ・小学生たちが1つの問いに対して多くのことを書いてくれましたが、書き終わるのを待っていると時間が足りなくなりました。よく質問をしてくれる子とばかり話していたので、全員としっかり話すことができませんでした。
 - ・時間配分が難しかった。前半の遅れを取り戻すことを意識しすぎて急かしてしまい、たくさん意見を書こうと頑張っていた児童の思考の幅を狭めてしまった。

c 当日の授業までにどのような準備をしましたか？ また、工夫した点や、苦労した点、意識したことは何ですか？

- ・どの順番で質問をするか、どのような聞き方をするかを考え、小学生が意見を出しやすく分かりやすいように準備をした。小学生に分からない単語があるかもしれないので、難しい単語の意味を調べてまとめた。
- ・リハーサルを行って、小学生との接し方や、当日の流れを確認した。その中で、いかに短くわかりやすく伝えるかを意識して取り組んだ。



写真3 全体発表の様子

4 本年度の成果と課題

(1) 成果について

年間を通し、1・2年次生は朝読の時間に新聞記事を読む学習活動に取り組んだ。振り返りアンケートでは、「この活動を通して自分の力が伸びたと思うか」という質問に対し、①記事を読み取る力は「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて93.7%（昨年93.1%）、②考えや思いを表現する力は「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて92.1%（23年88.4%）、③社会への関心は「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて90.5%（23年94.4%）という結果になった。23年と同様、ほとんどの生徒にとって成長の実感へとつながったことがうかがえる。

昨年度は、時間に余裕がある人のみ記事に対するコメントを記入する仕組みしていたが、今年度は必ずコメントを残すようにした。そのためか、②考えや思いを表現する力の項目で昨年度よりも成長を感じた生徒が増えた。

また、「新聞に対するイメージ」では、①面白くないと回答した生徒が活動の前後で74.7%から49.0%に減少（23年79.1%から56.3%に減少）、②大人向け（高校生が読むものではない）と回答した生徒は63.2%から43.1%に減少（23年61.4%から41.0%に減少）し、一昨年および昨年同様、新聞への苦手意識が減り、新聞に対するイメージがやや改善されたと思う。

神戸市立横尾小学校との小高連携授業では、「児童が実際に記事を読み、一人一人が自分のこととして考えることができた。考える観点を絞ってあったため、普段課題に取り組むことが難しい児童にも考え易かったと思う」と小学校の担当者から伝えていただいた。複数の新聞を比較することで、時代による変化や、時代を経ても変わらない課題について考えることができた。また、高校生にとっては、小学生に教えるという体験を通して、防災に関する意識がより高まる機会となった。

(2) 課題について

神戸市立横尾小学校との小高連携授業において、高校生と小学生の交流が盛だったグループでは、楽しみながら取り組むことができていたが、書くことに熱中してしまい、あまり交流ができなかったグループもあった。高校生の防災知識やファシリテーションのスキルの差が明らかになった。限られた時間の中で、記事との対話だけでなく、グループ内での対話を増やすための工夫が必要である。

探究活動に向けた新聞活用

兵庫県立有馬高等学校 校長 小川 秀雄
教諭 森澤 亮介

1 はじめに

本校は三田市の中心部に位置する緑豊かな学校であり、県下で4番目の歴史と伝統を有している。全日制の「人と自然科」と「総合学科」及び定時制を配置し、さまざまな進路目標を持つ生徒に向けて幅広い教育を行っている。

2023年度NIE実践指定校になり、2年目になる。これまで「総合的な探究の時間」である「ARIMA探究I」において、情報収集を行うなどして主にNIE活動を行ってきた。また、「私の推し記事コンクール」や「いっしょに読もう！新聞コンクール」にも多数の生徒が作品を提出し、優秀賞を受賞した生徒もいる。2024年度は新たに1年次「産業社会と人間」の授業の中でも新聞の活用を始めた。

2 新聞配布の方法

下の表のように、新聞は4月及び5月は6紙すべて、6月以降は2紙ずつ提供された。
(夏休み期間中を除く)

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
新聞										
朝日	○	○	○					○		
毎日	○	○	○					○		
読売	○	○				○			○	
日経	○	○				○			○	
産経	○	○					○			○
神戸	○	○					○			○

それらを、総合学科2年次の5クラスに順番に配布する形式をとった。職員室前のクラス配布ボックスに入れられたものを日直やクラス担任が教室に持っていき、所定の箱に入

れて生徒が自由に閲覧できるようにした。箱の中にいっぱいになった新聞は、職員室前に作られた閲覧場所に保管して、バックナンバーとして全校生徒が自由に閲覧できるようにした。



3 1年間の取り組みについて

(1) 「ARIMA探究I」

探究活動の原点である「リサーチクエスション」、すなわち問いを立てるところから1年間の学習はスタートした。各クラスに置かれた新聞の中から生徒はそれぞれ気になったキーワードを抜き出し、それをもとに問いを立てていった。新聞を普段から読む生徒は非常に少ないが、教室に設置することで身近なものに感じることができたようである。



なお、「ARIMA探究I」の授業の欠席者には、「おススメの記事を紹介しよう」という課題

を出し、その際に新聞を活用させた。その後、問いに向けて探究活動をしていく際にも、新聞を利用することができた。インターネットでの情報収集が主になるのは時代の流れからやむを得ない部分もあるが、その情報を鵜呑みにするのではなく、別のサイトや新聞、本など複数の情報源から真実、根拠を探し出すように指導した。



(2) 「産業社会と人間」

① 記者派遣事業



2025年1月24日(金)の5、6限に、神戸新聞NIE・NIB推進部の三好正文シニアアドバイザーを講師としてお招きし、講義をしていた。最初に、「最近、気になるニュースは？」ということで生徒同士話し合いの時間を設けたところ、実にさまざまな話題が出てきており、生徒の関心が多方面にわたることが再確認できた。また、新聞は24年に行われた兵庫

県知事選や衆議院議員選挙において批判されることがあったが、三好氏はそのことを踏まえて、「今ほど『正しい情報を読み解く』ことが大切な時はない」と強調された。新聞の特徴として①一覧性、②網羅性、③信頼性、④保存性の4点を挙げており、SNSでの情報収集や発信が盛んな現代においても、これらの点において新聞の優位性は揺るがないだろうとのことであった。

<講義を聞いた生徒の感想>

- ・メディアリテラシーを身につけるとともに、情報収集の1つの手段として新聞を読むということを習慣化していきたいと思った。
- ・SNSのニュースばかりを読んでいたが、それだけでは知りえないこともあると感じた。
- ・ニュースを疑ってみることが大事だと思った。同じ内容の記事でも本文や写真が異なっているの、読み比べることが大事である。

② 社説を読む

また、2025年2月7日(金)の5、6限には「批判的読解力や多様な物事の見方を身に付けよう～各紙の社説を比較して～」と題した授業を行った。この授業は公開授業として設定され、県内の高等学校から10名弱の教員と神戸・読売新聞などの記者が来校し、授業を見学された。社説とはそもそも何なのかという話を皮切りに、以下の話題の中から各生徒に二つずつ割り振り、読解させたうえでグループで話し合いを行った。(A～Cの話題は比較的似通った意見、D～Fは各紙意見が分かれる内容となっている)

- | |
|--------------------|
| A:成人の日(読売—朝日) |
| B:大谷選手MVP(神戸—読売) |
| C:能登半島地震1年(日経—毎日) |
| D:エネルギー基本計画(日経—毎日) |
| E:同性婚訴訟(産経—朝日) |
| F:首相アジア訪問(産経—読売) |

なお、読解の際には以下の点に注目させた。

- ・主張（何を一番訴えたいのか）
- ・根拠（根拠、データは示されているか）
- ・トーン（肯定的、批判的、中立的など）
- ・自分の意見（どちらが自分の意見に近いか）

背景知識を必要とする話題も多く、記事の読み込みに苦勞する生徒もいたが、用語を各自のタブレットで調べたり、グループワークの際に他の班員や教員に尋ねたりして、理解に努めた。

次年度から始まる「ARIMA 探究 I」で情報収集をする際にも、今回の学びを生かしてほしい。

<授業を終えた後の生徒の振り返りより>

- ・新聞社によって記事の取り上げ方は異なるため、1つの記事を見ただけでそれが全てだと思ひ込まないようにすることが大切だと思った。
- ・書かれている記事の内容について、証拠やデータをさらに調べて確かめることも必要だと思った。
- ・日ごろからたくさんのニュースを見て、社会のことを知っていくことや、語彙を増やしていくことが大切だと思った。



(3) 新聞コンクールへの応募

①「わたしの推し記事コンクール」

2024 年の春休みに、総合学科の新 2, 3 年生全員が兵庫県 NIE 推進協議会主催の第 2 回「わたしの推し記事コンクール」に応募した。その

結果、「絵本『アンパンマン』50 年 食べさせる顔 本当の正義問う」（神戸新聞 2023 年 8 月 11 日朝刊）の記事を題材にした生徒の作品が優秀賞に選ばれた。

②「いっしょに読もう！新聞コンクール」

2024 年の夏休みには、1 年生の希望者及び 2 年生が（いずれも総合学科）本コンクールに応募した。その取り組みが評価され、学校奨励賞を受賞した。

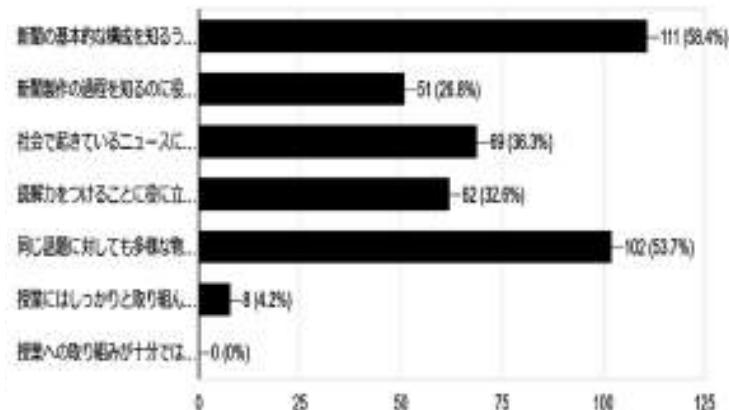


4 成果と今後の課題

(1) アンケート結果と分析

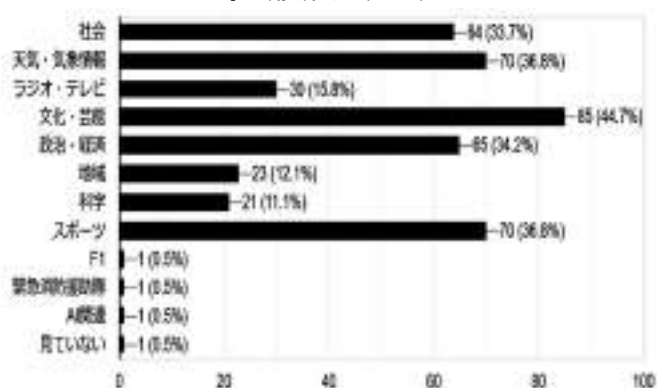
「産業社会と人間」で行われた NIE の取り組みから、生徒がどのようなことを学んだのかを調べるために、受講者全員に対して 3 月 7 日（金）にアンケートを実施し、190 件の回答を得た。

① 3 学期に行われた「新聞の読み方講座」や「社説比較」の授業について、あてはまるものを選びなさい。（複数回答可）



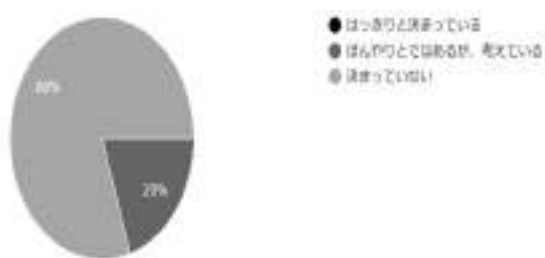
新聞の構成については記者派遣事業で詳しく話をしていただいたので、生徒の印象にも強く残っているようである。また同様に、公開授業で扱ったテーマに直結する「同じ話題に対しても多様な物事の見方があることを知るのに役に立った」と答えた生徒が50%を上回った。今回の取り組みが一定の成果を得たといえる。引き続き探究を進めていく際にも、情報の比較・検討を意識させていきたい。

② 現在関心のあるニュースの話題を次から選びなさい。(複数回答可)



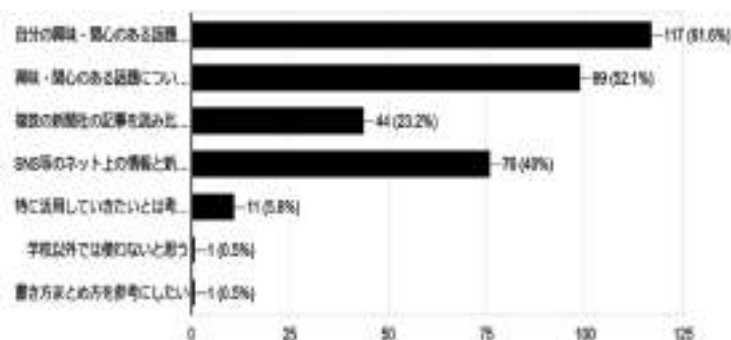
生徒にとって身近な話題である「文化・芸能」が他を大きく上回った。「天気」や「スポーツ」などもおそらく同じ理由で関心が高い。「政治」や「社会」など少し難しい話題に関しても思ったより関心が高いこともわかった。

③ 現時点で自分の探究したいテーマが決まっていますか？あてはまるものを選びなさい。



はっきりと決まっていると答えた生徒はいなかったが、ぼんやりと考えている生徒が20%も現時点でいたことは、良い意味で想定外であった。今後の探究活動に期待が持てる結果となった。

④ 2年生から探究を進めるうえで、新聞をどのように活用していきたいと考えますか。あてはまるものを選びなさい(複数回答可)



新聞を探究のための話題・テーマ探しに活用すると答えた生徒が一番多かったが、何か情報をより深く知るのに活用すると答えた生徒も半数を超えている。

(2) 課題

2024年度はNIE実践指定校2年目になり、新聞コンクールでの表彰や公開授業など学校外に対して校内の取り組みのことをより広く知ってもらうことができた。また、情報の「比較・検討」をするうえで新聞は有力なツールであることも1,2年生ともによく理解していたように思う。

一方で、NIEへの取り組みが年間を通して継続して行われなかったこと（今回は3学期に集中してしまった）、そして探究の時間にしか活用できなかったことは反省点である。改善案として以下のことを現在考えており、実践していきたい。

- ・朝学習の時間に新聞のコラム欄を読み、その感想を簡単にまとめさせる。

→年間を通して新聞に触れることができる。社会で起きている出来事を知ることができたり、語彙を増やしたりするのに役立つ。

- ・各教科の中で、新聞を活用した授業を年に一度は実施してもらう。

→学校を上げた取り組みであることを生徒・教職員がより理解できる。

3年目として、NIEの取り組みの集大成となる1年としたい。

新聞を活用して社会の諸問題について考える

兵庫県立西宮高等学校 校長 谷口 聡
教諭 三木 美穂

1 はじめに

本校は、美しく連なる六甲の山並みを背に丸くそびえる甲山を望む閑静な文教地区に所在し、教育環境に大変恵まれている。全日制単位制普通科に加え、兵庫県の公立高校では唯一の音楽科を設置し、全校生徒数約 1,000 名の大規模校である。長い伝統で培ってきた教育目標を継承しつつ、スクールポリシーに基づいて、教育内容の刷新に努めている。

「総合的な探究の時間」では、スクールポリシーの一つである「多様な視点から物事を捉え、新たな課題を発見し、解決に向けて主体的に行動できる生徒を育成する」ことを実践しており、1 年次で新聞記事を活用した取組を NIE 推進事業として 2020 年度より継続している。

事業の中で新聞記事にある社会課題が SDGs のどの目標と関連しているかを発見し、新聞ポスターにまとめて発表する過程で、社会の諸問題について多様な側面から考える学習を行っている。

本校生の新聞を購読している家庭はここ数年約 50% で推移していたが、今年度は 25% にとどまっている。一方で紙の新聞を取っていないものの、新聞各社の電子版を活用して情報を得ている生徒は半数を超えている。BYOD がスタートして 3 年経ち、「紙離れ」が急速に進んでいるように思われる。本校では紙とデジタルの両方の良さを生かした教育を心がけている。

2 新聞の置き場と整理

新聞を活用する授業は 6 月から実施するため、4 月、5 月の 2 カ月間、新聞社 6 社から朝刊夕刊それぞれ 2 部ずつ配達してもらい、「総合的な探究の時間」で使う資料が置かれている小教室にまとめて保管した。

新聞ポスターの授業が始まる前に、生徒 1 人当たり 2 部はいきわたるよう均等かつランダムにクラスごとに分配した。授業が始まってからは教室に保管し、いつでも手に取ることができるようにした。

3 実践の内容

(1) 「新聞ポスター」の作成を通して

1 年次の総合的な探究の時間では、「社会を知る」というテーマの中で「新聞ポスター」の作成を通して社会の諸問題について考える時間を設けている。

SDGs の 17 分野の社会課題を学び、気になる課題を新聞記事から探し、社会の動きを確認した後、新聞を切り抜いて新聞ポスターを個人で制作する。ポスターには記事を選んだ理由、記事から考えたこと、意見文の 3 つの観点を記入する。出来上がったポスターは、班ごとに発表と意見交換を行い、班のメンバーを 3 回替えることでより多くのメンバーと意見交換をする。

社会に目を向けることが少ない高校生が意識をして新聞を読む経験となり、1 年次後期から行う地域活性化の授業や 2 年次より始まる「課題研究」の研究テーマを見つける活動につながっている。

<授業のねらい>

- ◆新聞記事の中から、自分の興味・関心を持ったテーマの記事を探し出す目を養う。
- ◆記事のいろいろなつながりをみつけ、課題の広がりを見つける。
- ◆新聞記事を読解し、要旨をまとめ、他者に発信する力を身につける。
- ◆他者の発表から新たな考え方や視点を知る。その際、World Café 形式を取り入れ、小グループで席替えを繰り返しながら話し合うことで、多様な価値観を共有する。

<授業展開>

日付	テーマ	内容
5/1	社会を知る1	SDGs について考える
6/5	社会を知る2	新聞ポスター①導入
6/12	社会を知る3	新聞ポスター②テーマ決め
6/26	社会を知る4	企業の SDGs への取組(講演)
7/17	社会を知る5	新聞ポスター③作成
9/11	社会を知る6	新聞ポスター④発表
9/18	社会を知る7	地域活性化分科会(ワークショップ)
12/4	社会を知る8	地域活性化全体会(講演)

【SDGs について考える】

新聞ポスター作成に入る前に SDGs についての考えを理解し、自分の解決すべき目標の優先順位を考え、意見を共有し、一つにまとめる練習をする。



①新聞ポスター導入

- ・新聞を一人2紙以上配付し、新聞から得られる情報を分類、分析する。新聞は回覧し、なるべく多くの紙面に触れる。
- ・記事の中から自分が興味を持ったものを選び、「SDGs」17分野のどれにあてはまるか確認する。



②新聞ポスターテーマ決め

- ・「SDGs」の17分野から、興味関心あるテーマの新聞記事を選んで切り取る。
- ・新聞ポスターのタイトルを決定する。(例:「コロナで動く経済新聞」)
- ・A3×2枚のレイアウトを考える。意見文やイラスト等も含めてレイアウトを考える。



③新聞ポスター作成

- ・意見文を下書きする。
- ・意見文では、切り取った新聞記事に対する考えを述べる。そして、社会で起きていることは地域でも起きていると考え、地域における問題提起に繋げる。
- ・意見文を清書し、記事とともにポスターに貼り付ける。
- ・次時に発表する内容を考える。発表の留意点は、意見文を読むのではなく、自分の言葉でプレゼンテーションをすることである。
 - 1 なぜこのテーマを選んだか。
 - 2 どのような記事を集めたか。
 - 3 それはSDGsのどの分野か。
 - 4 自分はどのように考えたか。
 - 5 今後、研究したいことは何か。

④新聞ポスター発表

1人2分程度で、班内で発表を行い、意見を交換する。また班のメンバーを変え、3回発表をすることで、より多くの意見交換の場を確保する。



【地域活性化分科会】

新聞ポスターでまとめたことを、身近な地域に引き寄せて解決すべき課題を考える。地域の現状を理解するために、地域の公的機関、企業、団体、から話を聞き、班で意見交換して考えをまとめて発表する。



【地域活性化全体会】

新聞ポスター作成を通して、社会課題を考え、社会課題を身近な地域に引き寄せて考え、課題を解決するために自分たちが高校時代に身に付けることは何か、自らの生き方に結び付けて考える総括の講演となる。



（２）新聞記者派遣事業

NIE 新聞記者派遣事業として、11月14日（木）日経新聞社の岩本隆様をお招きし「探究活動における資料の収集と分析」というテーマで2年次生対象にご講演いただ



いた。信頼性のある情報を収集することの重要性のみならず、情報のネタ探し、新聞の読み方、日本語講座などを課題研究につなげていただき、生徒の今後の取り組みに有益な時間となった。生徒からは「内容がよくわかる記事の見出しを参考に課題研究のポスター発表をしたい。」「言葉を使うときの注意点を改めて聞くことができ、普段の生活で実践していきたい。」といった感想があった。

4 成果と今後の課題

新聞を活用した新聞ポスター作成は、スクールポリシーの一つである「多様な視点から物事を捉え、新たな課題を発見し、解決に向けて主体的に行動できる生徒を育成する」ための、基本となる授業として位置付けている。社会を知るために必要となる情報を得るときに、高い信頼性、深い背景分析と解説、ジャンルの多様性、地域情報の充実性といった、多くの利点を備えている新聞は大変有益であるとして、実際に触れ活用する機会を授業に取り入れている。

本校の生徒は真面目に課題に取り組む力や常識的に物事を考える力を持っており、ほとんどの生徒が熱心に新聞を読み込み、社会的課題について真剣に考えようとしている。新聞を手にした生徒たちは、気になる記事に対して意見を交換したり、新聞を開かなければ気づかなかった出来事や考えに感嘆したり、教室内で視野の広がりを感じて体験している。今後も新聞ポスター作成を出発点として、社会の現状を把握し、課題を発見し、自ら解決していく力をつけることを目標に社会と身の回りの出来事に目を向けさせたいと考えている。

今後も探究活動に活かせるよう新聞を活用する機会をさらに増やし、活動を深化していくとともに、多くの教科で活用、実践していけるよう働きかけたい。

NIE×SDGs×総合的な探究の時間

兵庫県立三木北高等学校 校長 吉田 真治
主幹教諭 石田 武史

1 実践の概要

本校はユネスコスクールの理念を教育活動の柱の一つとしている。全校生が取り組む、総合的な探究の時間では第1学年は「SDGsへの理解」、第2・3学年は「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」、の4つで構成される「探究のプロセス」を重視した探究活動を行っている。これらの活動がNIEを活用し、さらに充実したものなること目指している。

2 NIEの学習計画

(1) 展開方法

ア 各学年・教科・科目での活動

年度当初の職員会議で「NIE実践校(2年目)」であることを全職員に伝え、各教科・科目、総合的な探究の時間、課題研究等で新聞を用いた授業を行うことを確認した。

イ NIEワークシートの作成・活用

23年度と同様、神戸新聞のコラム「正平調」を用いた独自のワークシートを作成し、週末課題、長期休業中の課題として生徒に取り組ませた。

ウ 全校集会での活用

定期的に行われる全校集会において、高校生が関連する事件・事故、トピックを活用し、注意喚起や自律心の向上に役立てた。

(2) 指導上の留意点

(1) アについて

各教科・科目の授業内容の理解を深めることができるよう新聞を活用した。また、探究活動に必要なデータや専門家の見解

などを得るために新聞記事を活用した。

(1) イについて

今年度は、生徒が興味を持つような記事だけではなく、国内や世界で起きていることなど、幅広い分野の記事を選んだ。また、漢字の読みや言葉の意味を考えながら読むことができるよう工夫した。

(1) ウについて

近年、高校生を取り巻く事件や事故が増加していることを踏まえ、生徒指導の側面から新聞を活用した。

(3) 評価

特に数値による評価は行わず、感想文やワークシートの提出状況をチェックすることのみで評価を行った。

3 新聞の置き場と整理の方法

本校に配達された新聞は図書室の「NIEコーナー」のロッカー内に保管している。新聞業者ごとに、生徒や職員が利用しやすいように整理されている。



4 実践の内容

(1) のじぎく特別支援学校との NIE 交流

ア 日 時 2024 年 11 月 1 日 (金)

イ 場 所 本校図書館

ウ 参加者 本校第 1 学年生徒 6 名
のじぎく特支高等部 8 名

エ 内 容

(ア) 正平調を用いたワークシート

本校生が取り組んでいるワークシートに取り組んだ。まず、交互に音読を行い、わからない漢字の読みや言葉の意味を調べた。次にワークシートの問題を協力して解いた。できるだけタブレット端末は用いず、図書館にある蔵書を活用し、協力して解いた。



(イ) 「ペタッと SDG s 学習ふせん」を用いた新聞を読む活動

まず、図書館の新聞コーナーからランダムに新聞を選んだ。その後、記事の内容と SDG s との関連を話し合いながら、該当する記事に 17 個の SDG s 目標のシールを貼った。



(2) 記者派遣事業

ア 日 時 2024 年 12 月 19 日 (木)

イ 場 所 本校青志館 (多目的ホール)

ウ テーマ

「新聞取材の仕方と新聞の作り方」

エ 講 師

神戸新聞 NIE・NIB 推進部 三好正文
シニアアドバイザー

オ 対 象 第 1 学年生徒 100 名

カ スケジュール

12 月 18 日 (水) までに 図書室の新聞コーナーから興味のある新聞記事 1 つを選ぶ。
12 月 19 日 (木) までに 選んだ新聞記事について、下調べをする。(記事の内容、場所、背景、関係者、問題点、解決方法など)
12 月 19 日 (木) 3 限 講演会実施
12 月 19 日 (木) 4 限 手書きで A3 サイズの新聞を作成する。※ロイロノートで提出
12 月 23 日 (月) 担任による 1 次選考 プリントアウト・掲示
12 月 24 日 (火) 「いいねシール」を用いて、生徒・職員による投票 最優秀賞 (1 名)、優秀賞 (3 名) を決定

キ 生徒の感想

(ア) 講演会を終えて感じたこと

- ①今日の講演を聞き、新聞はとても工夫されて作られていると思いました。新聞を見ることは滅多にないですが、いろいろと考えられていることを知り、工夫されている点を含めて読んでみようかと思いました。

②新聞は興味がある記事しか読みませんし、どうやって作られているかを気にしたことがなかったので、今日の説明のように作られていると分かっておもしろかったです。毎日当たり前のようにたくさんの記事があるけれど、新聞を作ることは本当に大変だと分かりました。

③小学校の頃から新聞作りをする機会はたくさんありましたが、今回のように講演を聞き、どうすればより良い新聞になるか考えながら新聞作りを行っていくのは始めてでした。

④多くの文字が読みやすいのは、多くの工夫が隠されているからだと分かりました。インタビューとアンケートがよく使われているのは、起きた事実だけではなく、客観的にも意見を集められているからだと分かりました。

⑤新聞を作るためにはたくさんの情報収集やインタビュー、取材をしないといけないと思いました。新聞の文字など、読みやすい新聞になるように文字なども工夫していくことが大切だと思いました。

⑥新聞を作るのは大変だなと思いました。内容を考えるためにたくさん取材したり、調べたり、インタビューしたり、アンケートを取らないといけないと思いました。また、自分の考え・意見・主張も書くことを知りました。

⑦自分だけの意見だけでなく、友達 10 人くらいにアンケートに答えてもらい、事実についてどう思うか書くことと、いろいろな視点で考えること、「問い」ではない「答え」を伝えることも大切だと分かりました。

⑧新聞作りは見る人が見やすいようなレイアウトにしたり、興味を引くような見出しにしたりすることが大事だと思いました。作るときに自分が新聞を読む側の気持ちになれば、良い新聞が作れると思いました。

(イ) 今後どのような行動をとるか

①今日学習したことを忘れずに、自分でいろいろ工夫して作ることができればいいなと思います。そして、誰が見てもわかりやすい新聞を作りたいです。

②新聞には、毎日たくさんの記事が出ているので、興味がなくても読んでみたいし、新聞を読んで、知らなかったことやおもしろいことを知ることができるので読んでみたいです。

③たくさんの「工夫ポイント」を聞いたのでしっかり使って、自分でも見やすい新聞を作りたいです。そのためには段落をつけることや文字数など細かい所にも気を付けたいです。

④今日の新聞記事の作り方についての説明を聞き、それらを参考にして新聞を作っていきたいと思いました。新聞を作ることはこれから必ず役に立つことだと思うので、今から頑張っていきたいです。

⑤もっといろいろな情報を集めて書かないといけないなと思いました。特に「なぜ」、「どのように」などが大切なので、文の構成も考えないといけないなと思いました。

⑥5W1Hを使って、伝えたいことと事実をはっきり伝えること。問題点と改善点を書くこと。問いと原因について、それは本当かどうかを考えること。がわかりました。

⑦これからは周りの人にしっかりアンケートを取ってから新聞を作ろうと思いました。新聞を見るときも5W1Hを意識して見て、図や写真などが使われているかもしっかり見たいと思いました。

⑧学校の課題などでレポートなどがあると思うので、そのときに今回学んだレイアウトのことや文章構成のことなどを活かしてよいものを作れるようになっていきたいです。

5 今年度の成果と今後の課題

(1) 成果

一部の教員が行っていたNIE活動を、学校全体で取り組む地盤ができた。

(2) 課題

学校の教育目標とNIE活動をリンクさせることが、NIE活動の充実と生徒の資質向上につながると思われる。

(生徒作成新聞 優秀作①)



(生徒作成新聞 優秀作②)



(生徒作成新聞 優秀作③)



探 Cue 時代を読み解く先に

～ 学びが紡ぐキャリアと地域 ～

兵庫県立神戸甲北高等学校

校長

樫 千種

教諭

久保 淳平

1 はじめに

本校は「自主 協調 創造」の理念のもと、確かな学力と主体的な課題解決能力、豊かな人間性を備え、グローバル社会で主体的・創造的に未来を切り拓き、活躍できる人材を育てることをミッションとして、教育活動を展開している。

2025 年度からは県立神戸北高等学校との発展的統合により、これまでの歴史と伝統を引き継ぎ、新たな歩みを始めている。

本稿では、NIE の実践指定を受け、生徒が主体となって生涯探究時代を生き抜く力を身に付け、自己のキャリアや地域課題などを考えるきっかけ（Cue）となることを目的として取り組んだ、2024 年度の実践を報告する。

2 活動・実践のきっかけ

本校が位置する神戸市北区は、急激な高齢化が進んでいる。「神戸市町丁別の統計 住民基本台帳に基づく人口（町丁目別 年齢別）」によると、2023 年 3 月末時点において、本校近隣の高齢化率は 29%～46%に及ぶ。

町丁名	高齢化率
大脇台	29%
惣山町	46%
若葉台	36%
甲栄台	41%
山田町小部	40%
泉台	42%

▲ 本校近隣の高齢化率(2023 年3月末時点)

こうした状況において、地域の未来を担う

若者が「まち」について考え、関心を持つことは、地域社会の持続可能性に直結すると考える。新聞記事を通じて社会の動向を知り、それを自身の未来や地域との関わりに結びつけることで、「課題を発見する力」「問いを立てる力」「他者と協働して思考を深める力」を育成し、キャリア形成・地域課題解決につなげる学びを設計することを目的とし、実践を進めた。

3 具体的な実践内容

以下に、具体的な実践内容を紹介する。授業においては「新聞を使うことが目的にならないこと」をテーマとして実践を進めた。

(1) 週刊探 Cue! の発行

朝学習の時間にオリジナルの新聞ワークシートを配布し、時事問題への関心を高めた。単なる記事の要約にとどまらず「この問題の背景には何があるのか」「私たちの生活とどう関係するのか」といった探究的な問いを設定し、思考を促した。この活動を通じて、生徒は新聞を通じた学びを習慣化し、社会の動向に主体的に関心を持つ力を育成した。

(2) 総合的な探究の時間における取組

①「問いづくり」を基盤とした探究活動

総合的な探究の時間「K-Standard」において、新聞記事を活用した「問いづくり」に取り組んだ。単なる記事の読み取りにとどまらず、「この報道の裏にはどのような背景があるのか」「この課題に対し、自分は何ができるのか」といった視点を重視した。これにより、生徒は社会課題を多角的に捉え、自らの探究テーマを発展させる力を養った。

② 記者派遣講演（三好アドバイザー）

新聞を通じた探究活動の深化に向け、2024年6月18日、神戸新聞 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーによる講演を実施した。



▲ 三好アドバイザー講演時の様子

新聞記事の書き方の工夫や、タイトルの付け方のポイントなど、実際に新聞を活用する方法についても具体的に学ぶことができ、講演後、生徒からは次のような声が上がった。

「記事を書くって、ただ事実を並べるだけでなく、読者が興味を持つように伝える工夫が大事なんだと分かった。質問の仕方一つで、取材の深さが変わるのも驚きだった」

「情報を集めるときに、ただネットで調べるだけでなく、自分で実際に話を聞きに行くことが大事なんだと感じた。

問いを持って取材をすることで、新しい発見が生まれるんだと思う」

取材の手法や記事作成のプロセス、プレゼンテーションの技法について学ぶことで、「問いを立てる→情報を収集する→表現する」という一連の探究サイクルを体験した。講演後、生徒たちはフィールドワークにおいて記者の視点も意識しながら情報を集め、探究活動に取り組んだ。

（3）社会的思考と表現力・創造力の育成

① 防災・主権者教育と新聞活用

公民科の学校設定科目「神戸の研究」におい

て、新聞を活用した防災・主権者教育を実施した。阪神・淡路大震災の新聞記事を教材とし、災害時の情報の伝え方や報道の影響について考察した。また、神戸市会との連携行事では、「震災の記憶をどう継承するか」「これからの防災教育のあり方」などについて生徒が神戸市会へ提案し、市会議員と意見を交わした。新聞を通じて過去の出来事を学び、社会との接続を実感する機会を設け、現代社会に応用する力を育成することができた。



▲ 神戸市会との連携行事の様子

② 記事を通じた主体的な思考の育成

1年次では「推し記事コンクール」を実施し、各自が最も関心を持った記事を選び、その理由を言語化・発表することで、「選ぶ→考える→伝える」のプロセスを訓練した。生徒同士のフィードバックを通じて、視点の多様性を学ぶ機会とした。



▲ 自分の推し記事を探す生徒の様子

2年次では神戸新聞「正平調」や各社新聞による時事問題ワークを BYOD 端末にて実施し、文章構成の理解・論理的思考の強化を図った。キーワード抽出や要点整理を通じて、情報を

的確に捉え、再構築する力を鍛えた。

3年次では朝日新聞「天声人語」、毎日新聞「余禄」を題材に、タイトル付けや要約トレーニングをBYOD端末にて実施。情報の本質を短く表現する力を養い、小論文指導とも連携して発信力を強化した。

③ 対話型学習による思考の深化

「新聞感想文コンクール」や「いっしょに読もう！新聞コンクール」を実施し、「記事の核心は何か」「異なる視点からどう捉えられるか」について互いに意見を交わした。これにより、新聞を単なる情報収集ツールではなく、社会課題を考え、対話を生み出す教材として活用する意識を醸成した。1年次「産業社会と人間」では、「アンコンシャスバイアスからの解放」と題し、無意識の偏見に気づき、克服することを目的とした授業を、新聞を活用して実施。白黒写真のみを提示し、その背景や状況を自由に想像させた後、新聞記事の内容と照らし合わせることで、生徒が持つ先入観を顕在化させた。情報の受け取り方や、社会の中に潜むバイアスについて対話的に深く考察する機会を提供することができた。外国人特別枠選抜生徒には、新聞記事の要約・発表を通じた日本語学習を実施。自国と日本の報道の違いを比較し、異文化理解を深めるとともに、新聞を用いた学びが、単なる言語習得を超え、グローバルな視点を育む契機となった。

④ 創造力を養う新聞活用の展開

新聞を読みものとしてではなく、創造的な活動にも活用した。総合的な探究の時間「K-Standard」で子ども学ゼミに所属する生徒たちは、幼児向けの遊び道具として新聞を活用した。古新聞を使った輪投げやおもちゃ作りを考案し、神戸親和大学キッズオープンキャンパスで展示・ワークショップを開催するなど、新聞を使った知育活動の実践を行い、新聞が持つ表現の可能性を探究する場を設けた。

文化祭においては、新聞を使ったアート作品を制作し、新聞ならではの質感や色合いを

活かし、単なる廃材ではなく創造的な素材として新聞を活用する視点を育てた。

4 2024年度の成果と課題

(1) 2024年度の具体的な成果

本校では、2024年度のNIE活動を評価するために、1・2年次生徒(387名)を対象にアンケートを実施した。その結果、以下のような成果が確認された。

① 新聞への抵抗感の低下

「新聞を読むことに抵抗がある」と回答した生徒は年度当初29.7%(115名)だったが、取組後には13.9%(54名)まで減少した。

特に「押し記事コンクール」や「いっしょに読もう！新聞コンクール」などの対話型の活動によって、新聞を「難しいもの」ではなく「興味を持てるもの」として捉え直す機会となったと考えている。

② 思考力・表現力の向上

「新聞記事を読んで、自分の意見をまとめることができるようになった」と回答した生徒は67.2%(260名)にのぼり、年度当初の48.5%(188名)から大幅な向上が見られた。

「時事問題に対する理解が深まった」と感じた生徒も74.4%(288名)となり、新聞を情報収集の手段として活用できるようになったことが示唆された。

また、週刊探Cue!を通じて「読む力」が向上したと感じた生徒は71.8%(278名)であり、新聞を継続的に読むことにより読解力の向上に寄与していることが確認できた。

③ 新聞を活用した対話力の向上

「新聞記事をもとに他者と意見を交わす機会が増えた」と回答した生徒は58.9%(228名)で、特に「賛否を問うワークシート」や「新聞感想文コンクール」などの活動が有効であったことが分かった。

さらに、「同じ出来事であっても表現が違うこと」を意識した生徒は75.7%(293名)であり、情報の多角的な捉え方やメディアリテラ

シーの向上にも繋がっていることが確認できた。

④ 新聞と地域・学校との結びつきの強化

「自分の学校や地域の記事が掲載されると、新聞を読んでみようと思う」と回答した生徒は 82.4% (319 名) に達し、スクールアイデンティティや地域への愛着の醸成にも繋がった。

(2) 今後の課題

2024 年度の NIE 実践を通じて一定の成果が得られた一方で、新聞をより主体的・継続的に活用するための課題も浮き彫りとなった。メディア環境の変化や生徒の情報行動、家庭との連携といった視点を考慮しながら、より発展的な NIE 実践を推進していく必要がある。

① 他のメディアとのすみわけ

近年、生徒の情報収集手段は多様化しており、SNS やニュースアプリなどを主要な情報源とする傾向が顕著である。

アンケートでは、「ニュースを知る手段として新聞を活用する機会が増えた」と答えた生徒は 5.4% (21 名) にとどまり、多くの生徒が新聞よりもデジタルメディアを選択している現状がある。

新聞ならではの「情報の精査」「論理的な文章構成」「多角的な視点の提示」という強みを生徒に伝え、デジタルメディアとの違いを明確に意識させることが必要である。新聞とデジタルメディアの長所を組み合わせた「ハイブリッド NIE」の概念を提唱していくことを目標としたい。

② 主体的な新聞活用の促進

授業を通じた新聞活用には一定の成果が見られたが、「授業以外で新聞を読む機会が増えた」と回答した生徒は 5.9% (23 名) にとどまった。これは、新聞があくまで「学校の課題」として消費され、自発的な学習ツールへと転化されていないことを意味しているといえる。

新聞記事を題材としたミニ探究プロジェクトや、「新聞記者体験プログラム」の実施、新

聞記事を活用した模擬国連・模擬裁判型授業を検討し、「探究型学習」とより組み合わせることで、さらなる主体的な学びへと昇華させるアプローチを検討していく必要がある。

③ 家庭での新聞活用の課題

「家庭で新聞を読む習慣がある」と回答した生徒は 2.3% (9 名) にとどまり、学校での取組を家庭に広げる方法が課題である。

「新聞を家庭でも活用できる工夫」について考え、家庭内で親子揃って新聞を読む機会を促進するための仕組づくりが求められる。

5 おわりに

本稿では、本校の NIE 実践について、具体的な取組とその成果・課題を報告した。新聞を活用した学習活動を通じて、生徒の思考力・表現力・対話力が向上し、社会との接点を見出す機会が増えたことが確認された。

本校における NIE 実践の特徴は、新聞を単なる情報収集の手段ではなく「探究の起点」として活用した点にある。生徒は新聞記事を通じて社会の課題を読み解き、問いを立て、思考を深め、他者と対話しながら自らの考えを発信する力を養った。これにより、新聞の役割が「社会を知るためのメディア」から「社会と対話し、自ら関わるためのメディア」へと変化したことは、本実践の大きな成果の一つである。

本実践を支えてくださった新聞社、地域の皆様、保護者の皆様に深く感謝申し上げたい。特に、新聞社のご協力により、教育活動に活用できる新聞記事の提供や、取材の機会を得られたことは、生徒たちにとって貴重な学びとなった。また、新聞を活用した教育の意義を理解し、主体的に取り組んだ生徒たちにも、心から敬意を表したい。

今後も、新聞を通じた学びの可能性を広げ、生徒一人ひとりが「探究時代」を生き抜く力を育みながら、学びを地域社会や自らのキャリアへとつなげていく環境を構築していく。

思考力・考え方の選択肢を増やすための NIE 実践

兵庫県立網干高等学校(全日制)

校長 岩田 一雄

教諭 佐々木 浩二

1 はじめに

本校は全日制普通科の高校であり、12クラス、約470名の生徒が学んでいる。県内唯一の通信制課程と全日制課程を併設する高校である。

スクール・ミッション「創造・友愛・清浄」の理念のもと、地域の課題と文化を積極的に学び、主体的に活動する力を備え、グローバルな視野に立ち、地域社会の発展に貢献できる人材を育成することを目指している。

総合的な探究の時間では、地域の課題を掘り起こし、生徒の主体性を育成する探究活動を通じて、主体的に地域の課題解決に取り組む生徒を育成している。国際文化交流類型の生徒や総合的な探究の時間で、地元小学生との交流授業も行っている。

2025年度より、姫路南、家島と発展的統合により「姫路海稜高等学校」が姫路南高校の校地に開校する。

2 本校の NIE 実践で設定したゴール(目標)

長年 NIE 実践を継続していて考えていることは、人間は多種多様な「情報」に触れながら生き、その時々で多くの判断・決断をしている。

「情報」とは何か。普段、あまり意識していないが、水や空気と同様、欠かせないものである。人間は「情報」がなくては生きていけないと私は考えている。それほど基本的なものになっており、その大切さに気付くかどうかで、生き方も違ってくると考える。

最近では、急速に進む生成 AI 技術やメディアの報道の在り方、フェイクニュースに関する報道において、人間の判断力や決断力が大いに問われることが多くなってきており、情報社会の落とし穴も目立っている。

生徒は、いつでもどこでもさまざまな情報

にアクセスでき、お金をかけずに世界中の人々とやり取りできる。生徒が使っているスマホの中に「最新の情報」があり、「未来」がある。しかし、ネットを駆使して情報を得て、読解し、分析し、自己の進路や人生に活かせるようになるためには、思考力や判断力、決断力、リテラシー技術が必要になり、経験の積み重ねが必要になっている。

高校の段階では、アナログ式の新聞記事を丁寧に時間を掛けて読解し、複数のメディア・複数の新聞を比較し、併読することで、多様なメディアの長所・短所を知りながら、自分に適した技術を身につける必要があると考える。

今年度、NIE 実践で設定したゴールは以下の通りである。十分にできた目標もあれば、まだ不十分な目標もある。

- ①読解力・情報収集力・思考力・勉強法・図書館活用術の育成
- ②統計データ分析能力の育成(経済・金融・経営などの分野で数字の変化から世界の動向を理解)
- ③地域課題に目を向け、地域貢献できる活動を経験(行動力・実践力の育成)
- ④課題解決能力と価値創造能力の育成
- ⑤仕事観・職業観の育成(進路指導に関連させた実践)
- ⑥生涯学習の推進(人生100年時代への対応、時代の変化に対応できる生き方の模索)

3 NIE「基本の型・基本軸」について

姫路～兵庫～日本～世界へ「拡大する思考」
過去～現在～未来の「時間軸を行き来する思考」

4 本校のNIE実践（1年目の取り組み）

①「公共」「地理総合」「地理探究」「政経」

授業実践（情報弱者にならないための取り組み、防災学習）『公共通信』『地理通信』で教師による情報発信の取り組み

「思考力・読解力」・・・比較する力・視点を増やす力（違いを見つける力）

「情報収集能力」・・・多様なメディアを活用してアナログ、デジタルのメリット・デメリットを知り活用できる力

②「総合的な探究の時間」

「防災と都市」をテーマにした授業実践、主体性や行動力の育成

図1 夏季休業中の総探、自主研究（姫路防災センターと耐震・免震・制震構造見学）



図2 総探「工場見学（日触）と防災ツーリズム（津波避難施設見学）」



図3 総合探究「網干消防署での救急救命実習」（就職・進学指導にも連携）



③ノート指導（A4版）・勉強法の指導実践

言語化・文字化・視覚化・見える化することで思考を整理、視覚化し思考力・判断力を養成。

④進路指導の取り組み（教師のコーチングスキルの向上による生徒の思い込みの打破）

⑤読書術の向上・図書館の利用法・情報収集法

図書館利用の向上と読解力（スキルアップ）の取り組み（若手教員へのアプローチと生徒へのアプローチ・春・夏・冬課題の設定）

⑥人権LHR、教員向け人権研修会の企画

1年生は「SNS・ネット・情報モラル」、2年生は沖縄修学旅行に関連した「戦争と平和」に関連した人権学習。教員向け校内人権研修会では、テーマ「先生の不適切発言を防ぐには（朝日新聞 2023 年 10 月 9 日付 「子どもを追い詰める毒語」 養護学校主任教諭 川上康則氏の新聞記事を活用し、生徒と教員の人権意識の向上を図る。

⑦第15回ひょうご新聞感想文コンクール応募

2学年4クラス応募、「審査委員特別賞」

1名受賞 応募テーマ 神戸新聞 2024 年 8 月 12 日付「四間隊の記憶 姫路で編成、154 人が非業の戦死」

*「新聞はセレンディピティ（偶然性）にあふれたメディアであり、新聞は、偶然の出会いによる気づきの「演出」をしてくれる。

⑧姫路市議会と姫路市内の高校との意見交換会

総合探究 防災班2名参加（テーマ「防災と公園活用」）テーマ別に分かれ、議員8名と高校生8名で意見交換を行う。

図4 総合探究 防災班代表2名での発表



⑨網干西小学校（NIE 実践指定校 2 年目）との
小高連携交流授業

2025 年 2 月 12 日に実施。総合探究「防災班」の高校 2 年生 16 名、小学生 5 年生 57 名参加）
…神戸新聞記事参照



図 5 網干西小学校との
交流授業（小学生のポスターによる発表と
高校生によるスライドでの発表、網干西小学校の教員による振り返り



⑩進路意識の向上のため 2 年生「進路通信」発信

⑪子ども食堂でのボランティア活動の取り組み

子ども食堂の「2024 年 12 月 26 日付読売新聞「子ども食堂 地域を結ぶ」の新聞記事を読んだ生徒がボランティアに参加累計 30 名、2 月の総合探究の成果発表会で実践発表する。

⑫主権者教育の取り組み

姫路市選挙管理委員会と姫路税務署との連携、生徒 7 名による政権公約『生物の魅力』の決定と弁論、模擬投票実施、事前学習として「兵庫県知事選挙」に関する新聞記事で選挙とメディアについて学ぶ。

図 6 弁論の様子



⑬公民館での無料読解力講座の取り組み

前任校（姫路東高校）の時、PTA 活動の一環で、毎週土曜日、2 時間程度、約 3 年間実施、姫路市広峰公民館で、小中・高校生対象の NIE 実践を実施公民館での学びが、きっかけとなり、自宅でも自学・自習の習慣を身に付けて、社会や地域のこと、日本や世界のことを深く知りたいと思う子ども達に育ってほしいと願って実践。



図 7 「公民館講座 2018 年 1 月」の様子

5 今年度の成果と次年度への課題

①教科指導による実践成果・課題

生徒は、様々な教科を学習して、知識量も増えてきているが、勉強法・考え方・読解力・思考力の選択肢はまだ少ないことを痛感した1年であった。勉強法・考え方・読解力・思考力の選択肢を増やすためには「技術」習得のための「経験」を積む「時間」が必要になる。

例えば「地理」の授業では、「雨（降水量）」の話が出てくる。「雨」に対して、生徒に最初「どう考えるか？」と問うと自転車通学する生徒だったら「カップ」を着ないと通学できない、「嫌な雨（マイナス思考）」と考えるが、農業をしている人なら、「恵みの雨（プラス思考）」で農作業がはかどる。乾燥気候の人なら「待ちに待った雨」と考える。また防災を担当する別の立場の人なら「もし大雨だったら…(if 思考)」、災害につながると考え、災害に対する備えをしなければいけない。老子の思想を学んでいたら、「水の思考」上流から下流へと流れ、どんなすき間も通り、氷にも蒸気にも変化する。時には岩も砕く強くて柔軟な思考を得られる。考え方・思考法の選択肢が増えると様々な出来事に対し「深く考える」ことができる。

また、地理では、地図を読み取る技術、地形を読み取る技術、統計グラフを読み取る技術が必要になる。デジタルマップの普及で紙媒体の地図帳の使い方の経験が浅い生徒、地図を読み取る読図の技術が不足している生徒がいる。新聞記事の活用と地図の活用には共通点があり気付きの多い年になった。

②総合的な探究の時間での実践成果・課題

「阪神・淡路大震災 30 年」の年に防災という分野を生徒と共に探究出来た経験は、防災教育の在り方に気付くことができた。

私が感じた防災教育の肝（要）は、①震災を風化させない、伝承、次世代への継承の問題②被災者支援の在り方③災害弱者支援（女性・子供・高齢者・障がい者）への支援の在り方④デマの拡散などの情報の錯綜に対する対策や

情報弱者やメディアと関係性⑤災害関連死を減らす取り組み⑥性被害者の報道の在り方⑦次世代の育成など阪神淡路大震災 30 年という節目にあたり、今後 NIE 実践が取り組むべきテーマや課題が見えてきたと考える。

具体的には教員への研修・小中高との連携活動を通じて NIE 実践の深化、NIE 実践の3年間の計画をカリキュラムに落とし込み、カリキュラムマネジメントできる管理職・教科リーダーが必要である。

学校・教育機関だけでなく民間企業・民間組織との連携をコーディネートできる教科リーダーの育成も大切である。

また、「新聞」に限定しない、多様な「情報メディア」を活用した教科指導力を上げ、新聞にこだわりすぎない「バランス」をとることで、生徒への「説得力」を上げると考える。各メディアの「長所・短所」を補い合うことで、アナログとデジタルの両方を指導できるハイブリット型学習指導を勧める。

③多様な生徒との出会いで気付いた NIE 実践

生活習慣の違い（癖）に目を向けないといけないと考える。生活習慣＝癖を直す・強制する課題を出し授業を行う必要がある。

「思い込み・固定観念・バイアス・無興味・無関心・無気力・無感動・マイナス思考」などの生徒、読み書きが苦手 覚えるのが苦手、発表するのが苦手、メモやノートを取るのが苦手など生徒それぞれが抱えている苦手意識や技術不足を補う学習指導や進路指導の「カウンセリングスキル」だけでなく、「コーチングスキル」を応用して、生徒の意識を変えていく取り組みが、私を含めて多くの教員に不足していることを痛感した1年であった。

6 今後育成したい生徒像

生き方・考え方・思考法を変化させる「きっかけ（出会い）」を NIE 実践で演出し、挑戦する生徒。決断・行動できる生徒を育てたい。

授業と実生活をつなぐ NIE

兵庫県立山崎高等学校 校長 塚本 師仁
司書教諭 赤木 富美子

1 はじめに

本校は、森林面積が90%を占める宍粟市で、最も多く生徒数を抱える地域の中心校として発展してきた。県下唯一の「森と食科」を有し、地域とつながる創造的な学びに力を入れる。また、学校近くには活断層の山崎断層帯があり、生徒会を中心に防災活動もさかんである。

近年、入学生徒の多様化により学習意欲にかなりの個人差があり、読む力が不足していること、また実生活につながらない学習態度を痛感する。そこで司書教諭の立場から、図書館の資源である新聞をもっと生徒の身近なものにし、時事問題を通して意欲的に読む環境を整えるため、実践指定校に応募した。

図書館から始まったNIEの取り組みであるが、各教科の先生方による授業実践もあり、新聞で授業と実生活をつなぐことで、生徒の意欲を引き出せると手ごたえを感じている。



(2) 図書館活動

① 新聞配置

各学年廊下に新聞1紙を配置し、毎朝図書委員による交換を行っている。



② 記事のストック

館内のカゴに10分野に分けた記事を置き、探究や小論文の学習素材として利用を促した。



山崎高校公式キャラクター



2 実践内容

(1) 記者派遣事業

1年生 総合的な探究の時間

【目的】地域探究に向けて、課題の見つけ方を学び、情報の収集に活かせるインタビュー術を知る。

【講師】神戸新聞社 村上晃宏記者

【内容】「宍粟市の課題とインタビュー術」

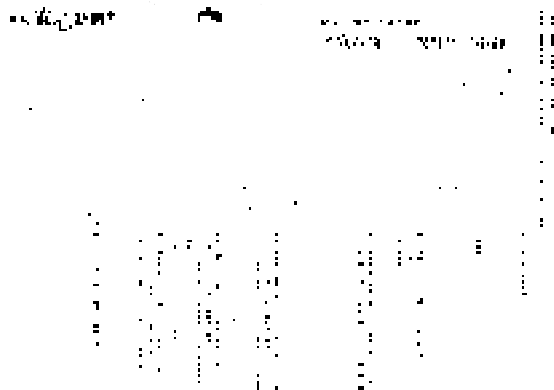
宍粟市に関する記事をもとに、地域の現状や課題、地域おこしの活動などを紹介。地域の探究活動において、人に話を聞くときの話題の膨らませ方・態度などを学んだ。宍粟市が消滅する可能性を初めて知り、驚いていた生徒もいた。

(3) 各教科の取り組み（斜体は記事名）

① 国語

・ 1年 現代の国語（森と食科は言語文化）

素材に新聞記事を用いたプリントを作成し、読解・書写・要約・感想・作文など、書くことの強化に努めている。定期考査では、教科書と新聞記事に関連付けた新傾向問題を出題した。



↑教科書と関連付けたプリント。特殊詐欺に対する人々の態度を、確率的思考が苦手な人間の例として考えさせている。

・ 2年学校設定科目 読書と表現

他の人に教えた新聞記事について要約と意見文を書き、記事と共にポスターを作製・掲示した。「推し記事コンクール」にも応募した。

② 数学

・ 2年理系 数学Ⅱ

巨大地震 注意情報の根拠とは？

・ 3年学校設定科目 数学探究

機内の「乗客に医師」確率は？

ともに「身近な題材の中で数学を活用する」「文章を読み解く力をつける」ことを目的とし、実際の出来事を数学で読み解くおもしろさから、生徒の意欲的な活動を促すことができた。

③ 公民

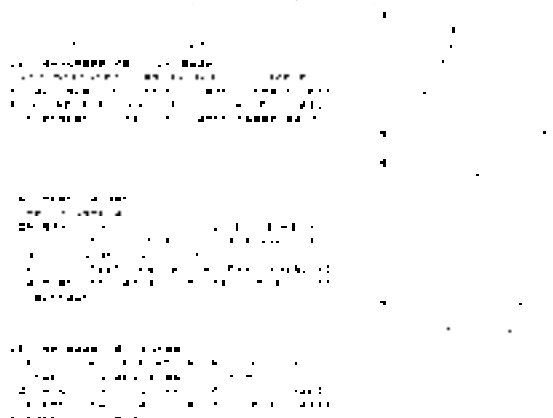
・ 1年 公共

袴田事件 再審無罪

授業内で概要を説明した後、2学期中間考査にて試験問題を作成した。3つの記事を会

話の中に組み込み、読み比べたうえで、死刑制度について意見論述をさせた。

最初は賛成が多数派だったが、記事を用いたことで賛成・反対両者の意見を踏まえて自分の考えを書くことができた。



↑四角で囲んだ「死刑」に関わる3つの記事を生徒が紹介しながら議論する会話文。

④ 英語

・ 2年学校設定科目 英語探究Ⅰ

新聞記事を素材とした教材を作成し、「英語で読む力をつける」「時事問題を知り、その諸問題を考える」ことを目的に授業を展開した。英語を手段として新聞記事を読み、社会問題を自分事として考えるきっかけにもなっており、生徒が達成感を感じられる授業ができた。

⑤ 家庭

・ 3年 フードデザイン

1学期 *週1回朝食抜きの子13%*

2学期 *熱中症予防1日3食必要*

1学期教材→

「食を取り巻く現状を知ることによって自分の生活を見直すきっかけにする」ことを目的に、最終的には夏休み課題としてバランスの取れた朝食を作ることを課した。



(4) 総合的な探究の時間(総探)での取り組み

本校の探究カリキュラムは各学年裁量であり、生徒の現状に合った探究活動のあり方をいまだ模索中である。そのような状況の中で、この春卒業した 77 回生は新聞に慣れ親しんだ学年であり、この度 NIE 実践指定校となったことをきっかけに、3 年次の総探でも新聞を活用した実践を積み重ねた。折しも注目を集めた選挙が行われた年となり、主権者教育に重点を置く活動ができた。

総合的な探究の時間 (77 回生普通科)

目標

- ・社会にある問題に気づき、さまざまな立場について想像力を働かせ、批判的な目で物事を見ることができる。
- ・培った力でよりよい社会の実現のために主権を行使する。

基本の活動

- ・各回テーマを変え様々な記事を読む。
- ・ワークシートに自分の意見を書く。
- ・班で意見を共有し、議論を行う。
- ・議論した上での気づきや考えの変化について記述する。

夏休み課題

興味のある記事を選び、新聞感想文を書く。

→「ひょうご新聞感想文コンクール」参加。

新聞紹介バトル

ビブリオバトルの方法に則って、新聞感想文で選んだ記事を他者に紹介した。最もよかった発表者を班のチャンプとし、各教室内で決勝を行った。メンバーをシャッフルし、普段話さない生徒と班になり発表しあったことで緊張感もあり、さまざまな新聞記事を知ることができて刺激を受けたという感想を得た。

兵庫県知事選挙から学ぶ

①事前学習

1 学期に「どう思いますか 政治に興味持てません」という若者の投書記事で議論し、政治参加についての各自の現状を共有していた。

②県知事選についてのアンケート実施

(投票日翌日 11/18(月) 実施 一部抜粋)

- ・知事選に関心はありましたか。
(あった 70% なかった 30%)
- ・斎藤知事が県議会で全会一致の不信任決議を受け失職することになったとき、次の知事選で斎藤氏が当選すると思っていましたか。その理由も記述。
(思っていた 31% 思っていなかった 69%)
- ・ここ数日で随分と世論が変わったようです。今回の選挙結果を見て、分かったこと・感じたことを自由に書きなさい。
→斎藤氏を擁護し称賛する者、SNS の潮流に気味の悪さを感じている者、さまざまな立場があった。
- ・今回の選挙の結果からこれからの自分の行動について当てはまるものを選びなさい。
(選挙に行く 80% 選挙に行かない 20%)

③11/20(水) 総探の時間にて意見共有

アンケート結果を共有の上、班で議論した。また「稲村和美氏 SNS アカウント凍結」の記事を読んだ。

【授業後の生徒の感想】

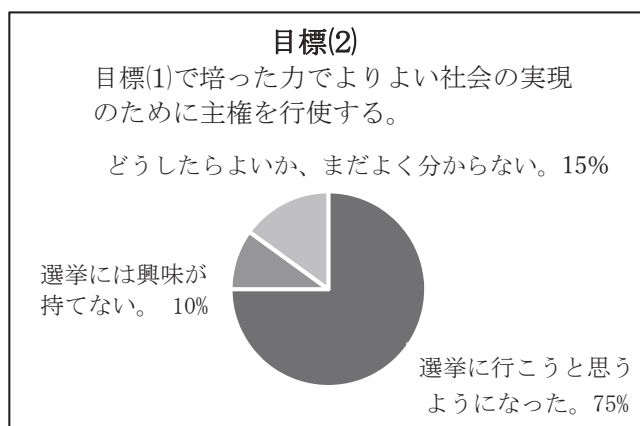
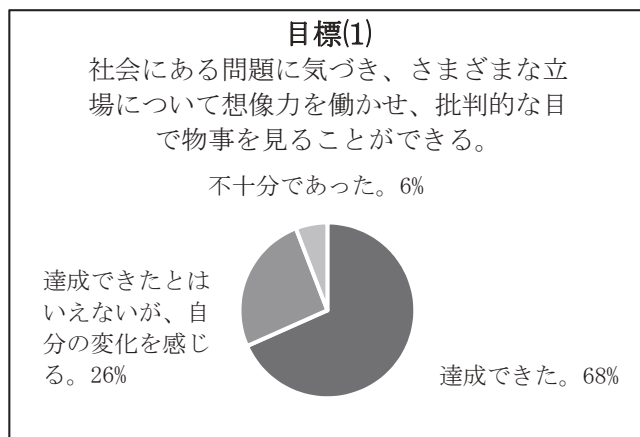
- ・今回の選挙は SNS の影響が本当に大きかった。流されてはいけないと思いつつも、いざ自分が少数派に立った時、不安でつい多数派に行ってしまうと思う。投票には行ったが、もっと、世の中のことを知る必要があると感じた。
- ・今回の選挙では SNS が悪用されてしまったり、デマが流れたりしたので、SNS からの情報は、自分で真偽を判断しなければならないと思いました。斎藤知事が実際に何をして、何をしなかったのか分からないので、そこが難しい問題だと思いました。

【所感】

選挙後すぐのタイミングで、アンケート結果という形で生徒の実感を共有できたため、

クラスメイトの意識の高さにびっくりした生徒の姿もあった。また様々な立場の生徒が混ざり合うことで、「いかに自分が凝り固まっていたか分かった」という感想も見られ、SNSで得る情報に対して、冷静さが必要であると学んだ者が多かった。

目標達成率



(3学期に実施したNIEアンケート結果より)

【所感】

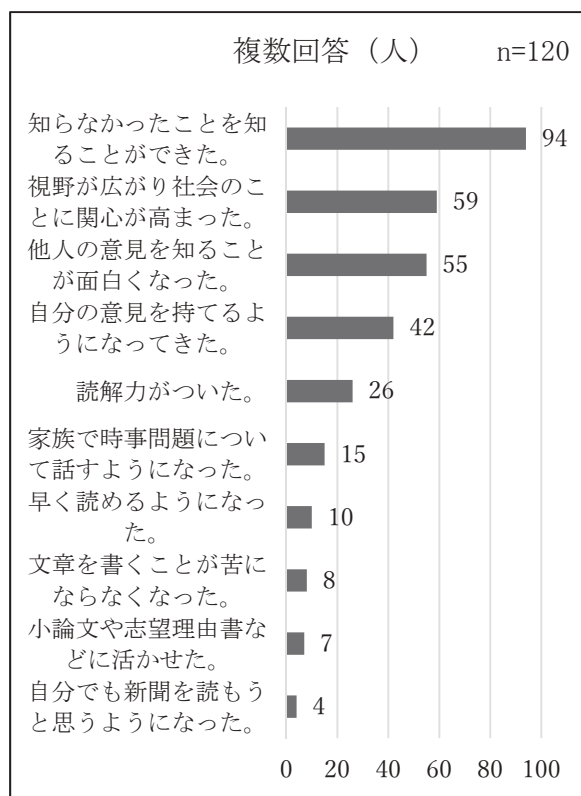
結果はあくまで生徒の実感であり、教師の感じ方はもっとシビアである。「教員が批判的な視点を与えると、今度はそれにとらわれてしまい、結局生徒自身の視点を鍛えることにはつなげられなかった」という担任の反省もある。また、主権行使への意欲を高めるには、タイミングとその選挙の話題性が非常に重要であり、通常の選挙ではここまで生徒の関心は高まらなかったと思う。

(5) NIEの取り組み 77回生総括

3年間継続して新聞に接してきた 77回生

の振り返りアンケートより、一部を紹介する。

【新聞記事を読んできてよかったこと、変化】



【生徒の感想】

・新聞を読んでいなかったら今の日本の問題点や政治について知らなかったことが多かったと思います。新聞を読むことで、集中力も上がったと感じるし何かを知ろうとする力も身についたと思います。

・自分では思いつかないような考えを持っている人がいて、色々な話題に対して様々な意見が聞けたので、自分も視野を広げることができたとし、共感も否定的な意見も自分の中から出てきたので良かったと思う。そして自分の考えを人に伝えるいい機会にもなった。

【所感】

そもそもは国語科で読み書きする力を養うために課していた新聞読解であるが、3年次での様々な時事問題への思いを共有する時間を通し、生徒は人の多様性を知り、自分自身が揺さぶられる体験をしたようだ。今後も生徒が自分自身に向き合い、考えを深め、思いを言葉にする機会を作り、自分の人生をよりよいものにするための行動を促していきたい。

地域デザイン類型と NIE 活動の取り組み

兵庫県立播磨南高等学校 校長 黒岩 寛
臨時講師 矢野 聖人

1 はじめに

本校は、1984 年 4 月、加印地区第 9 番目の全日制普通科高校として設立された。その開校にあたっては、設立の 5 年前から播磨町に県立高校を設立して欲しいという地域住民の熱い思いの上に設立され、2024 年で 41 年目を迎えた。

開校当初はひと学年 8 学級でスタートし、現在は 4 学級まで減少したが、素直で元気な学校風土は引き継がれている。過去には、英語コース、グローバル情報コミュニケーションコース、芸術類型、芸術保育類型へと改編され、現在は地域デザイン類型がある。地域デザイン類型では、播磨町と連携協定を結び、播磨町役場の全面的支援を受けて、生徒たちが地域を学び、地域課題を考え、課題解決に取り組む探究活動を行っている。また播磨町での様々なイベントに参加するボランティア活動は、地域の皆さまから感謝の意をいただけるだけでなく、普段の学校生活とは違う生徒の表情が見られ様々な可能性を創造させられる。地域探究活動とボランティア活動は、本校の特色ある教育活動である。



2 地域デザイン類型に NIE を活用

地域デザイン類型は 2022 年度に設置され、2024 年度で全学年が新類型に移行した。学校設定科目「HariMAP I」・「HariMAP II」・「プレゼンテーション演習」を通して、地域の課題を考え、調べて、解決に向けた提案をする探究活動を行っている。この活動には、播磨町や兵庫大学の全面的な支援があり、播磨町役場、議会、兵庫大学の教授、その他関係機関の皆さんと協働した取り組みを行っている。

今年度から、地域デザイン類型専用の教室を整備し、日常的に調べ学習や発表の練習ができる環境を整えた。



探究活動を通して、生徒一人一人が主体的に学びに向かう力、チームで協働して活動する力、地域の多様な方々との連携に必要なコミュニケーション力を育成することで、進学・就職の進路実現を目指している。学校設定科目のほか、「総合的な探究の時間」を活用して、1 年生では調査の手順や発表方法など、調査研究の基礎になる知識・技能を学ぶ。2 年生では各自で課題を設定し、実際にフィールドワークを行いながら探究活動を行う。3 年生では調査研究の成果をまとめる活動を行っている。

地域デザイン類型の 1 期生である、39 回生が

2年生の時に授業を開始したが、担当者の手探りの中、様々な課題が見えてきた。

本校生徒の特徴として、思っていることややりたいことを胸に秘めているが、自ら表現することが不得意で、教員が深く対話しないと出てこない生徒が多くいる。これは、高校卒業後の進路についても同じである。小中学校での成功体験が乏しく、自分は何もできないと思って入学してくる生徒が多い。その結果、探究活動で課題設定をする際に、どうしてもやり切る自信がなくなかなか課題設定ができない現状がある。

また、近年 SNS の普及により、目にする情報は自分にとって興味・関心のあるものに偏り、社会で何が起こっているのかを知らない生徒が多くいる。特に、本校の生徒については「周りのことを考える余裕のない生徒が多いため、社会のニュースには無関心になる傾向がある。



このような現状から、NIEを活用して、高校生が地域の課題を解決したニュースや、取り組みを調べさせ、同じ年代の高校生が活躍していることを知り、「自分たちでもできる」ということを理解してもらう必要があると考えた。また、新聞を広げて記事を読むことにより、普段目にしないニュースに触れさせ、興味・関心の幅を広げる必要があると感じた。インターネットでの情報収集は非常に簡単で、大量の情報を取得することができる一方、調べる検索キーワードによっては情報が偏る為、その問題をクリアするためには、新聞記事というメディアは万能であると考えた。地域デザイン類型の教室に新聞を設置し、いつでも、だれでも自分の好きなタ

イミングで新聞が閲覧できるように配置している。



3 実践の内容

(1) 通常授業での活用

・2024年4月～6月中旬

年度当初から2か月半程度は、授業内で新聞を活用する時間を設け、「今、社会で何が起こっているのか」、「地域のニュースで最近何があったのか」、「高校生が活躍した記事はないか」と、じっくり調べて考える力を養った。

(生徒の感想)

- ・知らないことばかりだった。
- ・新聞には、非常に多くの情報が載っていてびっくりした。
- ・思っていた以上に、地域のニュースがたくさん載っていたので、気になった。

(2) 兵庫大学・松本教授による講義

・2024年より毎月1回程度

本校では、2018年9月より、兵庫大学との連携協定を結び、様々な取り組みを行っている。この地域デザイン類型の授業には、月に1回程度現代ビジネス学部長の松本茂樹教授による講義を受け、アドバイスをいただいている。専門は地域創生 SDGs で地域ビジネス、地域の活性化等様々な活動に取り組まれている。松本教授からも、新聞記事の探し方や活用の仕方について、アドバイスをいただいた。

(生徒の感想)

- ・新聞を隅々まで読むことは、たいへんだと思

っていたが、新聞の見出しを中心に全体を見
ることから始め、目に留まったものから読む
手法を教わり、興味のある記事をしっかり読
み込むことができるようになった。



(3) 記者派遣

・2024年11月29日(金)13:20～14:10



地域デザイン類型の生徒26名が毎日新聞記
者の入江直樹様の講義を受講した。見出しの付
け方・取材の仕方・メディアリテラシーについ
て講義をいただいた。受講者は今年度のポスタ
ーセッションへ向けての見出しの付け方、次年
度以降、フィールドワークでの取材する力を身
に着ける、絶好の機会となった。

(生徒の感想)

- ・見出しはたくさんの役割があり、読者に一
目で内容が伝わるようにすることがすごく重
要だとわかりました。
- ・記事は、見出しで読者の「見たい!」が決ま
ると思った。5W1Hが使われ、その中でも2つに
絞り見出しを書くことでわかりやすくなると
感じた。
- ・大量の記事から、興味あるものを選びやす

することも、見出しが重要な役割を果たして
いることがわかった。



(4) 播磨町議会議員への提言会

・2025年1月17日(金)13:20～14:10

年に1回、播磨町議会の議員13名にご協力い
ただき、生徒が播磨町の課題を研究した結果を
提言として聞いていただいている。提言を聞いて
いただくと同時に、自分たちでできそうなこ
とも併せて話し合い、意見交換を行った。



(生徒の感想)

- ・自分たちの調べたことを聞いていただいて、
共感してもらえた部分もあってうれしかった。
- ・行政で行うことはなかなか難しいと言われた。
行政で無理なら、企業等に協力を依頼する手
段があるというアドバイスもらった。
- ・現在、播磨町で取り組んでいる、より詳しい内
容を教えてもらった。今後の研究に役立てて
いきたい。

(5) 地域デザイン類型発表会

・2025年2月7日(金)13:20～14:10

1年間、各グループで研究してきた成果を発

表する機会として、ポスターセッションによる発表会を行った。新聞記事から集めて、学習した内容から、自分たちの意見を踏まえながら、1枚のポスターに仕上げて発表した。聴取者としては、保護者、播磨町役場、播磨町議会、兵庫大学、近隣中学校の教員、第1学年の生徒と、多くの方に聞いていただいた。



(発表テーマ一覧)

播磨町におけるごみのポイ捨て問題
播磨町をアニメの聖地化しよう！
播南新聞
播磨町の子育て支援を活性化させるには
播磨町に宿泊体験施設を
創り出そう 青春の思い出
SDGs カンパニー
播磨町 PicMap を作ろう
播磨町でチャレンジショップ
播磨町にある文化施設を活性化させるには
小学生でも見やすい播磨町のホームページをつくる

(生徒の感想)

- ・はじめは緊張して、うまく話せなかったが回を重ねるごとに少し慣れていき、最後はうまく話せた。
- ・1年生の生徒に、新たな意見を提案されて、来年その意見も入れてみようと思った。
- ・面白いことを考えている班があって、ぜひ実現してほしいと思った。(参加した1年生)
- ・播磨町のことを考えてくれるのは本当にうれしく思うが、町外在住の生徒が多いので東播磨などももう少し広げた方が考えやすい問題も

あるのではないかと感じた。いずれにしても若者の考えを聞けて参考になった。(外部からの参加者)



4 成果と今後の課題

今年度実施した結果、こちらが考えていた課題は解決できた。生徒は、自分たちもやればできると実感し、興味・関心の幅を広げ、課題設定をしながら調査・研究、発表まで進めることができた。これはNIE活動の成果であると考え。この結果を振り返り、次年度はいよいよ考えてきた課題解決のアイデアを実行に移すこととなるので、さらなる成果が出るようサポートしていきたい。

今後の課題として、今回NIE活動に取り組んだ2年生は進級し、また次の学年が授業を開始する。今年度と同じように、NIEの活動を通じて、生徒一人一人が主体的に学びに向かう力を育て、自らが課題設定をしながら調査・研究、発表へと進めていきたい。毎年、同じ繰り返しとなるが、指導を進めていく中で絶対に欠かすことのできない取り組みであると考え。



生徒の世界を広げるための NIE

兵庫県立洲本高等学校 校長 下條 謙一郎
教諭 大石 昇平

1 本校の概要

(1) 本校の状況

本校は、2025 年に創立 128 年目を迎える淡路島にある普通科高校である。洲本高校の前身である明治 30 年創立の洲本中学校の校訓「至誠・自治」と、明治 36 年創立の淡路高等女学校の校訓「勤勉」、さらに昭和 23 年、兵庫県立洲本高等学校発足時の「親和」を加えた「至誠・自治・勤勉・親和」を校訓としている。

2024 年度は全学年 6 クラスの構成となっており、各学年には特色型選抜で入学してきた「総合探究類型」の生徒が最大 24 名在籍している。それらの生徒は、通常の授業に加え、大学や研究機関と連携して探究活動を行っている。具体的には、1 年次には神戸大学内海域環境教育センター、兵庫県立大学工学部、兵庫県立大学西はりま天文台等での実習や見学、2 年次には「未来探究東京ツアー」と題して筑波大学での実習や、本校卒業生が勤める企業等への訪問を行っている。

また、2024 年度からは、HYOGO グローバルリーダー育成プロジェクトにおける「ひょうご リーダーハイスクール」に指定され、これまで以上に大学・地域・関係機関等と連携し、先進的・創造的な探究活動を行っている。

本校での NIE 活動は、この「ひょうごリーダーハイスクール」としての取り組みも一部兼ねている。

(2) 本校生徒の現状と

NIE 実践指定校申請までの背景

本校生徒の進学意識は強く、毎年 8 割以上の生徒が大学進学を選択しているが、受験対策にも新聞が有効なのではないかという声が

教員間で上がるようになった。2025 年度大学入学共通テスト試作問題等を見ると、教科を問わず複数の文章や資料から問題が構成されており、それらを読み解き、比較することも求められている。それに対し、教員間では、文章や資料を読むことを苦手としている生徒が多いという印象を持っていた。授業以外でも、新聞記事に触れることで、生徒の読解力の向上を期待することができると考えた。

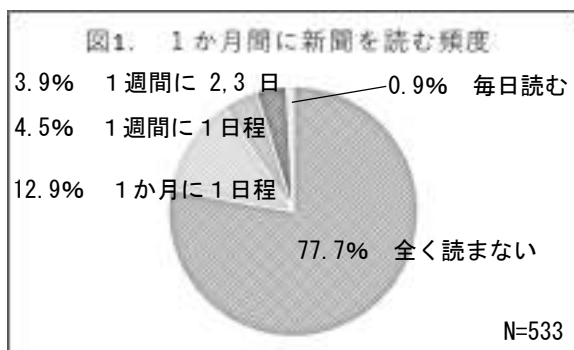
大学入試に直結すると思われる勉強や模試への関心を強く示す生徒が一定層いる一方で、時事問題への興味や幅広い教養を育もうとする意識は生徒の間で低い印象である。特に、日頃から活字に触れる生徒の数は、教員が期待する程多くはない。NIE 実践指定校に認定される以前に、本校図書員会が実施したアンケート調査によれば、「新聞を読んでいる？」という質問に対し、「はい」と答えたのは全体の 8 %、「たまに」と答えたのが 2 %、「いいえ」と答えたのが 90 %という結果であった。このようなデータを目の当たりにし、活字に触れて読むことを習慣化する必要があるのではないかという問題意識を教員同士で持つようになった。

以上のように、生徒が新聞を読むことによって、共通テストに向けた読解力の向上、そして、時事問題への興味の高まり、さらには現代的な諸課題への意識も高まることを期待するようになった。つまり、新聞を通して、生徒が進路の可能性を広げ、また、自身の見ている世界を広げることに期待し、NIE 実践指定校の申請を行うことにした。

2 実践指定校としての取り組み

(1) NIE コーナーの設置

実践指定校としての取り組みを開始するにあたり、長期的には先述のような力の育成を目標としていたが、短期的には「新聞にふれる生徒を増やす」ことを目標とした。というのも、実践指定校認定後に改めて全校生徒にアンケートを取ったところ、図1のように新聞を「全く読まない」生徒が全体の7割以上である一方、「毎日読む」と回答した生徒は約1%に過ぎなかった。



このような結果を受け、職員室前に写真1のようなNIEコーナーを設置し、生徒が新聞を閲覧できるスペースを設けた。



とはいえ、置いているだけではなかなか手に取る生徒も少ないのが現状であった。そこで、2年生の「公共」担当教員が、「新聞で為替を調べて報告する」という課題を設定した。すると、日替わりで生徒が為替を調べに来るようになり、放課後まで新聞が手つかずに終わるという状況はなくなっていった。

また、読み終えた新聞は学校図書館で閲覧できるようにストックしていった。

(2) 「洲高かわら版」

長期的な読解力等の向上を目指すための取り組みとして、洲本高校版 NIE タイムとして「洲高かわら版」を実施することにした。本校では1時間目が始まる前の10分間をいわゆる「朝読」の時間としており、その内の1日(木曜日)だけ、全校生が新聞を読む時間を読むようにしたのである。新聞記事はスキャンで取り込みデジタルデータにし、ワークシートに加工して「ロイロノート」を通じて全校生にデジタル配信し、1年間で合計20回実施した。

生徒の読む記事は、地歴・公民科の教員が中心に選択してワークシートを準備していった。記事を選ぶ際には、①5、6分程度で読めるもの、②話題性のあるもの、③予備知識がなくても読めるもの、④生徒が興味を持って発展的に学習してくれそうなもの、⑤硬すぎず柔らか過ぎないもの、といった基準を総合的に考慮するようにした。そして、記事を読むだけではなく、ワークシートには2、3題の「ミッション」を用意した。記事を読み、その内容を確認したり、まとめたりする役割のミッションを1題か2題、そして、記事に対する自分の意見をまとめる役割のミッションが1題である。前者は、共通テストのような4択で確認するもの、後者は2、3行でまとめたり、時には周囲のクラスメイトと口頭で意見交換を指示したりする場合もあった。

たとえば、1回目の「洲高かわら版」には、神戸新聞 2024 年 4 月 25 日朝刊 1 面に掲載された人口戦略会議発表の「消滅可能性都市」に関する記事を選んだ。この記事に対し、次のようなミッションを用意した。

- | | |
|--------|---|
| ミッション1 | 「人口戦略会議」が自治体の「消滅の可能性」を判断する基準は？ |
| ミッション2 | 淡路島の中で消滅可能性があると指摘された自治体は？ |
| ミッション3 | あなたが淡路島で暮らしていて、人口の増減を感じることはありますか？ それはどんな時ですか？ |

ミッション1・2は記事の内容を確認するミッションである。特にミッション2は、私たちの暮らす地元自治体も消滅可能性都市に含まれていることを生徒に意識してもらうためのものである。そして、ミッション3は、生徒が記事で指摘されているような内容と実体験を結び付けて気づくことに期待して設定した。

また、紙面全体から情報を探し出すことを目的とした回を設定したこともあった。2回目の「洲高かわら版」では、神戸新聞 2024 年 5 月 30 日朝刊 24 面の「ひょうご総合」紙面を題材に、次のようなミッションを設定した。

ミッション1 「俳優 キムラ緑子さん 故郷・洲本にライブハウス」のような新聞記事のタイトルを「見出し」と呼びます。

「見出し」を○で囲ってみよう。

ミッション2 この紙面の中に記事は何個ある？全て数えてみよう。

ミッション3 この紙面の中で自分の「推し記事」を1つ選び、その見出しを書き出そう。

おまけミッション ○×クイズ：キムラ緑さんは洲本高校の卒業生である。

普段新聞に触れていない生徒の多くは、「見出し」を知らないと考えられたため、ミッション1のような課題を設定した。次に、ミッション2の記事の数を数える課題は、NIEセミナーでもご紹介いただいたワークを取り入れた。ゲーム性もありながら、情報のまとまりを見分けるワークとして、生徒にも好評なミッションの1つであった。そして、ミッション3は自分の興味・関心に合わせて記事を選び、クラスメイトと意見交換できるように準備したミッションである。最後の“おまけミッション”については、この紙面に本校卒業生である俳優のキムラ緑さんが洲本市にライブハウスをオープンしたという記事があったため設定したものである。

いずれの回についても、終了3分前を目安にロイロノートから模範解答を配信した。記事の内容を確認する4択のミッションや文を

抜き出すミッションについては1つの答えがあるため、解答を明示するようにした。しかし、それぞれの考え方を尋ねるようなミッションについては、様々な考え方があることを示しながら、さらに生徒が考えを深められるようなメッセージを記すように心がけた。

たとえば、第20回の「かわら版」では、発売が予定されている「ニンテンドースイッチ2」を題材にした『「転売ヤー」対策あの手この手』（毎日新聞 2025 年 2 月 8 日朝刊）という記事を紹介した。記事中には転売行為に対する肯定・否定意見がそれぞれ紹介されており、そのうえで、次のような質問をミッション2として生徒に投げかけた。

ミッション2 あなたの友人が、Nintendo Switch2 を定価の2倍の値段で転売しようとしているとします。その友人に、あなたは何と声をかけますか？

そして、このミッションに対しては模範解答で次のようなメッセージを生徒に送った。

規制すべきなのか、どのように規制するのか。とても難しい問題です。経済学や倫理学のテーマにもなっています。興味のある人は、大竹文雄『競争者期の歩き方』という経済学者の本を読んでみてください。

ちなみに、コンサート等のチケットについては、「チケット不正転売禁止法」という法律で、不正に転売することが禁止されています。元の販売価格を超える価格での転売行為は、売る側も買う側も処罰されますので注意してください。

（3）教科指導での新聞教材の導入

それぞれの授業での取り組みとしては、先に紹介したような公共での「為替調べ」の他にも、新聞記事を資料にした授業の展開などがあった。「為替調べ」とは異なる担当者の公共や地理総合の授業では、教科書にも資料集にも載っていない新聞にしか載っていない話題を授業の導入教材として活用していた。この点については、その時に話題になっている最

新情報を活字で読みながら考えることで、生徒にも新聞の有効性を感じてもらえたと感じている。

(4) 記者派遣事業

2025年2月6日(木)、記者派遣事業として共同通信神戸支局の伊藤愛莉記者にお越しいただき、「新聞記者の仕事」という演題でご講演いただいた。2024年度のNIEセミナーでの伊藤記者のお話を拝聴し、是非とも本校生徒にもお話いただきたいとお願いしたところ、記者派遣事業として実現した。



伊藤記者からは、なぜ記者を目指そうと思ったのか、これまでの取材経験や、そこから感じた記者の役割など、これまでに感じ、考えてこられたことをお話しいただいた。

講演会後の生徒アンケートには、次のような感想が寄せられた。

自分の将来の職業の選択として記者というのは自分の中でなかったけど、今回伊藤さんのお話を聞いてとてもおもしろそうな職業だなと感じました。今日伊藤さんのお話を聞いて良かったです。これを機に家にある新聞を読んでみようかなと思いました。

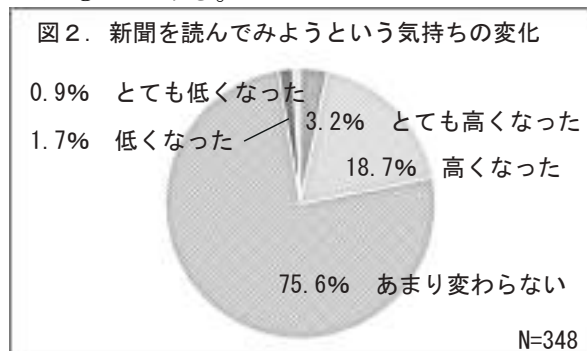
この感想のように、伊藤記者のお話によって生徒の中の「記者像」や新聞に対するイメージに変化があったことが感じられた。生徒のキャリア教育という観点からも、伊藤記者の人生経験をお話しいただいたことは生徒にとって良い刺激になったと確信している。

3 成果と今後の課題

1年間の成果として、1学期と同様のアン

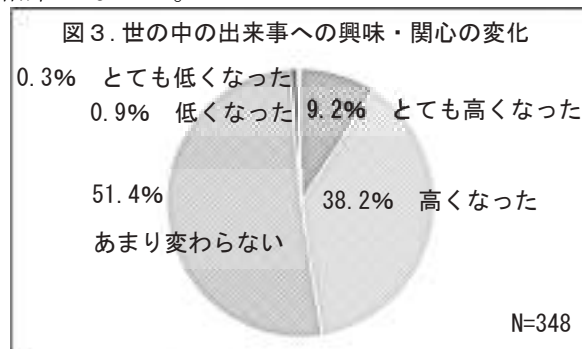
ケートを3学期にも実施した(3年生の卒業後のため、1・2年生のみ)。1か月に新聞を読む頻度は1学期とほとんど変化はなく、「全く読まない」が4%減少、「毎日読む」が0.8%上昇という結果であった。生徒が新聞に触れる回数は1年間で増えることはなかった。

3学期の調査では、1年間を振り返ってもらえるような質問も加えた。図2はそのような質問の1つであるが、1学期と比べて新聞を読んでみようという気持ちが高くなったか聞いたものである。



全体の75%は「あまり変わらない」との回答であったが、「とても高くなった」・「高くなった」を併せた肯定的な回答が約22%あった。

また、図3は1学期と比べて世の中の出来事への興味・関心が高くなったかどうかを尋ねたものである。半分以上が「あまり変わらない」であったが、「とても高くなった」・「高くなった」を併せた割合も約47%と半数に迫る結果となった。



もちろん、世間への興味・関心の変化に新聞や「かわら版」がどれほど影響したかは特定できない。しかし、生徒の世界は広がっている真っ只中なのかもしれない。新聞を通じてさらに生徒の世界を広げられるよう、次年度もNIE活動を展開していきたい。

定時制高校での NIE 活動

兵庫県立湊川高等学校

校長

前川 裕史

教諭

住本 拓自

1 はじめに

本校は神戸市にある1学年2クラスで生徒数約90名の定時制高校である。経済的な理由から、昼間アルバイト等を行い家計を支えたり、中学校時代に不登校を経験していたり、基礎学力面で課題があるといったような様々な困難を抱えている生徒が数多くいる。

そういった現状を踏まえて、2024年度、大きく4点のことに重点的に取り組んでいる。

1つ目は、2024年度から副担任制を導入し、担任と副担任がクラスを担当することで、生徒に手厚い支援ができるような体制をつくっている。

2つ目は、すべての生徒にわかりやすい授業を目指し、「タイムタイマー」をすべての授業教室に設置することで、時間の管理が行いやすいような環境を整備している。

3つ目は、一人一人の状況や希望に応じて、学習や生活における困難の改善や克服を目的とした通級指導の実施、生活する上で日本語に不安がある生徒に対しての日本語指導の実施など、生徒の困りごとを解消できるような指導を行っている。

4つ目は、新聞の活用。多くの生徒は新聞に馴染みがない状況ではあるが、2024.2025年度に実践校指定となり、新聞を教育活動に用いた授業改善、授業力向上を目指して、学校全体で魅力ある授業づくりに取り組んだ。

各教室に設置している
タイムタイマー
(右写真)



2 実践の内容

(1) NIE 推進プロジェクトチームの結成

NIEの活動を学校全体で行うため、4月にプロジェクトチームが立ち上げられ、委員として校長、教頭、および4名の教員が委員を務めることになった。

(2) 事前アンケートから見る現状

(1) 本校(かていうて新聞(しんぶん)を購入(かう)していますか？
☐購入している ☐購入していない ☐わからない

(2) (1)で「購入している」と答えた人のみ答えてください。どの新聞を購入していますか？(複数回答可)
☐朝日新聞(あさひしんぶん) ☐毎日新聞(まいにちしんぶん)
☐読売新聞(よみうりしんぶん) ☐産経新聞(さんけいしんぶん)
☐山手新聞(やまてしんぶん) ☐神戸新聞(こうべしんぶん)
☐その他 ☐わからない

(3) これまで、新聞(しんぶん)を読(よ)む機会(きかい)はありましたか？
☐毎日、ほとんど毎日(まいにち)読んでいる ☐頻回、時々(ときどき)読んでいる
☐頻回、全く読んでいない ☐今まで一度も読んだことがない

(4) (3)で「読んだ」と答えた人のみ答えてください。どんな内容(りよう)の記事(きぎ)を中心に読みますか？(複数回答可)
☐事件(じけん) ☐政治(せいじ) ☐地域(ちいき) ☐テレビ欄(らん)
☐その他

(5) 新聞(しんぶん)について、どのようなイメージを持っていますか？

(6) 時事(じじ)ニュース(ニュース)＝世(よ)の中(なか)の(なか)の情報(じょうほう)は、週(しゅう)にどのくらいのペースで確認(かくにん)していますか？
回答(こたへ)例(れい)：「テレビのニュース番組(ばんぐみ)」、「ネットニュース」など
☐ほぼ毎日(まいにち)確認(かくにん)している(週(しゅう)に1回以上)
☐よく確認(かくにん)している(週(しゅう)に2回以上)
☐時々(ときどき)確認(かくにん)している(週(しゅう)に3回以上)
☐たまに確認(かくにん)している(週(しゅう)に1回以上)
☐全く確認(かくにん)していない

(7) 時事(じじ)ニュース(ニュース)の情報は、何(なん)で見(み)ますか？(複数回答可)
☐スマホ ☐パソコン ☐テレビ ☐ラジオ
☐その他(雑誌(ざっし)、人(ひと)から聞(き)いたなど)

(8) (7)で「スマホ」、「パソコン」と答えた人(ひと)のみ答えてください。何(なん)に何(なん)を渡(わた)って、時事(じじ)ニュース(ニュース)の情報(じょうほう)を見(み)ていますか？
☐SNS ☐ネットニュース ☐ネット新聞 ☐その他

(9) 読(よ)む情報(じょうほう)について、誰(たれ)かに聞(き)く機会(きかい)はありますか？(複数回答可)
☐友人(ゆうじん) ☐家族(かぞ) ☐アルバイト先 ☐その他の人(ひと)あまり聞(き)かない

上記の事前アンケートを4月19日の4時間目のLHRにて全校生徒を対象に実施した。その結果をまとめると、大きく4点の現状、課題が見えてきた。

- ① 8割近くの生徒が、新聞が家(いえ)にない環境(かんげい)にあり、なじみがない。
- ② 新聞に対するマイナスイメージとして、「文字(ふ)がたくさんあって読みにくい」、「堅(かた)苦(く)しい」

といった回答が複数あった。

- ③ 時事ニュースを確認する頻度について、半数以上が週1回以下しか確認していない。
- ④ 時事ニュースの確認する方法は、生徒の7割近くがスマホで、SNSから情報を得ている。

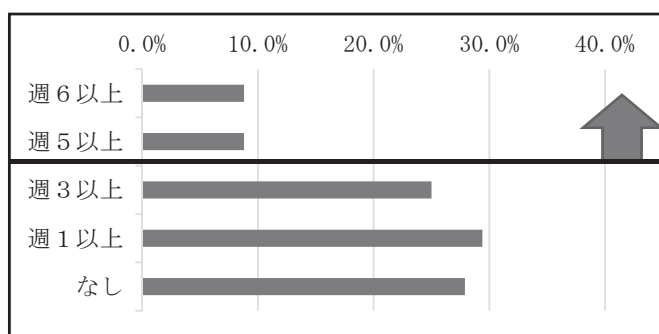
以上の内容を踏まえて、下記のような目標を設定した。

目標

新聞を通して、世の中の出来事や様々な課題、多様な考え方に触れることで、新たな「気づき」を自分の中に発見し、主体的に考え表現し自ら発信する能力を育成する。

数値目標

事前アンケートの質問（6）で、「週に5日以上確認している」の割合を、2年間で50%以上にする（まずは今年1年間で30%以上）



そして、この目標を実現するために、プロジェクトチーム内で相談し、3点のことに取り組むことになった。

- ① LHR やコグトレ(集中力を鍛えるトレーニング)で活用できる新聞を活用した教材をプロジェクトチームで作成し、教員間で共有する。
→新聞記事に触れる機会を作ること、読み方を習得し、新聞を活用できる力を身に着ける。
- ② 職員室前の掲示板に、月に1回ペースで新聞記事にコメントをつけて掲示する。
→時事ニュースへの興味関心を高める。
- ③ 新聞を活用した授業を、必要に応じて各教科で実施する。
→世の中の出来事や課題にふれる機会をもつ。



(3) コグトレ用教材の作成例(「タイトル」)

- ・「チョコレートが抱える問題」(自分の意見)
- ・「食べられるロボット」(新聞の読み方、内容理解)
- ・「島を開拓しよう!」(内容理解、想像力)
- ・「6コマ漫画」(コメントを考える)
- ・「くれよんきんぐ」(想像力)
- ・「クロマグロの漁獲枠拡大」(言葉探し)
- ・ナンスケ(パズル)
- ・「もし1億円があたったら…」(想像力、表現力)
- ・「蚊の数字をたどる」(集中力)
- ・「若者ことわざ」(言語理解力を養う、語彙を広げる)
- ・「人生案内」(内容理解、他者の気持ちを考える)



(4) 学年、教科での取り組み例

2学年

- ・二年生の Google Classroom には NHK 1 分間ニュースの URL を毎日貼り付けています。

地歴公民科

・公共の授業で、時事問題として（総裁選、首相選出、知事選挙、知事問題、アメリカ大統領選挙、物価、コメ問題など）定期的に、新聞やニュースの内容を取り上げた。

理科

・科学と人間生活の授業において、プリントで「アルミ缶の再生について」の新聞記事を提示し、記事の内容について各自が問いに答えることで授業内容を補った。化学基礎の授業において「温度のセ氏とカ氏って何」の新聞記事を提示し、記事の内容について各自が問いに答えることで授業内容を補った。

保健体育科

・保健の時間で、道路交通法改正で、自転車が飲酒運転の罰則対象になることや、自転車のながらスマホ運転も罰則対象になることを説明する際に取り上げた。

（５）NIE 研究指定校 公開授業

授業公開週間が 2024 年 11 月 18 日～22 日に実施される中で、NIE の公開授業を 19 日に行った。2 時間目、3 年 1 組 10 名の歴史総合の授業において、住本拓自が授業担当者として、「東西冷戦中の変化」をテーマに、第二次世界大戦後、米国とソ連を軸に展開された冷戦の概要や歴史を説明し、北大西洋条約機構（NATO）の拡大と、ロシアによるウクライナ侵攻の関係を考えた。その中で紹介したのが、校内専用の共有フォルダーにあった『トランプ次期大統領がロシアのプーチン大統領と電話会談』と米報道」（ロシア側は会談実施を否定）の記事。神戸新聞の 11 月 12 日付朝刊に掲載された原稿で、東西冷戦と現在の国際情勢が繋がっているということを理解することを目的に活用した。

【生徒の振り返り】（数名分）

「ドイツは今是一个の国で資本主義だけど、昔は東か西でだいぶ違ったりとか食べる物も

安いのがっかり食べたりしていたんだなと思いました。」「冷戦でアメリカとソ連の関係はどういう状況だったのか、キューバでどんな事があったのかわかりました」「アメリカの大統領が、いまだに核兵器を発射する命令をすぐに出せるように、SP にスイッチの入ったカバンを持たせているという話を聞いて、びっくりした」



（６）記者派遣事業

2024 年 9 月 13 日、神戸新聞 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーと、神戸新聞報道部の津谷治英記者にお越しいたき、3 年生沖縄修学旅行の事前学習として、3 年生 19 名を対象に LHR の時間に出前授業を実施した。

内容は、沖縄戦の話を中心に、沖縄（琉球王国）の歴史や兵庫との関わりについてお話しいただいた。三好様からは、動画、スライドを示しながら、琉球王国からの沖縄の歴史の概要や沖縄戦で多くの兵庫県出身者が戦火に散り、戦前・戦後を通じて沖縄県と兵庫県には深いつながりがあるということをお伝えいただいた。津谷様からは、島田叡知事のエピソードを、新聞記事をもとに説明していただいた。特に、死を覚悟して赴任し、生命保護に尽力する話は、生徒の心に大きく残ったようで、沖縄県と兵庫県にそのような歴史があったことを初めて知る生徒がほとんどで、修学旅行に向けて、意識を高めることができた。



3 今後の課題と展望

(1) 事後アンケートから見る現状

事後アンケート（１）の質問について

4月の時と比べて、約40%の生徒が新聞に触れる機会が「とても増えた」、「少し増えた」を選択しているという点で、成果があった。その一方、残りの約60%の生徒には変化がなかったり、減少したりしているという点で、今後の課題がみえた。

事後アンケート（５）の質問（数値目標）について

— 106 —

【 特 別 支 援 学 校 】

新聞を通して 見る 聞く 知る 伝える力を 身に付け社会とつながる

兵庫県立のじぎく特別支援学校 校長 田邊 勝彦
教諭 藤本 友美

1 はじめに

本校は、2023 年度より 2 年間 NIE の実践校として NIE 教育に取り組んできた。

1 年目は「新聞を活用して見る・知る・聞く・伝える力をつける」を研究テーマに、基礎力の向上に努めた。まず新聞を「めくる・見る」段階から始め、「分からないことを聞く」そして「身近な地域のニュースを知る」「気になるニュースを伝える」とスモールステップで徐々に段階を上げながら進めた。そして、最終的には個人で宿泊学習新聞を作ることができた。

しかし障害特性として興味関心に偏りがある生徒が多く、同じような記事ばかりを選んでしまうという課題や、そもそも読解力に課題がある生徒が多く、新聞記事を「読んで内容を理解すること」自体に課題があることが分かった。

実践 2 年目になる今年度は、より主体的に生徒たちが新聞記事を読み、日常生活に活かしていけるような授業を展開したいと考えた。また、卒業後地域社会で生活していく生徒たちにとって地域とのつながりは必須である。そこで今年度は「新聞でつながる」をテーマに実践を行った。「新聞を使って様々な人とつながる、伝える力を高める」を目標に掲げ、実践を行った。そして、新聞作成の形態も個人の新聞からグループで作る新聞へ、学校内から地域社会を取材するような新聞へと段階的に作成できるような授業展開を行った。

2 実践の内容

(1) 修学旅行新聞の作成

修学旅行で行ったユニバーサルスタジオジ

ャパンの「おすすめ乗り物ランキング」を話し合いで決めて、壁新聞形式にして下級生を対象に発表することにした。また、見出しや袖見出しも話し合いで考えることにした。最初は意見がまとまらず、おすすめの乗り物を決めるのにも意見が割れた。そこで編集会議と称して話し合いの仕方を学習し、司会者を決めて話し合いを進めたことで、意見をまとめることができた。また今までは個人で新聞を作成していたが、初めて 4, 5 人のグループで新聞を作成した。意見をまとめて、1 枚の新聞を作成することの難しさはあったが、その分仕上げた時の喜びは大きく、修学旅行報告会では自信を持って下級生を対象に発表することができた。



(2) 給食新聞の作成

修学旅行新聞で、4, 5 人で 1 枚の壁新聞を作成することができたので、次は 13 人のグループで 1 枚の新聞を作ることに挑戦しようと考えた。また前は手書きの壁新聞であったが、今回は取材メモをパソコン入力し記事を作成し、Teams を介してそれぞれの記事を提出し 1 枚の新聞にすることにした。11 月に三木北高校と SDG s を題材とした NIE 交流をす

ることになっており、一番身近な SDG s として「給食」を取り上げることにした。

まず全員で、給食に関する疑問点や質問事項を考えた。あくまで SDG s の観点で質問を考えることとし、「給食の食べ残しはどれくらいありますか」や「兵庫県産の野菜や魚は利用されていますか」等の質問を考えることができた。次に取材と称し、栄養教諭に直接質問しメモをとる授業を設定した。聞きながら要点を簡潔に書くというメモの取り方に苦戦したが、メモの取り方を学習する良い機会となった。入力に関しては、問題なく入力することができた。完成した新聞は、校内各所に掲示した。

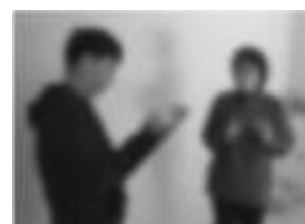
給食という身近なものを題材としたことで、生徒たちは意欲的に学習に取り組むことができた。また、①質問を考える②取材をする③聞きながらメモをとる④Teams を介して記事を入力するという新聞作成の一連の流れを理解することができた。



(3) SDG s 新聞の作成

給食新聞と同じく、Teams を使って記事入力し、1 枚の新聞に仕上げることにした。前回

は栄養教諭のみにインタビューを行ったが、今回は、校長・教頭・保健室・事務室・他学年の各先生方に協力を依頼し、「SDG s について個人で取り組んでいることはありますか？」とインタビューを行った。普段関わることが少ない管理職や他学年の教師、事務室の方にインタビューすることは、コミュニケーションに課題を抱える本校の生徒にとっては難しいことであったが、相手が聞き取りやすい声の大きさと質問する等、各自が工夫して取り組むことができた。前回の給食新聞と比べてメモの取り方が上達した。入力に関しては、情報の時間に学習していたため問題なくスムーズに行うことができた。



(4) 三木北交流

2024 年 11 月 1 日 (金) に兵庫県立三木北高校の 1 年生と NIE 交流を行った。内容は、正平調を読んでワークシートを完成させることと、新聞記事から SDG s に関する記事を選び付箋を貼る「ぺたっと SDG s」であった。

この交流授業に向けて、1 学期末から SDG s に関してグループの授業で学習を重ねてきた。生徒たちは最初 SDG s について難しく感じたようだが、給食新聞や SDG s 新聞の作成を通して、SDG s は身近なものであるという認識が浸透し、SDG s に関する記事を探すこともスムーズに探すことができるようになった。当日も三木北高校の生徒と協力して SDG s に関する記事を探すことができた。交流の当日は、こちらの想像以上に三木北高校の生徒とコミュニ

ケーションをとりながらワークシートや「ぺたっとSDGs」に取り組むことができた。

三木北高校とは、以前から生徒会やサッカー部の交流があったが、NIEの実践を通してまた1つ新しいつながりができた。

三木北高校の生徒の感想

- ・のじぎくの皆さんからSDGsのことをたくさん教えていただいて、勉強になり作業も楽しくできました。1部の新聞でも、多くの記事がSDGsに関連していておもしろかったです。
- ・みんなでワイワイしながらできてよかったです。
- ・新聞は家で取っていないので、普段あまり見ないから思っていたより難しくて、何回か新聞を変えたりしたけど、あまりできなかったです。
- ・私は普段、あまり新聞を読まないのですが、今回SDGsと新聞がつながっていたことに驚きです。SDGsが半分くらい書いてあったので、改めてSDGsについて学びました。

のじぎくの生徒の感想

- ・交流して楽しかったです。また交流したいです。
- ・チームで協力して調べたり探したりするのが楽しかったです。



(5) エフピコ出前授業

SDGsに関する学習を進めていくうちに、生徒たちからもっとSDGsに関する学習を深めたいという声が聞かれるようになった。そこで、「小野市とエフピコトレー再利用で協定」という記事を提示したところ、非常に興味を持った。その理由として、自分たちが住んでいる市の取り組みであったことと、本校の卒業生がエフピコに就労していることもあり、身近な企業であったことが挙げられる。

実際に、この記事の中に出てくる、小野市とエフピコが共同制作したエコトレーを持ってきて見せたところ、トレーの裏面に印刷してあるマークに疑問を感じ、調べることになった。



そして、そのうちに「エコトレーとは？」という疑問に到り、実際にエフピコの方に来て頂いて、エフピコ式のリサイクルに関する講義を受けることになった。

講義終了後、学んだことをもとにトレーのリサイクルを呼びかける新聞を作成した。大

見出しと袖見出しを考え、内容も生徒たちで考え完成することができた。家庭でもトレーのリサイクルに取り組む生徒が増え、学んだことを実生活に活かすことができた。



（６）新聞でつながる

以上（１）から（４）の NIE の実践を通して、高等部全体、学年以外の教員、給食室、事務室等、三木北高校、エフピコという様に、つながりを広げることができた。インタビューを行ったことで新しい人間関係ができ、完成した新聞を見て声をかけられることが多くなった。

（７）おわりに ～２年間のまとめ～

実践１年目は、段階的に課題を設定し、新聞を「見る・聞く・知る・伝える力」を付けることを目標とした。その力を基に２年目は発展的課題として、生徒自らが取材し記事にし、協力して１枚の新聞に仕上げることを目標とし

た。その際、スモールステップで進めることに注力した。本校は、知的障害を有する生徒が在籍する学校であるため、理解することに時間を要する。スモールステップで課題を段階的に設定し、合理的配慮とした。

スモールステップで

- ①手書きで個人新聞を作成する（枠あり）
- ②手書きで個人新聞を作成する（枠なし）
- ③手書きでグループ壁新聞を作成する。
- ④パソコンで取材した記事を入力し Teams を使って１枚のグループ新聞を作成する。
- ⑤見出しから構成まで考えて、Team を使って１枚のグループ新聞を作成する。

成果としては

- ・新聞が身近なものになり、ニュースについて話をする生徒が増えた。
- ・短い記事を読んで、聞かれたことに答えられるようになった。
- ・表現力がついた。→修学旅行の短歌を明石市と丹波市に投稿した
- ・熟語の意味を類推できるようになった。
- ・話し合いの仕方やメモの取り方が上達した。
- ・分からないことを探究したいという気持ちが出てきた。
- ・SDG s を自分のこととしてとらえ実践できるようになった。

以上、NIE の実践を通して卒業後社会で生きていくために必要な「見る・聞く・知る・伝える・つながる力」を身に付けることができた。この力は、必ずやこの先、生徒たちが生きていく上で彼らを支える力となると確信している。



【兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校】

新聞活用を通じた自己決定力の向上

明石市立高丘中学校 校長 米村 貴之

1 はじめに

明石市は、東経 135 度の日本標準時子午線上にあり、阪神都市圏と播磨都市圏が接するところに位置する。東西約 15 キロ、南北は約 9 キロと、東西に細長い地形をしている市である。東播台地の東端に位置し、山地がなく、平坦な地形をしている。

気候は温暖で晴天が多く、降水量も比較的小さい、過ごしやすい気候と言える。また、瀬戸内海と面しているため漁業が盛んであり、明石駅に隣接する「魚の棚」では明石鯛や明石蛸など、新鮮な魚介類を扱っている店舗が軒を連ねている。

そんな中、本校は 1975 年に開校し、50 周年を迎える。2021 年には明石市初の小中一貫教育校として新たなスタートを切ったところであり、今年度で 4 年が終わろうとしている。小学校とは敷地を同じくしない施設併設型ではあるが、通学区域特認校制度により市内全域を校区とすることで、本校の教育を希望する児童生徒は受けることができるという形で開校した。



本校はもともと市内では小規模校であり、今年度も全校生徒 377 人で 1 年生 5 クラス、2 年生 4 クラス、3 年生 4 クラス、特別支援学級 3 クラスである。

23 年度、NIE に指定を受ける前から、本校においては地域の新聞取扱店様のご厚意によ

り、神戸新聞をはじめとして、新聞数紙を各クラスに配付できており、新聞に親しむ土壌があった。しかし、そのような環境の中、彼らの受け取る情報や話題は新聞からではなく、インターネット・SNS が中心であった。もちろん、それらの情報は即時的であり、タイムリーなものではあるが、昨今のメディアリテラシーの観点からも、新聞を取り入れた活動を行い、正確性や情報選択能力を見に付けさせることを目的として取り組んできた。

2 実践報告

今年度は 23 年度の取り組みを基本的に継続すると同時に発展させ、本校が 23 年度から市の指定を受けて取り組んでいる生徒指導の研究とも連携させていくことを考えた。生徒指導の研究は「生徒指導提要」に挙げられた生徒指導の実践上の視点「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の情勢」という 4 つをテーマに取り組んだが、特に「自己決定の場」を授業に取り入れることを推進した。授業外においても、このたびの新聞を活用することでさらにその「場」を広げようと試みた。

【おすすめ記事紹介】

23 年度から取り組んでいるおすすめ記事紹介である。1 週間ごとにクラスの中で順番を決め、その週の間に気になった記事をみなに紹介するというものである。今年度は上にも書いたように、自己決定をさせるということに重きを置いた。生徒全体に向けて「今年は教育活動の中で自己決定の場面を多く設ける」ことを校長が宣言し、指導案においてもどこ

で自己決定を求めているかを明確にするようにした。そうして生徒に対して「自己決定」というキーワードを印象づけ、様々な場面で「自己決定」を意識させた。

それによって、23年度までと方法は同じであっても、生徒の意識が変わったように感じる。ただ新聞の記事を読むだけでなく、自分が何を選ぶのか、なぜそれを選んだのか、ということを意識させることができた。それまでは作業的に選んでいたように思えた生徒が、意味を持って選んでいることがわかる場面もあった。もちろん、すべての生徒がそうであったわけではないが、大きな成果であると思われる。



また、記事の内容もスポーツや芸能に関するものが以前は多かったが、上の写真のよう

に社会の情勢やできごとを書く生徒も多くなり、新聞を通して得る情報を自分の生活に取り入れて生かそうという意識が見える。

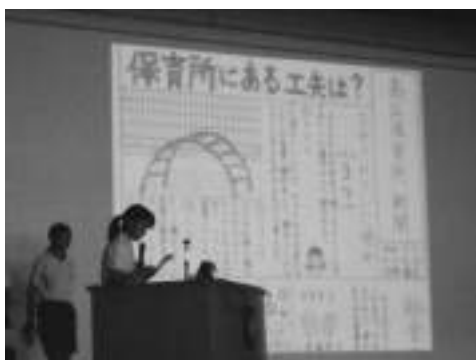
2024年度のこの取り組みは年間を通じて行い、ほとんどすべての生徒がこの取組で発表することができた。教職員も取組に対して前向きで、次年度以降も継続して行っていこうと考えている。

【トライやる・ウィーク】

これもこれまでの取り組みを継続しているものではあるが、本校ではトライやる・ウィークで体験したことを記事にまとめることを行っている。以前から新聞の形でまとめているが、2023年度から神戸新聞社 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーに協力を仰ぎ、新聞講習会を行っている。これにより、国語の授業などで行う技術・技法の修得だけでなく、さらに実践に近い技術・技法を学ぶことができています。生徒は皆この講習会を楽しみにしており、新しい知識を得られることを喜んでいる。トライやる・ウィーク前と後にそれぞれ実施し、新聞を作成する際に必要な力を育成することができている。



2024年度は、それをさらに発展させ、作成した新聞の発表会を催した。発表会の指導においても他と同様に「自己決定」を意識させ、発表の中にそういった内容を盛り込みながら皆に伝える姿を見ることもできた。ただ、次年度以降にも継続していきたいと考えているが、授業時数の確保の観点からいうと、2年生は「総合的な学習の時間」が新聞以外の「トライやる・ウィーク」の取り組みで取られてしまうため、難しいのが現状である。



【環境の整備】

NIEの取り組みを行う以前から新聞に触れる環境があったことは前に書いたとおりであるが、それをさらに発展させるため、昨年度から新聞に触れるためのコーナーを作っている。

また新聞に触れる機会が増えるよう生徒会が手配し、係が新聞を取りに来ることで、毎日継続的に新聞が各クラスに届くようにしている。

これによって、先に述べたおすすめ記事紹介の取り組みが実現している。



このようなスペースを設けることによって、いつでもというわけではないが、教室だけでなく、ここで新聞を手にする生徒が増えている。それによって、教師が巡回している際にも新聞の話題に触れることもできたり、教師が新聞を読んでいるところに生徒が来て記事についての話をしたりということもあった。

現在、ここは新聞を読み、NIEの取り組みに関するだけでなく、生徒の憩いの場となり、ストリートピアノを設置していることもあり、本校の文化的な部分がよくあらわれているスペースとなっている。

3 成果と課題

○成果

本校においてはもともと新聞が継続的に提供され、新聞に親しめる環境にあった。しかし、それをなかなか活用することができていない実情があった。

ところが、このたびの2年間のNIEの指定を受けたことにより、生徒はもちろん、教職員も新聞に触れることが多くなり、新聞の良さと意義をあらためて知ることになった。実際、自宅で新聞をとっていない教職員もかなり多い状況であり、それは今も変わることはない。

だからこそ、この取り組みは非常に意味があった。生徒も教職員もこのような形で新聞に触れたことのないものが多い中、有意義な活動であった。

また、今年度の最初に掲げた「自己決定力の向上」ということにおいても、一定の成果が上がったと考える。

○課題

課題として残るのはやはり教育課程とのバランスである。もちろん、すべての教育活動には意味があり、やればやるだけ生徒は成長する。それは行事などの取り組みも同様である。しかし、実際には時間は有限であり、すべてのことを最大限の形で実施できるわけではない。まずは学習指導要領に示された内容をしっかりと実施すること、そのうえでどれだけこのNIEの取組をはじめとした「さらに良い取組」を関連付けていけるか、なのである。

これまで行ってきた取り組みは、来年度以降も継続して行っていく予定ではあるが、前述のとおり、教育課程と照らして持続可能かどうかはわからない。特に、取り組みにも長い時間を要する新聞の発表会に関しては今年度もかなり教職員にも生徒にも負担があったのではないか。働き方改革の意味も含めて、多くの教育活動を見直しながら、真に良い取り組みを継続させられるように推進していきたい

と考えている。

4 おわりに

2年間、NIEの実践校として取り組みを進めてきたが、1年目の担当者が異動したことにより、小規模校であるがゆえ、あとを引き継ぐものを決めかね、1年目を踏襲することが精いっぱいであったのが大変申し訳なく感じている。そんな中でもなんとか2年間取り組んでこられたのは、NIEの皆様がとても丁寧にサポートしてくださったからだと考えている。

また、教職員も多忙な中にもかかわらず前向きに協力してくれたことも非常に力となった。

課題のところでも述べたように、すべての教育活動は子どもたちのためになり、やればやるほど成長を促すことができるが、このNIEの取り組みは、生徒がこれまでなかなか触れてこなかった、また、これからもどんどん触れなくなっていくかもしれない「新聞」というものにスポットを当てることができた、という点においても大変素晴らしいものであった。

この取り組みを通じて、自分自身もあらためて新聞の良さに気づくことができた。本校においては、これからは生徒が新聞に触れる場面を作っていくつもりであるが、彼らが卒業してからもなんらかの形で新聞というものに触れたことが生きてくると信じている。

継続的に取り組む NIE 学習

姫路市立飾磨中部中学校

校長

堀 晶子

教諭

佐伯 奈津子

1 はじめに

飾磨中部中学校は姫路市の南部に位置している。学校の南側にはかつては「飾磨津」と呼ばれる瀬戸内海を航行するうえで重要な港があり、姫路藩の外港として重要な役割を担ってきた。様々な物資が集まり、またここから各地へ運ばれて行った場所である。現在、臨海部には大規模工場が並び、産業の面は大型ショッピングモールが建ち、活気のある街である。それと同時に、花山院が書写山円教寺の性空上人に会いに行く際、渡ったとされる「御幸橋」があり歴史の薫り高い土地でもある。学校の規模としては、1年生2クラス、2年生と3年生が3クラス、特別支援学級クラスの2クラスで全校生徒 259 名の小規模校である。

2 継続的な取り組みを目指して

2024 年度に本校は兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校となり、NIE 活動に力を入れるべくさらなる活動方法はないかを考えた。

それまでも朝学活を利用して新聞記事を読み、「人権意識を高める学習」や「学習内容を新聞形式でまとめる活動」などは行っていたが、NIE 活動を推進する上で大切なことは1回限りの学習活動に終わらず、継続的に続けることであると考えている。

そこで今年度より、新聞コラムの書き写しを朝学習に取り入れたり、学級活動として終学活で、交代で1日に一人ずつ交代で新聞記事を紹介する活動を取り入れたりした。

進路を控えた3年生は進学に際し、面接試験のある生徒もあり、時事ニュースにふれることも大事な学習活動の一つである。そんな時に1日ずつ交代で、終学活で新聞記事を紹介

するという取り組みを始めた。それまで教師が選んだ記事を読むことが多かったが、自分の興味関心から記事を選び紹介することで自主的な学習活動へと変化していった。また記事のジャンルもさまざまで、いろいろな話題にふれる良い機会となったのでとても有益な時間となった。

選ばれた記事は廊下に貼りだし、後日取り組んだクラスの者はもちろん他のクラスの者もその記事を改めて読み直したりする姿も見られた。

また図書委員や学校司書による記事紹介のコーナーを設けたり、生徒や職員がより新聞記事に触れられる環境づくりを心掛けた。



その日のトップ記事を紹介



図書委員による記事紹介コーナー

3 出前授業

兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校となることで、2023 年度は新聞社の方から出前授業に複数回にわたり来ていただく機会を得ることができた。

○広島平和学習について

10 月 25 日、被爆地広島での平和学習の事前指導として 1 年生を対象に神戸新聞 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーに広島の平和学習についての出前授業をしていただいた。

三好アドバイザーは太平洋戦争時、原爆が投下されたヒロシマ・ナガサキや神戸・姫路空襲、沖縄戦などの惨状に触れ、姫路空襲の爪痕がいまも姫路市内に残っていることや、「原爆症治療の父」と呼ばれる、同市出身の都築正男博士のことも紹介した。



○高校受験対策講座

～小論文はどう書くの??～

11 月 6 日には 3 年生を対象に入学試験の小論文をどのように書けばよいか、文章のプロである新聞記者に聞こうという出前講座を実施した。

講義の中で、小論文で高校が受験生に自己 PR 文を求める理由として、高校の方針や校風に合った生徒かどうか分かること、自分を客観視できる生徒かどうか分かるかなどを挙げ、「受験生にとって自分を見つめ直すよい機会」という話もあった。

実際に自分の良いところをグループで話し合いながら作文の材料を見つけたり、日頃作

文を書くにあたって困っている疑問を新聞記者に直接ぶつけたり積極的な姿も見ることができた。



○阪神・淡路大震災 当時の様子を新聞記者に聞く

阪神・淡路大震災が起こって 30 年の 1 月 17 日に神戸新聞 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーから当時の様子を直接聞ける貴重な機会を得ることができた。

三好アドバイザーは震災当日、神戸・三宮の神戸新聞本社で宿直勤務をしていた体験などを語ってくれた。

また話の中で震災の発生直後、ラジオ関西の記者が神戸市長田区の火災現場から生中継したラジオ音声も紹介され緊迫した当時の様子を知ることができた



4 新聞と俳句

○クロヌリハイクに挑戦

「クロヌリハイク」とは、愛媛新聞販売店の所長である黒田マキさんがアメリカのアーティストのオースティン・クレオンさんの作品をもとに創案した新聞を塗りつぶして俳句を作るアートである。手順は簡単で ①季語を探す ②575 に仕立てる ③塗りつぶす という手順で作品作りをする。

塗り方もベタ塗りだけでなく、斜めに斜線を入れる方法、格子型に塗ってみる方法、線で文字を塗っていく方法などさまざまある。

新聞の中に言葉があるので、語彙が少ない生徒も手軽に俳句を作ることができる。また、塗りつぶす過程でストレス発散にもなる。出来上がった作品はフレームに入れて飾ることもでき、作品が出来上がった際、達成感や満足感を得ることができる。本校でも授業の中で取り組み、夏休みの自由課題としても出し、9月に行われたクロヌリハイクコンテストにも作品を出品し、本校の生徒が佳作をいただくことができた。



紙面を塗りつぶし、クロヌリハイク創作中



○公開授業

10月2日、2つの公開授業を行った。どちらも3年生の教室で、一つは社会科「新聞から読み取る 対立と合意」をテーマに記事を選んで意見交換をするという授業。もう一つは国語科で「N I E 俳句～記事の写真から豊かにイメージしよう～」という名前のもと記事の写真をもとに俳句を創作し、句会を行う授業である。県内各地から教員ら25人が参加し、授業後に意見交換会もあった。

～俳句をつくるにあたって～

姫路市の中学校では2024年度まで東京書籍の教科書を使用していた。俳句の学習については中学3年生時に「俳句の読み方、味わい方」で近代・現代の俳句作品に触れ、句会も体験しておりその後「奥の細道」を通して俳諧について学ぶ。小学校でも俳句の学習にも取り組んでおり、なじみのある単元である反面、作品作りに苦しんだ生徒もいたのではないかと推察できる。

今回新聞になじみがない生徒が増える一方で、新聞をめくると目を奪われるような美しい写真とたびたび出会うことがある。「この写真をたくさんの人に見てもらいたい」という思いがこみ上げるとともに、「この写真を使って何か授業ができないだろうか」と考え、毎月切り貯めた写真記事を活用して「俳句作り」をする授業を計画した。美しい写真から豊かにイメージを膨らませ、新聞記事を通して語彙が豊かにしてもらいたいというねらいを設定した。

～実践内容～

新聞の写真パネルを提示しながら、作品作りに必要な「季節」、「季語」、「どんな様子か」などを紹介し、俳句作りのヒントを与えた。そして1学期で学習した俳句の復習（「季語」「音の数え方」「切れ字」）をしたのち、記事を参考

に俳句作りをするという学習活動をした。俳句作りに苦戦する生徒には、マス目に平仮名を入れると俳句ができる補助プリントを渡し、いろいろな言葉をあてはめていくように助言をした。

最後に次の時間に句会をすることをクラス全体に伝え、自分の作った作品の中で、良いものを選ぶように伝えた。

～生徒作品～

○五月雨や 傘の花咲く 交差点



○あつい夏 闘志あふれる 甲子園

○あせなみだ 皆でながす 甲子園

○菜の花の 黄色に染まった たつの町



○白鷺城 夜空を彩る 花火かな



～授業を行ってみて～

新聞の写真を使った俳句作りをしてみて56パーセントの生徒が「新聞の写真があつていつもより俳句作りが簡単になった」と答えた。言葉だけではなく、映像から「色」や「形」を俳句の中に折り込み豊かに作品作りができたのではないかなと思う。

俳句作りで大切にしていることは「作って楽しかったという体験」や「表現の違いの面白さ」を生徒自身に実感してもらうことである。今回幸いにも授業の感想で「俳句作りが楽しかった、またしたい」という感想が多数見られた。教科書に載っている出来上がった作品ではなく、同級生の作った作品が新鮮に思えたからだろう。俳句に触れる機会が授業の中の1回だけではなく、今後の人生で何度も折に触れる機会をもてるようになってほしいと考えている。

公開授業後の意見交流会の中で、「私たちは学校や仕事といった日常生活に追われ、四季の移ろいを感じづらくなっている中、ふと新聞に目をやれば、その季節らしい写真を見つけることができ、新聞が歳時記の代わりをしてくれている。」という意見があつた。実際に出かけたりすることはできなくても、日本が持つ四季の美しさを新聞の写真を通して感じ取ってもらえたらと思う。

今回授業をするにあたって、生徒に多くの選択肢を与えたいと12枚の写真を用意したが、今後授業をするならば、もっと少ない枚数でも良いかと思った。じっくりと写真に注目し、「言葉で風景を描く」という活動を生徒たちとしていけたらと思う。

「神高探究Ⅰ」における新聞の活用

兵庫県立神戸高等学校 校長 西田 利也
教諭 桑田 克治
松井 洋平
大久 孔明

1 はじめに

本校では、2022年度から開始された「総合的な探究の時間」に向けて、本校では2017年度から「総合的な学習の時間」の中で探究的な学びを実践するプログラムを2年生の3単位実施で開始した。2021年度にはそれまでの「神高ゼミ」という名称を「神高探究」と改称し、「探究」活動を意識させた。カリキュラムが改訂された2022年度からは、1年生で「神高探究Ⅰ」1単位(0.75コマ)、2年生で「神高探究Ⅱ」2単位(1.5コマ)の時間を設定した。「神高探究Ⅰ」では1学期に基礎講座、2学期以降は担当の先生方が出したテーマに沿って班をつくり、探究活動をおこなう「プロジェクト探究Ⅰ」を実施した。2年生になると、同じ興味関心があるメンバーが集まり、自らテーマや課題を設定し、1年間かけて探究する「プロジェクト探究Ⅱ」を実施している。「プロジェクト探究Ⅰ」も「プロジェクト探究Ⅱ」も探究活動の柱である「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を通じて、他者と共に、試行錯誤しながら、能力や知識を養っていく活動を実施している。

新聞の活用については、今回「神高探究Ⅰ」を担当する地歴の教員に、新聞を活用した探究活動をテーマにあげ、そのテーマをやってみたいという5つの班に「プロジェクト探究Ⅰ」の授業の中でテーマに沿って新聞を活用し、2月の発表会でポスター発表を行った。

2 新聞の保管方法

2024年9月と10月に6紙の新聞が本校に届くようにしてもらい、図書室のラックの上

に各紙ごとに日付順に重ね、生徒はいつでも閲覧できるようにし、神高探究Ⅰの時間には図書室で各新聞を閲覧して探究活動ができるように工夫した。

3 実践方法

「神高探究Ⅰ」で新聞を活用し、深める探究のテーマは以下の通りである。

(1)メディアから見るジェンダー問題

(2)メディアから見る東アジア認識

(3)メディアから見る人権意識

(4)哲学、言語学、社会学「メディアは「事実」をどのように伝えているのか」

以上のテーマについて、(1)は2班、(2)～(4)は各1班、計5班(21名)が9月の「プロジェクト探究Ⅰ」開始から2月の発表会まで、9月、10月に届いた新聞を活用して探究活動を実践した。また、2016年～2017年に本校で実施していたNIEの実践では興味・関心ある新聞記事を切り取り、それについてコメントをする活動を実施していたが、今回はタブレットを活用し、必要な記事をデータ形式で保存して活用する方法がとることができた。

4 記者派遣事業の活用

2024年11月13日の神高探究Ⅰの授業時間を利用し、NIE記者派遣事業として、田中雄一郎・朝日新聞論説副主幹に来ていただき、該当5班の生徒と、講演ではなく質疑応答の形で実施した。田中副主幹は、事前に聞いていたテーマに関する社説をピックアップして資料を

提示され、生徒たちは、事前にテーマについて考えた質問を用意しており、活発なやりとりが行われた。生徒の探究テーマは多岐にわたっているが、田中副主幹は一つ一つ質問に丁寧に回答してくださった。5つの班がそれぞれ質問するので、予定時間を大幅に延長するほど活発な議論となった。



5 実践の内容

(1) メディアから見るジェンダー問題

(松井洋平)

「LGBTQ 知ってますか。」というタイトルの元、過去の新聞言説と現在の報道に注目して探究を行った。発表では LGBTQ に対する言及が増加した要因として、国内的には 1990 年代から日本でも行われるようになった「プライドパレード」、国際的には 2006 年に LGBTQ の人権確保を求め議決された「モントリオール宣言」に画期を求めた。本発表ではそれ以降の時代である現代で新聞がどのように言及しているのか具体例を追うことで新聞を中心とするマスメディアがどのようにジェンダー問題について言及しているのかを明らかにした。探究では男女格差について近年頻繁に言及されるようになったこと、それにもかかわらずとりわけ新聞において依然ジェンダー格差が存在する現状についての批判をし続けていることに注目している。

(2) メディアから見る東アジア認識

(松井洋平)



「メディアから見る日中韓」というタイトルで同一の事象が日本と中国、日本と韓国との間で報道のされ方がどのように違うのかを探り、それによって互いの国に対して持つ意識の考察を行った。調査方法としては、日中韓の新聞に直接あたり、それらの記述を比較することでそれぞれの国の認識を明らかにした。探究の結果、同じ事象でも安全保障などでは各国とも自国を肯定的に報じ、内容も自国に都合がよいように取捨選択する傾向があり、歴史認識にかかわるような内容では両者とも他国に対する配慮がみられる場合があるという結果を提示した。



(3) メディアから見る人権意識(松井洋平)

本テーマについては2つの班が担当をした。ただし両班とも直接人権意識を探るのではな

く、メディアの報道方法が人権侵害につながっている可能性を考え、報道手法自体が抱える問題点をまず洗い出すことが重要であると考えた。その結果、両班とも当初よりテーマを変更した。もう1つの班は「日本語の特性と報道の関係」というタイトルで他の言語と比較して日本語が抱える特性がどのように報道に影響しているのかを探った。

「ネットは果たして悪なのか」というテーマに変更して考察を行った班は兵庫知事選をテーマにテレビ報道、新聞、SNSの違いを比較検討した。とりわけ新聞については選挙報道においてほかのメディアに比べて客観的かつ公平であるという特徴をみいだした。一方でテレビ・新聞などのいわゆる「オールドメディア」とインターネット言論がお互いに敵視しあう対立構図そのものが抱える問題点に言及し、お互いのメディアが一方向的に敵視しあう現状は不健全であり、それぞれのメディアの特性を認めあうことでより良いメディア報道が生まれるのではないかと建設的な考察を行った。

正に報道をとらえるためにはむしろ日本語の特性を理解して報道に接した方がよいのではないかという問題意識から探究を行った。調査手法としては複数の新聞で共通する記事を比較し、共通する言葉の使用方法を抽出した。結果、日本の新聞においては主語より述語の優先、主語の重なる回避という特性を見出し、このことによって、主語をあいまいにすることであえて中立性の高い報道が行われ、中立性の維持がなされているのではないかということ指摘した。



「日本語の特性と報道の関係」というテーマに変更して探究を行った班は、我々がより公

(4) 哲学、言語学、社会学「メディアは「事実」をどのように伝えているのか」(大久孔明)

① テーマ設定の目的

新聞がある出来事をどのように報じているかを検討することを通じて、伝え方の違いの原因や課題等を考察する。その際、どのような学問領域からアプローチするかを意識させるため、「哲学、言語学、社会学」という表現を冒頭に付している。これは、2年生の探究活動のテーマ設定や進路選択に役立たせたいという意図もある。

② 探究活動の展開

ア テーマ設定

提示した大テーマを基に具体的なテーマを設定させる。一定期間の新聞を基にするため、全紙に取り上げられるような題材は限られるが、その中から2024年に行われた自由民主党総裁選を題材とする

「2024 年度 NIE 兵庫セミナー」チラシ

2024年度NIE兵庫セミナー

Newspaper in Education (教育に新聞を)

◆目的 授業での新聞活用について、研修・研鑽を深める

◆日時 2024年7月5日(金) 午後1時30分～4時30分

◆会場 神戸新聞本社14階4・5会議室
〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7
J R 神戸駅から南へ徒歩約6分 高速神戸駅から南へ徒歩約10分
市営地下鉄ハーバーランド駅から南へ徒歩約6分

◆開会挨拶 兵庫県NIE推進協議会 竹内 弘明 会長

◆記者講演 「記者の仕事伝える」
共同通信社神戸支局 伊藤 愛莉 記者

◆実践事例発表 「2023年度の実践校の取り組みから」
兵庫県立のじぎく特別支援学校 藤本 友美 教諭
明石市立高丘中学校 米村 貴之 校長
甲南高等学校・中学校 足立 恵英 副校長

◆意見交換会 わが校の「NIE活動」を紹介し合い、企画を磨く
～参加者による校種別意見交換会～

参加無料
定員50人

<主催>兵庫県NIE(教育に新聞を)推進協議会

<後援>兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会 兵庫県立学校長協会
兵庫県中学校長会 兵庫県小学校長会 兵庫県私立中学高等学校連合会
朝日新聞社神戸総局 神戸新聞社 産経新聞社神戸総局 日本経済新聞社
毎日新聞神戸支局 読売新聞社神戸総局 共同通信社神戸支局 時事通信社

問い合わせ先 兵庫県NIE(教育に新聞を)推進協議会事務局
〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7 神戸新聞本社
TEL 078-362-7054 FAX 078-362-7424 e-mail hyogo-nie@kobe-np.co.jp

「2024 年度兵庫県 NIE 実践発表会」チラシと実施内容のグラフィック

(次ページグラフィックは井上幸史・日本新聞協会 NIE アドバイザー 姫路市立城北小学校教頭作成)

2024 年度 兵庫県 NIE(教育に新聞を)



実践発表会

目 的：新聞記事を使った授業実践発表を聞き、実践例について話し合い、研修・研鑽を深める。

日 時：2025 年 2 月 6 日（木） 13 時 30 分～16 時 （受付 13 時）

会 場：神戸新聞本社 14 階 神戸市中央区東川崎町 1-5-7

JR 神戸線「神戸駅」から南へ徒歩約 6 分「高速神戸駅」から南へ徒歩約 10 分

プログラム

- 開会挨拶 竹内 弘明 兵庫県 NIE 推進協議会会長
- 記者講演 「阪神・淡路大震災の記憶をつなぐ」
神戸新聞社淡路総局津名支局 中村 有沙 支局長
- 実践発表① 「主体的な学びを引き出す NIE—記者連携を通して」
甲南小学校 田代 弘子 教諭
- 実践発表② 「新聞記事から生活につながる学びを」
姫路市立あかつき中学校 伊達 実 教諭
- 実践発表③ 「探 Cue 時代を読み解く先に」
兵庫県立神戸甲北高等学校 久保 淳平 教諭
- 講 評 兵庫県教育委員会高校教育課指導主事
神戸市教育委員会教科指導課指導主事

[主 催] 兵庫県 NIE 推進協議会

[後 援] 兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会 兵庫県立学校長協会

兵庫県中学校長会 兵庫県小学校長会 兵庫県私立中学高等学校連合会

朝日新聞社神戸総局 神戸新聞社 産経新聞社神戸総局 日本経済新聞社

毎日新聞社神戸支局 読売新聞社神戸総局 共同通信社神戸支局 時事通信社

*お問い合わせ 兵庫県 NIE 推進協議会 Newspaper in Education(教育に新聞を)

〒650-8571 神戸市中央区東川崎町 1-5-7 神戸新聞社内

TEL:078-362-7054 FAX:078-362-7424 メール: hyogo-nie@kobe-np.co.jp

2025年度
兵庫県立三木高等学校
実証大会
①神戸新聞本社
14時

2025.2.6(木)

GNIEP

神戸新聞本社
2025.2.6(木)

神戸新聞本社
2025.2.6(木)

神戸新聞本社
2025.2.6(木)

神戸新聞本社
2025.2.6(木)

神戸新聞本社
2025.2.6(木)

神戸新聞本社
2025.2.6(木)

神戸新聞本社
2025.2.6(木)

実践系① 新聞記者の生活、つなぐびと

新聞記者の生活、つなぐびと

新聞記者の生活、つなぐびと

新聞記者の生活、つなぐびと

実践系② 神戸新聞本社

神戸新聞本社

神戸新聞本社

神戸新聞本社

実践系③ 神戸新聞本社

神戸新聞本社

神戸新聞本社

神戸新聞本社

実践系④ 神戸新聞本社

神戸新聞本社

神戸新聞本社

神戸新聞本社



Newspaper in Education

◇教育に新聞を◇

2024 年度 『兵庫県N I E実践報告書』

－2025 年 5 月発行－

兵庫県N I E推進協議会 編

〒650－8571

神戸市中央区東川崎町 1－5－7

神戸新聞社内

電話 078(362)7054 ファクス 078(362)7424

E-mail hyogo-nie@kobe-np.co.jp

HP <http://www8.kobe-np.co.jp/nie/hyogo/>

「教育に新聞を」実践 中学校編

- ◇「情報社会」を有利に生き抜く力を養う (神戸市立高倉中学校)
- ◇NIE ノートを通して、主権者としてのまちづくり (西宮市立浜脇中学校)
- ◇見つける、調べる、新聞形式にまとめて発表する (神戸大学附属中等教育学校)
- ◇新聞記事から生活につながる学びを (姫路市立あかつき中学校)

「教育に新聞を」実践 小・中・高等学校編

- ◇中学3年生と小学6年生が伝え合う原爆と平和 (愛徳学園小・中・高等学校)

「教育に新聞を」実践 小・中学校編

- ◇情報活用能力の育成 ～NIE タイムの取組～ (姫路市立豊富小中学校)
- ◇小中一貫校として取り組む 地域を発信する NIE 教育 (南あわじ市立沼島小中学校)

「教育に新聞を」実践 小学校編

- ◇社会的事象に対する見方・考え方を広め、
主体的に考え判断する力と伝える力の育成をはかる (神戸市立白川小学校)
- ◇新聞を活用した授業実践 ～新聞が子供たちの学びを深める～ (神戸市立鶴甲小学校)
- ◇「書く力」をつけ「発信力」につなげる (姫路市立網干西小学校)
- ◇新聞からはじまる主体的な学び (甲南小学校)
- ◇情報を活用し、自分の考えをつくる (養父市立宿南小学校)

兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校

- ◇新聞活用を通じた自己決定力の向上 (明石市立高丘中学校)
- ◇継続的に取り組む NIE 学習 (姫路市立飾磨中部中学校)
- ◇「神高探究Ⅰ」における新聞の活用 (兵庫県立神戸高等学校)